

第11回無形民俗文化財研究協議会報告書

無形文化遺産と防災

リスクマネジメントと復興サポート

2016

独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所 無形文化遺産部

序にかえて

こんにちは。所長の亀井です。本日は年末のお忙しいところを多数の方々にお集まりいただきまして本当にありがとうございます。

当研究所の無形文化遺産部では無形文化遺産の様々な課題について研究を進めています。今回の第11回協議会では、ご案内のとおり「無形文化遺産と防災」をテーマとして、今日一日各方面からの発表、及びそれらを踏まえての総合討議をさせていただく予定です。

ご承知のように、東日本大震災では無形文化遺産が人々の復興へ向けての絆、きっかけ、そういうものを生み出す底力になったことが報道されています。普段は何気ない日常生活の中で行われている各種の行事あるいは様々な伝統文化というものが、いざ災害になると人々の心を結びつけるような、コミュニティの再生に結びつくような大きな働きをするということがわかってきました。

しかし、残念ながらどこにどういう無形文化遺産があるのかということが、これまでの研究では多くわかっておりませんでした。私たちは東日本大震災を機に関係機関とともに所在の調査、それからもし何かあった場合にどうしたらいいのかということについての調査研究を開始しています。既に多くの自治体の協力を得て、指定されている、あるいは記録がある無形文化遺産に関する所在情報のデータを頂きまして、それを情報共有しようと取り組んでいるところです。

一方で、いざ災害になった時にどういうことを考えたらいいのか、どういう行動を取ったらいいのかということも、経験を積まれた方々の意見を聴きながら考えてまいりたいと思っています。

今回は、多くの方々から事例発表をいただきます。特に今回お招きした兵庫県の村上さんは、阪神・淡路大震災以降、災害に対する取り組み、復興へ向けての取り組み、様々なことを考えられて兵庫県を中心として関西圏で大きな働きをしている人です。そういう経験からも有益な話が聴けるのではないかとと思っています。

そして災害だけではなく、ご承知のように日本は縮小化社会に突入しています。今年10月の総務省の発表によりますと、全国の人口が約18万人減ったということです。出生率が1.29で、このままいくと2060年ぐらいには人口が3分2になってしまうというようなことも言われています。10年ほど前から限界集落ということも叫ばれて、人口の減少とともに住民の高齢化も進み、集落自身が成り立たないということになってきています。こうした社会的な状況の中で無形の文化を考えてみた場合に、自然災害と共通する課題があるのではないかとと思っています。

今日はそういう観点から、みなさんとともに考えてまいりたいと思っていますので、どうぞよろしく願います。

(平成28年度「第11回無形民俗文化財研究協議会」挨拶より)

東京文化財研究所長 亀井伸雄

目 次

序にかえて	
趣旨説明	1
第一部 報告	9
1. 岩手県大船渡市から考える無形文化遺産の防災 東 資子（一関市教育委員会）	11
2. 四国の災害特性と無形文化遺産の防災 大本 敬久（愛媛県歴史文化博物館）	25
3. 文化遺産の複製と信仰環境の維持－防犯対策の事例から－ 大河内 智之（和歌山県立博物館）	47
4. 祭礼具から考える無形文化遺産の保持 岡部 達也（宮本卯之助商店）	61
5. 問題提起 久保田 裕道（東京文化財研究所無形文化遺産部）	73
第二部 総合討議	79
コメント	80
ディスカッション	92
参考資料	105

趣旨説明

無形文化遺産と防災－魅力の発信と外からの力－

今石 みぎわ（東京文化財研究所 無形文化遺産部）

はじめに

本日はたくさんの方にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。今回は「無形文化遺産と防災－リスクマネジメントと復興サポート」というテーマにさせていただきました。

「無形文化遺産の防災」、聞き慣れない言葉かと思います。しかし東日本大震災をはじめ、近年では毎年のように豪雨や台風、あるいは火山の噴火、地震など、たくさんの災害が起きています。ついこの前も福島で津波警報が出されました。専門家によりますと、日本の国土は全世界の総面積のたった0.25%ですが、震度6以上の地震の発生率は実に20%以上を占めるとのことです。災害列島と言ってよい、非常に災害の多い国であります。

近年は特に地球が活動期に入ったとも言われ、今朝も南太平洋のソロモン諸島でマグニチュード7.8の地震があったというニュースが入ってきました。そういったかたちでどこにいても災害とは無縁ではない、そういう時代、場所に生きているということになります。

1. 文化財行政における災害への対応

その中で、文化財行政においても様々な災害への対応がなされてきました。レジュメ（文末資料）に挙げているものは国が主導してきた主だった事業ですが、まずは「文化財レスキュー事業」です。これは阪神・淡路大震災の際にはじめてこうした活動が行われ、この時に概念ができたと聞いています。それが今回、東日本大震災の折にも非常に大きな活躍をしました。東京文化財研究所に文化財レスキューの本部が置かれ、文化庁はもちろん、被災地域の各県の教育委員会あるいは文化財・美術関連団体、そうした方たちが協働して文化財の救援活動にあたりました。文化財レスキュー事業は緊急時の対応ということで、平成24年度末まで続けられました。

では、その事業の中で無形の文化遺産がどう扱われたかという点、実は当初から、無形の文化財は対象としないことが公言されていきました。それを批判しているわけではなくて、当時恐らく誰も、無形文化遺産の防災やレスキューということを考えたことがなかった、そういう非常に新しい概念だったということが言えると思うのです。ですから、無形文化遺産の被災状況の把握すらままならず、何をどうすればよいのか全く分からない状況の中で、文化財レスキュー事業においては目に見えやすく、

緊急性が高く、専門家も多い、そうした有形のものに的が絞られて文化財レスキューが行われたというのが実情だったかと思います。

加えて、私が国立文化財機構という文化財を扱う組織で仕事をしていて感じるのは、民俗文化財というのが常に異端児であり、鬼っ子としての側面を持っているということです。「文化的景観」は別ですが、その他の文化財が絶対的な価値、普遍的な価値、そういったものに照準を合わせて優品主義や厳選主義を貫いているのに対して、民俗文化財は「国民の生活の推移の理解のため欠くことのできないもの」という、価値の優劣ではない基準に基づいて捉えられているわけです。ですから、文化財レスキュー事業では有形民俗文化財はレスキューの対象になったのですが、例えば民具などは一体どこまでが文化財の範囲なのか、つまりどこまで救わなければいけないのかということが非常に大きな問題になったと聞いています。民俗文化財というのは暮らしの在り方がわかる、そういう暮らしに密着した文化財です。言葉は悪いのですが最も卑近な文化財である、そうした性格によって、文化財レスキューの中では取り扱われにくかったところもあるかと思います。

ですから、無形文化遺産に関しては文化庁主導の被災調査事業くらいで、有形文化財のようにいろいろな組織が関わって連携するような支援活動は、結局見られませんでした。

文化財レスキュー事業が平成24年度末まで続けられたのち、「文化財防災ネットワーク推進事業」が立ちあがっています。こちらも文化庁と連携のもと、国立文化財機構が本部となって平成26年7月から始めた事業です。この事業は主に3つの柱で動いています。ひとつが「体制づくり」ということで、防災事業やレスキュー活動を行うための恒常的な体制をつくっていこうという目的です。ふたつ目が調査研究、みつつ目が人材育成ですが、ふたつ目の調査研究の中に「無形文化遺産の防災と被災後の継承等に関する研究を行う」という文言があります。こういうかたちで「無形文化遺産の防災」という言葉が盛り込まれているのは、非常に大きな一歩だと思います。

これに基づいて、私たち無形文化遺産部でも現在ふたつの事業に取り組んでいます。これについては後ほど久保田室長からお話があると思うので、ここでは省きます。ともかく、ここで「無形文化遺産と防災」という文言が入ったということですが、その背景には、特に東日本大震災以降、無形文化遺産というものが災害において、あるいは災害からの復興時において果たす役割、持っている力というものが非常に大きいということが改めて発見された、そうした背景があるかと思います。それが皮肉にも災害を通してわかったということになります。

2. 災害復興時における無形文化遺産の役割

東日本大震災の後、われわれ研究者や行政の予想に反してものすごい勢いで民俗芸能やお祭りが復興していきました。まだ衣食住もままならない時期、避難所暮らしの中で祭りや芸能が復興していった。早いものだと2011年6月頃、百ヶ日法要で既にながれきの中で芸能が舞われていたことが報告されています。

ここに挙げた図1・2は、背景が原っぱのように見えますが、本来家が建っていたところが流されてしまって、そこで祭りの行列を行っているという写真です。これは震災の翌年で、図1が岩手県大船渡市、図2が同県陸前高田市です。図3は宮城県女川町の方々が秋田へ避難されていた時、どうしても獅子振り（獅子舞）がしたいと。ただ、道具も何もないので、その場にある座布団と空き缶、スリッパを使って「座布団獅子」を作ったというものです。それで舞って、非常に勇気づけられたと



図1 熊野神社式年大祭
(岩手県大船渡市、2012年)



図2 うごく七夕祭り
(岩手県陸前高田市、2012年)

聞いています。この座布団獅子は今も大切に
てあるそうです。こういうかたちで、ひとつは無
形文化遺産というものがアイデンティティの拠
り所として機能した。先ほども言いましたように、
暮らしに根づいた文化財だからこそ、こういう
ことができたという面があると思います。

それから、これも何度も言われていること
ですが、コミュニティを保持する機能、あるいは再生
する機能というものが再認識された。これは特に
芸能や祭りに関してということになりますが、や
はり集団で行うものですので、コミュニティを横
にもつなぐし、あるいはおじいちゃんからお孫さんまでというかたちで縦にもつなぐ、そういった機
能もあります。



図3 避難先で作った座布団獅子
(宮城県女川町、2013年)

また、非日常のものとして行われる、そうした高揚感が復興に向けた原動力になりうる。あるいは
練習やお祭りの本番の時だけコミュニティの人たちが集まる、といったように、人々を集める、具
体的機能も持っています。震災後、「レジリエンス」という言葉が頻繁に使われるようになりました。
精神的な回復力・抵抗力・復元力、そう訳されますが、そういったレジリエンスを高めるもの、支
えるものとして、震災後、無形文化遺産が再評価されていったという動きがあるかと思っています。

3. 「無形文化遺産の防災」を考える—無形文化遺産の特徴

ここからが本題ですが、それでは無形文化遺産の防災とは何か、ということです。先ほども言
ったように、「無形文化遺産の防災」というのは非常に新しい考え方だと思っています。今回の発表者
にお願いした時も、「この発表を機に考えてみます」と仰ってくださった方もいて、まだ誰もきちん
と議論をしていない、そういう概念です。今回こういうかたちで取りあげることに少々不安ありま
したが、私たち自身もこの協議会を通じて考えていけたらと思っています。

ひとつだけ議論の前提としてお話ししておきたいのが、無形文化遺産の防災は有形の文化財の防災

とは大きく異なるのだと、そういった認識を持っていただきたいということです。ですから防災を考える時に、「無形文化遺産の防災」に特化して考えていく場面が必要であろうと思っています。

では、有形の防災とどう違うのかという点を、レジュメに4点ほど挙げています。これはそのまま無形文化遺産の特徴ということになるかと思うのですが、第一に、無形文化遺産は生きた文化財であるため、実にさまざまな要素によって構成されているということです。つまり人から人に伝えられるものなのですが、ではその「人」がいればいいのかというそれだけではないわけです。図4は去年この協議会で発表して下さった広島県の壬生の花田植えを例として挙げたものですが、まず花田植えの担い手ということで言えば、「伝承者」がいて、それから飾り牛の「牛」がいますね。このふたつがまず欠かせない要素ですが、伝承者は人間ですからやはり後継者が要る、師匠が要る、そして練習場所や練習時間を確保しなければいけない。牛には調教師が要りますし、飼育場所も要ります。飼育に係る技術や経済的負担というものが要ります。

そして、当の本人たちがいればいいのかというのももちろんそうではなくて、道具です。太鼓・笛・衣装あるいは飾り鞍といったものが必要になってきます。その道具や衣装に関してもそれを作るための製作技術が要りますし、製作者や原材料が要る。あるいは道具があっても、保管する場所がないと持ち伝えていけない。新調や修理のための資金も必要になってきます。

それから「演ずる場」も重要になってきます。これは東日本大震災の後に話題になったのですが、浜下り行事といって、浜まで神輿を持って行ってそこで禊ぎをする行事が福島県では非常に盛んだったのですが、そういったものが続けられない状況が出てきました。人はいる、道具も無事だったけれども、海岸線が原発事故で汚染されたり津波で被害を受けて、演ずる場所がなくなってしまったので続けられなくなってしまった、そういう例もたくさんあります。

それから、「観客」を挙げています。これも非常に大切で、東日本大震災の場合、門付けをして回る芸能が非常に多かったわけです。家々を回ってお花をもらって、それを活動資金にしていくなかちになるのですが、その門付けをする場所が全部流されてしまったことで活動資金がなくなってしまっていて続けられなくなった、そうした例もあります。

最後に「なりわい」を挙げました。この壬生の花田植えでも稲作というなりわいが基盤になっています。4月に熊本で地震がありましたが、その時にお聞きしたのは、田んぼに水がなくなってしまうと稲作ができなくなってしまったと。それで祭りを続けていく意義が失われてしまった、そういう例



図4 無形文化遺産の特質

も聞いています。

ここに挙げた他にも、関わってくる要素があるかもしれません。いずれにしても、こうしていろいろな要素が有機的に混じり合うことでひとつの無形文化遺産が成り立っている。今日は道具に関わる発表もありますが、無形文化遺産といっても決して無形だけではなくて有形のものも非常に大事な意味を持ってくるということです。かつ、こうしたものは一見目に見えません。外の者が行ってみても、ひとつの無形文化遺産の全体像を把握するのは非常に難しいということがあります。これを災害に則して言うと、被災・復興の状況を外の者が把握するのは非常に難しいということになります。人と道具が無事だったら被災がないかということ決してそうではない。ですから防災ということ言えば、無形文化遺産の被災・復興状況を把握して支援していくためには、それを平常時からよく知っている人を育てておく、かつその人たちとネットワークをつないでおくということが非常に大事になってきます。それが1点目です。

2点目ですが、無形文化遺産には非常にたくさんの未指定文化財があります。例えば東日本大震災で被災した東北3県の沿岸部、そこに所在する民俗芸能だけで1,000件以上あると言われています。そのうちどれくらいが指定されているかというと、国・県・市町村指定までを入れても100件ちょっと、つまりたった1割です。では残りの900件くらいは価値が低いのかというと、そもそも民俗文化財は優劣の価値づけをしないということもありますし、そうでなくても、東北沿岸部の場合はまさに「生きた文化財」だったからこそ指定されなかったという現状があります。つまり指定されなくても自活できる、お花代で十分やっていけるとか、あるいは面白くしていくためにどんどん新しいものを取り入れていくので、文化財という概念の方向性と合わず指定を受けなかった、そういうものがたくさんある。ですから指定、未指定を問わず人々にとって非常に大事な文化財がたくさんあるということです。この未指定の文化財がどういうかたちで問題になってくるかというと、未指定の文化財は被災・復興状況の把握が非常に困難です。ですから防災という観点で言えば、事前に所在情報や伝承状況を把握しておくこと、かつその情報をみんなで共有しておく、そういうことが重要になってくるかと思います。

3点目と4点目、被害を未然に防ぐことはもちろん大切ですが、無形文化遺産の場合は災害後のサポートも重要になると考えています。有形文化財のように修復して終わりというわけではなく、ある意味で終わりが無いわけです。東日本大震災の場合も、支援金によって衣装や道具、山車を新調して何回かはやったけれども、その後コミュニティに人が戻ってこなくて続けられなくなった、そういうケースが報告され始めています。

そうしたことに加え、無形の場合はそもそも「復興って何だ」という問題があります。どこまで復元できたら、それが復興になるのかと。次の点にも関わってくるのですが、そもそも少子高齢化や過疎化で弱っていた無形文化遺産がたくさんある中で、どこまでが災害の影響でどこからが日常の延長なのか腑分けするのは難しい。そうした中で、長いスパンで寄り添っていく、見守っていく姿勢、あるいは体制というものが求められるのだろうと考えています。

そして最後ですが、無形文化遺産は常に衰退・消滅の危機にあるという点です。これも言うまでもありません。少子高齢化・過疎化・娯楽の多様化の中で、衰退・消滅の瀬戸際にある無形文化遺産は全国に無数にあるわけです。実は、私たちが防災事業を進めていく中で、無形文化遺産部に対して「あ

なたたちがやっていることは日常業務なんじゃないの」と問われたことがありまして、それで逆に考えたのですが、無形の文化遺産は常に消滅の危機と隣り合わせにある、そのことが有形の文化財とは大きく違う点なのだと再認識しました。けれども、このことは逆に利点でもあります。つまり防災について考えることが平常時の伝承について考えていくことに直結していく、かつ、そうした防災への取り組みが日常業務の範疇や延長でできるということも非常に重要な点だと思います。

以上を踏まえて、今回は4名の方にご報告をいただきます。最初に、岩手県からお越しいただいた東資子さんには、東日本大震災の事例をご報告いただきます。ふたつ目のご発表は、愛媛県の大本敬久さんです。愛媛ではみなさんの防災意識が非常に低いということを嘆いていらっしゃるのですが、そうした中で過去の災害の記憶あるいは記録をどう掘り起こして、それを防災につなげていくのかということを実践されていますので、そのあたりをご紹介いただけるかと思います。そして、先ほども申しあげましたが、無形文化遺産は決して無形だけではなくて有形のものが必ず必要になってくるということで、3番目、4番目には有形の視点からご発表をいただきます。和歌山県の大河内智之さんは、3Dプリンタで作ったレプリカの仏像を本物に置き換えて防犯に役立てるという、非常にユニークで新しい取り組みをされています。岡部達也さんは浅草にある宮本卯之助商店の方で、東日本大震災の後に獅子頭をはじめとする道具類の修復に多数携わったご経験をお持ちです。そこから、どういう記録があれば道具の復元が可能なのかといった観点からお話しいただきたいと思います。4人のご発表の後に、2人のコメンテーターの先生も交えて総合討議を行います。

無形文化遺産の防災として事前に何を備えておけばいいのか、被災した後にはどういった復興サポートができるのか、そういったことを一緒に考えていただければと思います。長丁場になりますが、どうぞ一日よろしくお願いいたします。以上で趣旨説明を終わります。

趣旨説明「無形文化遺産と防災―リスクマネジメントと復興サポート」

東京文化財研究所 無形文化遺産部
今石みぎわ

● 文化財行政における災害への対応

- ・ 文化財レスキュー事業（～平成 24 年度末）
 - 無形文化遺産はほぼ対象外、“鬼子”としての民俗文化財
- ・ 文化財防災ネットワーク推進事業（平成 26 年 7 月～）
 - 「2. 調査研究等の実施 ▶無形文化遺産の防災と被災後の継承等に関する研究を実施」
 - ※現在、2つの事業を展開
 - 「地方指定文化財等の情報収集・整理・共有化事業」
 - 「文化財保護のための動態記録作成に関する調査研究事業」

● 災害復興時における無形文化遺産の役割

- ・ アイデンティティのよりどころとしての無形文化遺産
- ・ コミュニティを保持・再生する機能
 - レジリエンスを支えるものとしての無形文化遺産、という新たな価値付け
(精神的回復力、抵抗力)

● 「無形文化遺産の防災」を考える

☞ “有形の文化財の防災とは異なる”という認識が必要

- ・ 多様で有機的な構成要素を持ち、全体像の把握が困難
 - 専門家の育成とネットワーキング
- ・ 未指定文化財の占めるウェイトが大きい
 - 事前の所在情報の集約
- ・ 防災に加え、復興後のサポートが重要となる
 - 長いスパンでの寄り添い
- ・ 平常時から衰退・消滅の危機に晒されている
 - 防災対策が平常時の伝承に繋がる

報 告

1. 東 資子

岩手県大船渡市から考える無形文化遺産の防災

付 発表資料

2. 大本 敬久

四国の災害特性と無形文化遺産の防災

付 発表資料

3. 大河内 智之

文化遺産の複製と信仰環境の維持－防犯対策の事例から－

付 発表資料

4. 岡部 達也

祭礼具から考える無形文化遺産の保持

5. 久保田 裕道

問題提起

報告 1

岩手県大船渡市から考える無形文化遺産の防災

東 資子（一関市教育委員会）

久保田裕道（司会） 最初の発表は、「無形文化遺産の防災」というテーマを考えていくきっかけにもなった東日本大震災の話です。東さんは岩手県一関市教育委員会のご所属ですが、個人的に大船渡市で民俗芸能等の復興に関わってこられたということで、それについてお話をいただきたいと思います。それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに

ご紹介いただきました東資子です。よろしくお願いいたします。

「岩手県大船渡市における無形文化遺産の防災」というタイトルでお話をいただいて、初めから言い訳で申し訳ないのですが、このタイトルは私には重たいものです。というより、ふさわしくないものです。実は、震災の時に私は東北にはおらず、つい最近から関わらせていただいています。東北の出身者でもありません。さらに言うと、無形文化遺産、民俗芸能の専門家でもありません。

そういう私がなぜ大船渡に、ということですが、私は文化人類学や民俗学の分野を専門にしており、その調査手法である聞き取りという方法が合っていると思っていました、それを生かして東北で何かできることを、と思って東北に参りました。

そのような中、追手門学院大学の橋本裕之先生が大船渡市の民俗芸能調査の取りまとめをなさっていて、調査に呼んでいただいて入ったのがきっかけです。ですから、そうした門外漢からの、外からの視点です。逆に、外からの視点で大船渡市はすごい、東北はすごいということを今も思っていますので、そのすごい話をみなさんにも聞いていただきたいと思います。

先ほどお話にもあったとおり、防災というとまだこなれていない、聞き慣れない言葉と思いますが、平常時の備えや災害への備えという意味で使いたいと思っています。そのような意味で大船渡市から何を考えられるのかを、みなさんと一緒に考えていきたいと思っています。

1. 東日本大震災後の無形文化遺産と今後の備え

災害に備えるという意味では、大船渡市はこれまでもたくさんの災害に遭ってきた地域です。み

なさまご存知のとおり、明治29年の三陸大津波から昭和8年、最近では昭和35年のチリ沖地震でも津波が襲っています。つまり大船渡市にいらっしゃる方は一生のうちに1度ならず2度ぐらいは災害、津波に遭っているということです。末崎町のある方は「津波はやってくるんだ。ものを流されるのは仕方ないんだ。だから人まで流されないようにしなくてはいけない」と仰って、海岸沿いですが小高い場所におうちを構えていらっしゃいます。それで今回は、そこまで津波は来ませんでした。



図1 浦浜念仏剣舞 百ヶ日法要

震災で見てきたのは、震災が特別な事例ではなく、今まであった問題を早く露出させたり、問題を加速させたという面だと思います。そういう点で、大船渡市の事例から何が考えられるのか、普遍的な話としてお考えいただきたいと思います。先ほどもお話がありましたように、無形文化遺産の力ということが、今回たくさんいわれています。これほどまでに民俗芸能が大きな注目を浴びることは阪神・淡路大震災などではなかったことだと思います。それはやはり東北の話だということで、何で東北はこんなに民俗芸能がすごいのか。

無形文化遺産の力は復興を支えるというだけではなく、地域を顕在化させる、今石さんのお話にもありましたが地域の人が集う機会を与える、また日常や被災前と後をつなぐ役割を果たしました。

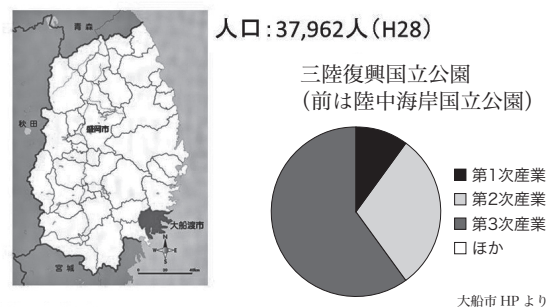
図1は浦浜念仏剣舞さんで、百ヶ日法要をなさっている写真です。ですから2011年の6月の時点で、もう剣舞を始めています。この団体は道具などを流されてしまって、会長さんは当初「もう剣舞はできない」と考えていらっしゃったそうなのですが、しばらく経つてくると「踊りが流されたわけではない」と思うようになられたそうです。かっこいいでしょう。そういうふうにして百ヶ日法要を始められました。剣舞は供養の芸能なので、それが特にあったのだと思います。お盆になると他の団体も供養ということで踊りをなさいました。

2. 大船渡市の民俗芸能調査

私が関わらせていただいた大船渡市の民俗芸能調査は平成25～27年に文化庁の助成を受けて行われた事業です。これを受けたのは大船渡市郷土芸能協会です。震災復興に尽力されていた東北文化財映像研究所の阿部武司さんが仲介されたということもあるのですが、行政ではなくて芸能をやっている方々がこの事業を受けて、文化庁とのやり取りも含めて、全てその協会で行っていました。素晴らしい協会なのです。

この事業には普及活動の部門などもあり、調査部門を橋本先生が受けられて、調査委員として私を含めて5名が携わりました。私は2年目から携わり、事務局として調査報告書を作成しました。

図2は大船渡市の概要です。三陸海岸沿いの人口4万人弱の都市です。陸中海岸国立公園を有し



出典:コトバンク
<https://kotobank.jp/word/%E5%A4%A7%E8%88%B9%E6%B8%...>

図2 大船渡市の概要

ていたのですが、震災後はもう少し範囲を広めた三陸復興国立公園になっています。リアス式の海岸が広がる美しい海岸線を持っていますので、一次産業のうち3分の2が漁業、3分の1が農業です。漁業の就労者が割といらっしゃいます。第二次産業としては石灰石のコンクリート工場や建設業などに従事されています。第三次産業がやはり多く、観光業などもあります。

被災状況ですが、東日本大震災による被害は平成28年時点で死者数340名、行方不明者79名、建物が5,582世帯の被災でした。現在は更地になって、建物も建ってきている状況です。

図3は明土権現^{あくど}の道具を収蔵していたところが流された写真で、保存会が撮ったものです。今はそこにショッピングセンターが建っていますので、そこに場所を少し貸してもらって、支援を受けて作った権現様などを置いていらっしゃいます。ただ、もうほとんどの住民がここには住んでいないので、行事の時に集まっては今後どうするかという話になっています。

図4は、百ヶ日法要をなさった浦浜念仏剣舞さんと同じ地域に鹿踊^{ししおどり}があり、その合同詰所といって、道具などを置いておいた建物が流されたところす。

図5は大船渡市郷土芸能協会に入っている団体の一覧で、剣舞・鹿踊・虎舞・獅子舞・七福神舞・田植踊など、このように大船渡市には民俗芸能がたくさんあります。また、このほかに芸能協会に入っていない国指定無形民俗文化財のスネカ（来訪神行事）や気仙法印神楽もあります。協会では10の団体が被災されています。死者が出た団体が4つあるほか、建物・道具などが流されています。それ以外にも先ほどの趣旨説明にあったように、観る方、演じる場所、産業なども被災しています。そのような中で報告書を作りました。

そのため報告書は、資産リストということを考えました。大船渡市では、合併前の昭和55年に『大船渡市史』の民俗編が刊行されましたが、平成13年に三陸町と合併したので、現在の大船渡市全体の民俗芸能を見渡すような一覧表がありませんでした。それもあり、今回は大船渡市の民俗芸能全体を載せることにしました。各団体の文献リストも収録しています。

それから、これまで無形文化遺産としてなかなか挙がってこなかったもの、みなさんの目に見えなかったものということで、大船渡にたくさんある権現様を悉皆調査して一覧表にしました。実に80以上の権現様や獅子舞、虎舞の団体がありました。大船渡市には130ほど小字、自治公民館がある



図3 明土権現の道具の収蔵場所



図4 浦浜念仏剣舞・金津流浦浜獅子躍合同詰所跡地（浦浜念仏剣舞 HP より転載）

	芸能名	地域	芸能名	地域
剣舞	1 赤澤屋敷剣舞	大船渡町赤沢	1 根白虎舞	三陸町古浜
	2 浦浜念仏剣舞	三陸町越前	2 門中組虎舞	末崎町中井門浜
	3 嶋白念仏剣舞	三陸町越前	3 平賀獅子舞	末崎町平
	4 嶋白念仏剣舞	三陸町古浜	4 前嶋獅子舞	三陸町越前
	5 古浜念仏剣舞	三陸町古浜	5 沼根権現舞	三陸町越前
	6 白浜剣舞	三陸町越前	6 慶生獅子舞	日頃市町慶生
	7 野形剣舞	三陸町越前	7 半七福神	大船渡町平
	8 川原屋敷舞	立花町川原	8 野形七福神	三陸町越前
	9 石橋屋敷剣舞	日頃市町石橋	9 野形七福神	末崎町越前
	10 板用屋敷剣舞	日頃市町板用	10 西宮七福神	末崎町西宮
	11 大森屋敷剣舞	日頃市町大森	11 菅生田楽踊り	立花町菅生
	12 甲子屋敷剣舞	日頃市町甲子	12 赤澤曲線	大船渡町赤沢
鹿踊	1 永沢鹿踊り	赤崎町永沢	2 盛町曲線	盛町
	2 前田鹿踊	前田町前田	3 中井次郎曲線	前田町中井
	3 金津流浦浜獅子躍	大船渡町金津	4 福元次郎太鼓	三陸町古浜
	4 金津流浦浜獅子躍	三陸町越前	5 安賀寺太鼓	日頃市町安賀寺
	5 小津鹿踊り	日頃市町小津		
	6 板本沢鹿踊り	日頃市町板本沢		
		神楽	気仙法印神楽	
		行事	古浜スネカ	
			タラジ刀太	
			三陸町古浜	
			三陸町越前	

図5 大船渡市郷土芸能協会所属団体一覧

のですが、そのうちの 80 くらいで権現様などを持っていることがわかりました。ここでは「地域」という言葉を自治公民館や小字の意味で使います。各地域がそれぞれに芸能を持っている、それはなぜかというのは後でお話しいたします。

資料が流されてしまった団体があったので、各団体の口唱歌などを集めた資料編も作って今後に備えるということも考えました。ただし、できなかったこともあります。後で宮本卯之助商店さんがお話なさると思いますが、有形物の記録について、モノを測った記録までは載せられませんでした。また、民俗芸能という調査報告書のタイトルなので、行事までは載せることができなかったのが課題でした。「民俗芸能」としてしまうと、祭礼や門付け、行事がなかなか視野に挙がってきません。どこまでを含めるのかということが課題になると思います。「大漁歌い込み」の行事(図6)や来訪神行事のスネカ(図7)などがありますが、例えば、民俗芸能調査をしたいと言うと「おらは民俗芸能じゃなくて行事だから、そんなのに載せないでくれ」と言われることもあり、もっとこちらが枠を考えなくてはいいないと思いました。

3. 大船渡市の民俗芸能の特徴

大船渡市の民俗芸能の特徴について、この調査を通じて私が考えたこと、思ったことについて、事例を挙げて説明させていただきます。これは去年行われた大船渡市大船渡町の加茂神社の五年祭です(図8)。大船渡市ではひとつかふたつの神社が祭りをを行い、そこで先ほど言った公民館などが芸能を奉納するというかたちをとります。大体4年ごとに行いますので、5年目ということで五年祭といわれています。加茂神社の五年祭では15の地域が氏子として参加します。その地域それぞれが芸能を出すのですが、獅子舞が6地域のほかに、鹿踊や七福神もあります。曲録と鉦剣舞は同じ地域が持っています。これだけの芸能が奉納されました(図9)。ただ本来であれば、すべての地域が山車を引き、お母さんたちがきれい



図6 大漁歌い込み(三陸町吉浜千歳、2015年)



図7 吉浜のスネカ(三陸町吉浜、2015年)



図8 加茂神社式年五年大祭のポスター

な着物を着て手踊りを奉納して、さらに芸能を奉納するというのが今までのやり方だったのですが、着物を作ることがまだできないということで、今回は芸能だけの奉納になりました。それでも、これだけのものを奉納しています。

図10が加茂神社です。この神社はかなり高台にありましたので被災しませんでした。前日には「揃い」といって芸能を奉納します。当日は「呼び出し」を受けてそれぞれ行列を作って町中を歩いていくというのがお祭りのやり方です(図11)。図12は山車のひとつです。太鼓を載せて、ここで七福神のお囃子をします。震災後は瓦礫が散乱していたこのあたりも、今はこうやって更地になっていますので、何もない海沿いの道を行列が歩いていきました(図13)。その後、魚市場につくられたお祭り広場にこれだけの人が待っていらっしやいまして、この中で芸能を披露しました(図14)。他の祭りでは、例えば小学校に集まって芸能を披露するというパターンもあるのですが、この加茂神社の祭礼はこのような場を持つことは今までなさなかったそうです。というのも、行列自体の移動が長かったので、その行列の中でみなさん芸能を見せて回っていたからです。震災後は、道中を短くする代わりに披露の場所を設けるというふうになっています。大船渡市大船渡町以外からもたくさんの方が見に来られて、その前で鹿踊や七福神舞などを披露しました(図15・16)。奉納というよりは余興として演じられました。こうして芸能がアトラクションとして演じられている後ろのほうでは、お神輿が粛々と海上渡御を行い、お祭りが行われていました(図17)。アトラクションの披露が終わると、各芸能はそれぞれ地域に戻って自分たちの町で門付けをして回ります。この時は5月だったのですが、剣舞は供養のものだということで遺影と位牌を揃えてみなさんが待っていらっしやいました(図18)。

この五年祭は、大船渡市ではかなり大きな意味を持っていると思います。大船渡市では五年祭が芸能のきっかけにもなっているのです。奉納する芸能がなかったから習ってきた、何かしようと思って探し

永井沢	獅子舞(永井沢権現)
屋敷	獅子舞(屋敷)
下船渡	獅子舞(月山権現)
地ノ森	獅子舞(地ノ森権現)
田中	獅子舞(田中権現)
明土	獅子舞(明土権現)
笹崎	鹿踊(笹崎鹿踊)
平	七福神(平)
赤沢	曲祿、鎧剣舞(赤澤芸能保存会)
上山	
川原	
宮ノ前	
台	
富沢	
明神前	

図9 加茂神社式年五年大祭参加芸能一覧



図10 加茂神社奉納(赤澤鎧剣舞)



図11 町中の巡行



図12 平七福神の山車



図 13 震災後、更地での巡行



図 14 お祭り広場での披露



図 15 仰山流笹崎鹿踊



図 16 平七福神舞



図 17 神輿の海上渡御



図 18 地域での門付け（赤澤剣舞）



図 19 川内梯子虎舞（保存会提供）



図 20 平梯子虎舞（2015 年）

て始めたという芸能がかなり多いのです。例えば、図 19 は川内梯子虎舞ですが、祭礼の時に奉納する芸能がなかったので、昭和 25 年の鉄道開通記念行事に 3 ～ 4 人で末崎町まで行って平梯子虎舞（図 20）を習って、それを地域で教えて五年祭で披露を続けている、このようなパターンがかなりあります。

大船渡市では芸能は地域を基盤にしています。各町にお祭りがあって、そこで各地域が奉納するのが芸能です。芸能があって地域があるわけではないのです。ですから芸能に関しては、お祭りのためというモチベーションが特別な意味を持っています。

図 21 は今年行われた末崎町の熊野神社の祭礼ですが、お昼ご飯の時には、それぞれの地域の山車の後ろに場所を取ってご飯を食べていました。ある虎舞の団体に「お昼、おいで」と呼ばれて行きました。虎舞の団体が集まってご飯を食べているというイメージがあったのですが、行ってみるともうてんてきで、各家でそれぞれお弁当箱を広げていました。その中にはひとりで屋台の焼きそばを買ってきて食べている人もいて、まさに地域がそこにあったけでした。芸能団体があるのではなく、地域があって、その人たちが芸能をしているのだということがとてもよくわかりました。

先ほどの大船渡町では剣舞がお祭りに出ていましたが、三陸町では「剣舞は神様ではなくて仏様のことだから、絶対お祭りには出ない」といいます。こうして供養がメインになっていまして焼香が芸能の中に取込まれています。いま、これは香炉を持って踊っています（図 22）。こういう踊りが剣舞です。これは別の地域ですが、こうして位牌を拝むことから始める（図 23）。それで供養の和讃を唱える。図 24 も念仏を唱えて拝む。これがお盆に奉納する剣舞です。三陸町越喜来崎浜ではお盆の最後の日には海沿いで奉納するのを地域の人たちが見に集まります。これでお盆が終わる、ということを実感するそうで剣舞を楽しみにされています（図 25）。

他の行事としては悪魔祓いがあります。これはお正月や旧正月に各家を回る門付け行事で、先ほど



図 21 末崎町熊野神社式年大祭（2016 年）



図 22 焼香（浦浜念仏剣舞）



図 23 焼香（根白念佛剣舞）



図 24 念仏で拝む（赤澤鎧剣舞）



図 25 盆供養（横浜念佛剣舞）



図 26 悪魔祓い



図 27 盆供養（白浜剣舞）

言ったものです（図26）。権現様・獅子舞・虎舞が同じことをやっていますので、それらが大船渡市には80ほどあります。

このように地域にそれぞれ芸能があるのですが、実はお話を聞いてみると、行事はカレンダーに書かれているように毎年するような行事ではないと仰います。図27は三陸町綾里^{りょうり}の白浜剣舞ですが、3～4年休んで「そろそろすっぺ」となるとお盆の供養をして、その休んでいた間に亡くなった方々がいる家をずっと回る。そうすると、その家でも「待つ

ていたよ」ということで供養をしてもらう。だから3～4年とか年が空いても全然構わないんだというのです。これは私には衝撃でした。研究者としては途絶えさせないために「毎年しなくては…」と言ってしまうのですが、そうではないんですね。生活の中で芸能をする、生業があつてその片手間に芸能をやっけいらっしやるので、別に毎年しなくてもいいのだということです。もともと祭りは、あまりにも豊漁だったから、あまりにもひどい不作だったから祭りをするというものだったので、定期的にするというよりも、何かがあるからする、できる時にするということらしいのです。そういう意味で、五年祭というのはちょうどいい間隔だと仰います。「仕事が大変だから毎年するほど暇じゃない。でも5年に1回ぐらいだったら芸能も継承できるし、子どもたちにも教えられるし、みんなでお金を集めてやることができる。そのような期間として五年祭というのはとてもいい」ということです。

大船渡市の民俗芸能の特徴は、信仰とも地域とも乖離していない。それは芸能、行事が自治会単位の地域によって継承されている、生活を基盤にして必要なものを芸能として提供しているからといえると思います。

4. 大船渡市郷土芸能協会

そのような芸能を支えているのが大船渡市郷土芸能協会です。この協会はこれだけの芸能を抱えていて（図28）、主な事業として「芸能まつり」を開催しています（図29・30）。自分たちで芸能を見せる機会として、このイベントを毎年開催しています。会費を各団体からもらって運営し、出演の機会を提供しています。また、外からのイベントの誘致や共催も行っています。これは三陸国際芸術祭の

時の写真で、9団体の鹿踊が一堂に会して壮観でした(図31)。こういうイベントの受け皿にもなっているらしいです。これは碁石海岸虎舞競演会です(図32)。あとはこうしたフォーラムを自分たちで開催して芸能を考えたり発表したりする機会を持っています(図33)。

図34は先日あった創立60周年記念の式典です。大船渡市郷土芸能協会では50周年記念に記念誌を作っています。今回、私たちが報告書を作らせてもらったのですが、大船渡市郷土芸能協会が自分たちで受けた補助金ですので、本当はこうした記念誌のようなものを作りたかったのだと思います。このように、市長さんたちの祝辞が並んで、各団体がどれだけ古いのかということをやって、カラーで、こういうものがよかったです。今回の報告書は大船渡市全体に目配りができるものを作ることになりました。それはもちろん、今回の震災があったからです。この協会の方々は素晴らしい方々ばかりで、地域では芸能団体の会長であるとともに消防団のリーダーであったり青年団のリーダーであったり、そういう方々が集ってきています。例えば、芸能団体の会長を終えると公民館館長に呼ばれているなど、そういう方々がネットワークを作っているのがこの協会です。役員会は月に2回も行っていて、本当にしょっちゅう会っていらっしやいますので、団体ごとの事情や活動をよくわかっています。そういう協会なので、今回の震災では自分たちが支援の受け皿になりましたし、逆に支援もなさいました。

この泊権現様は指定文化財でもなく、当時は協会にも入っていませんでした(図35)。被災して道具が流されたのですが、どうしていいかわからなかったと仰います。その時に協会の役員が支援の仲介をして、書類も全部書いてあげて、このように復活まで導かれました。これは、協会に入っていない無形文化遺産を、協会のネットワークを通じて支援した素晴らしい事例だと思います。

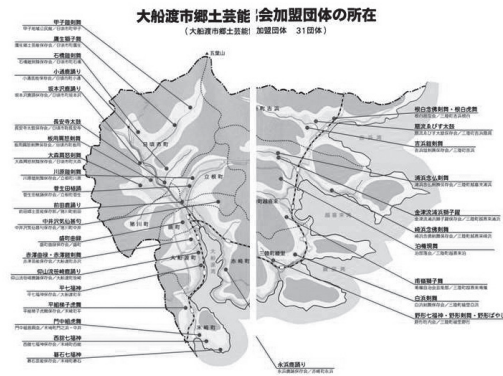


図28 大船渡市郷土芸能協会加盟団体の所在



図29 大船渡市郷土芸能まつり(2014年)



図30 気仙郷土芸能まつり(2014年)



図31 三陸国際芸術祭(2014年)



図 32 碓石海岸虎舞競演会 (2014 年)



図 33 フォーラム「大船渡市の民俗芸能の今」
(2015 年)



図 34 大船渡市郷土芸能協会創立 60 周年記念式典 (2016 年)



図 35 泊権現舞 (泊権現舞提供)

5. 大船渡市の事例から

このように大船渡市は民俗芸能の先進地で、なぜこのようにすごいかというと、実は災害と芸能というものが、かなり親和的だからかと思っています。

大船渡市をはじめ、東北でこれだけ民俗芸能が素晴らしいのは、それだけ環境が過酷だった、祈りの気持ちがみなさん強かった、それを芸能に託したということがあるかと思います。実際、災害を起源にする芸能はたくさんあります。剣舞自体がもともと源平合戦の死者を弔う芸能であり、戦争という災害を起源にしている。この団体は「餓死剣舞」といわれていたといい、飢饉を起源にしていると

います（図36）。早池峰神楽も、弟子神楽がこれだけでできたのは、飢饉の際にみんなが伝えたからだそうです（大石泰夫『芸能の〈伝承現場〉論』2007より）（図37）。

つまり東北の芸能は災害を伝える芸能でありますし、今回も災害を機に新たな芸能がいろいろ生まれています。例えば先ほどみたいな剣舞の焼香は、今まではお盆の時しかしなかったのですが、ステージでも焼香するようになっていきます。いつまで続くかわかりませんが、もし定着すれば東日本大震災を機にした芸能の変化といえます。

今回は事業の中で映像記録も撮ったので、芸能をもう少ししなければいけないと言って演目を練習して増やした団体もあります。加茂神社も今回祭礼の形式を変えましたが、あのようにお祭り広場で芸能をするのは素晴らしいということで、今後も続くかもしれません。震災を機にどんどん芸能が変わっていくし、災害を伝える芸能にもなっているのです。

まとめると、大船渡市では地域で芸能がそれぞれにあって、それを奉納するための行事や祭礼などの場が整っている（図38）。母体としてしっかりとした行事や祭礼が行われていて、そこに芸能という花が咲く。その芸能に対するネットワークが協会という形でしっかり作られていたので外からの支援が受けられ、また外への発信もできる。外からの支援は芸能を通して地域までしっかり下りていくことができたのだと思います。

ただ、芸能にまでならない権現様や、外から見えにくい芸能というものはあります。そういうものについてはリスト化が必要です。芸能を支援するというならば、やはり行事や祭礼の部分を支援することが必要なのかと、大船渡の事例からはいえます。例えば、大船渡市の「こども郷土芸能まつり」、これは三陸町が昭和61年のふるさと創生1億円事業のひとつとして、郷土芸能をしっかりと伝えようということで始めました（図39）。2年に1回、「こども芸能まつり」を開催していたのを、大船渡市と合併した後も続けていっしょやって、子どもを育成する大きなきっかけになっています。そういう手を打っているのがじわじわと効いてきているのかなと思います。

防災として考える場合、祭りや行事を支援することが日常的にこれからできることかと思っています。それは地域の力を高める有効な手段である、うまくできれば確実に地域が元気になる手段であるといえるのではないかと思います。



図36 吉浜鑑剣舞（三陸港まつり、2014年）



図37 岳神楽（ハヤチネ全国神楽大会、2016年）

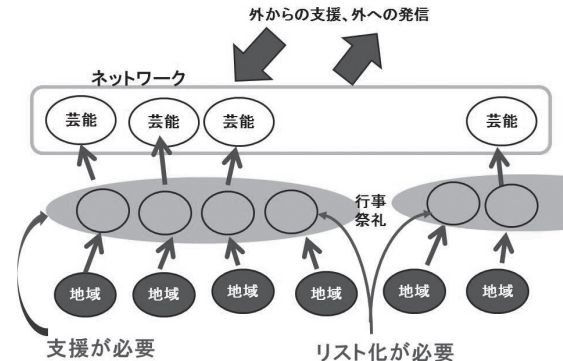


図38 大船渡市の芸能の構造



図 39 第 3 回大船渡市こども郷土芸能まつりのポスター

これで、報告を終わります。

質疑応答

質問者 ありがとうございました。埼玉県立歴史と民俗の博物館の内田幸彦と申します。事実関係の確認ですが、芸能協会が設立されたのはいつぐらいで、どれくらいの団体が加盟されているのでしょうか。

東 今年が 60 周年なので、60 年前です。今 35 の芸能がありますが、団体数としてはもう少し少なくなります。三陸町に関しては昭和 49 年から芸能協会を作っていて、それが合併したということだと思います。

そうはいつても、大船渡市にも課題がたくさんあります。例えば子どもたちが芸能に関わっていても、大学がないので高校を出ると外に出ていく、就職先がないから外に出ていってしまっていて戻ってこれない、そういう社会的、経済的な面をどうしていくのかということです。それでも、そこに芸能が果たせる役割がないのかということ、これからは大船渡市と一緒に考えていきたいと思っています。きれいごとではないのですが、実際に芸能があるから地域に残ると言う人がいます。先ほど紹介した大漁歌い込みをやっている千歳という地域では、明神太鼓という太鼓を地域でやっています。それは子どもたちの憧れで、太鼓をやりたいから地域に残ると言う人たちが多くいるそうです。芸能にはそういう力があるのだと思いますので、何とか今後、子どもたちが芸能を続けていけるようなことを考えていきたいと思っています。

平成 28 年 12 月 9 日（金）

第 11 回無形民俗文化財研究協議会

「無形文化遺産と防災 ―リスクマネジメントと復興サポート―」

岩手県大船渡市における無形文化遺産の防災

東 資子（あずま もとこ）

（一関市教育委員会文化財課 文化財調査研究員）mazuma16@hotmail.com

- 1 東日本大震災後の無形文化遺産と今後の備え
災害に備える
特別な例としてではなく、普遍的な問題として
無形文化遺産の力
- 2 大船渡市の民俗芸能調査
岩手県大船渡市 （旧陸前国気仙郡）
大船渡市の民俗芸能など（剣舞、鹿踊、虎舞、獅子舞、七福神・・・）
資産リストとしての報告書の作成
〔大船渡市郷土芸能協会 HP <http://kyoudogeinou-ofunato.iwate.jp/report/> 〕
無形文化遺産と民俗芸能
- 3 大船渡市の民俗芸能の特徴
祭礼（五年祭）、行事（盆の回向、悪魔祓い）と地域
生活の中にある芸能
- 4 大船渡市郷土芸能協会
ネットワークとしての協会、目的を持った組織
震災後の活動
個人の力、地域のリーダーと民俗芸能団体
- 5 大船渡市の事例から
民俗芸能先進地の事例（地域と信仰とネットワーク）
災害を機にする芸能、記憶のための芸能
防災としての祭り・行事への支援

報告 2

四国の災害特性と無形文化遺産の防災

大本 敬久（愛媛県歴史文化博物館）

久保田 おふたり目の発表者は愛媛県歴史文化博物館の大本敬久さんです。いま東日本大震災のお話をいただきましたが、今度はこれから起こり得る災害に対してどういう対策をとっていくのかということで、愛媛県をはじめ、現在、ご承知のように南海トラフ巨大地震といった大きな地震が予想されています。無形文化遺産に関してはなかなか防災という観念が広まっていませんが、その中で先進的な試みをされている大本さんにお話をお願いしました。どうぞよろしくお願いいたします。

* * *

1. 災害危険性の理解—「愛媛は災害が少ない」という忘却・誤解・油断—

こんにちは。愛媛県歴史文化博物館の大本と申します。先ほどは大船渡の先進事例だったのですが、後進事例の報告ということで四国の現状を紹介したいと思っています。

まず、私は愛媛県に住んでいるのですが、愛媛という地名の由来自体が「愛しい媛」というもので、これは『日本書紀』『古事記』の神話にも出てくるおだやかな地名です。元々瀬戸内海の温暖な地形で災害が少ないとよく言われていますし、現在でも愛媛県内の行政機関ホームページを見ても愛媛は災害が少ないという記述も何ヶ所か出てきます。ところが実際には、南海トラフを震源とする地震や、松山・広島間の安芸灘で発生する芸予地震、例えば平成 13 年にはマグニチュード 6.7 の地震が発生するなど、周期的に大きな地震が起こっています。四国と九州との間の日向灘での地震も周期的に起こっています。歴史上、大規模な直下型地震は実際には少ないのですが、周期的に海溝型の地震等が発生している。風水害、土砂災害に関しては四国は非常に多いということもありますので、とても災害が少ないとは言えないはずです。

実際に愛媛は災害が少ないという言説をいろいろな活字から調べてみると、実はそんなに古くはなくて、昭和 20 年代には南海地震も起こっていますし、大規模な水害が発生していますので、昭和 20～30 年代後半ぐらいまでは災害が少ないという記述は出てこないのです。そうした記述が出てくるようになるのが昭和 38～40 年ごろからです。これは前回の南海地震が昭和 21 年 12 月 21 日、これがちょうど再来週が発生から 70 年になるのですが、その昭和 21 年から 15～20 年経た頃からの、いわゆる災害の事実が忘れ去られた頃に起こってくる「誤解」として「災害が少ない」という言説が出てきているということが、実際にデータとしてわかっています。ちなみに四国では、高知県出身の

寺田寅彦の「天災は忘れたころにやってくる」——実際には寺田寅彦が直接言った言葉ではないのですが——と言う言葉がありますが、地震は「忘却」されて、「災害が少ない」という「誤解」があって、そして愛媛はいま「油断」をしているのではないかと、というその危機感を常日頃持っています。

南海トラフ巨大地震は平成 23 年に想定震源域が改定されまして、図 2 の白い線の範囲だったのが拡大して四国の大部分が囲われるようなかたちになりました。実際には静岡県駿河湾あたりから宮崎県の沖まで、南海トラフが東海地震・東南海地震・南海地震と連動して発生する恐れがある、それが 30 年以内に約 70% の確率で発生するといわれています。

ただ、この図を見た時に、愛媛県や四国の住民にとっては、あまりにも範囲や被害が大き過ぎてリアルなものとして捉えにくいというところがあったのです。津波の想定に関しても、高知県黒潮町では津波の想定高 34 メートル。愛媛県で言いますと、ちょうどこの豊後水道側の宇和海沿岸部では伊方町で 21 メートル、私の出身地の八幡浜市では 9 メートルと想定されていますが、「本当にそんなに来るの？ちょっと現実離れしてるんじゃない？」という感覚で住民は捉えているところもあります。

しかし、平成 23 年の東日本大震災で実際に津波高が 5 メートル以上来襲したところを北から南に直線で示してみると、青森県の八戸市から千葉県の旭市まで、直線で言えば約 520 キロメートルになります（図 3）。この 520 キロというのは西日本の住民は少し違った感覚でとらえてしまいます。白地図で四国をコピー・ペーストして岩手県沖に置くと、四国の面積と岩手県 1 県の面積はそんなに変わらないのです。われわれ四国の人間はこの小さい島の中で物事を考え、私も愛媛の中でも太平洋に面した南北約 50 キロの宇和海沿岸の範囲を前提に、この津波被害をいかに防ぐか、レジリエンスを強めるかということを考えてしまっているのです。実際には 520 キロというと、四国だけではない。静岡県から四国を越えて宮崎県に至るという、先ほどの図 2 の被害想定、想定震源域は誇大なものではないということが、東日本大震災と比較するとわかります。どうしても 47 都道府県を同じレベルで捉えてしまいがちなのですが、そもそも広さが違う。西日本各府県は小さい、狭いぞという、この距離感覚、広さの感覚というのは、西の方ではよく再認識しておかなければいけないと思っています。

南海トラフを震源とする巨大地震ですが、文献史料で確認できる限り過去の事例としては白鳳（飛鳥時代・西暦 684 年）から大体 100 ～ 150 年に一度は巨大地震が発生しているということがわかっています。直近では昭和 21 年（1946）に南海地震、その 2 年前の昭和 19 年（1944）に東南海地震が発生して、その前が嘉永 7 年（改元して安政元年、1854）の安政南海地震です。この時は東海・東南海・南海が連動して起きました。そして、その約 150 年前、宝永 4 年（1707）にも三連動で発生しています。古い記録を見ると、南海トラフ巨大地震に関する文字記録として一番古いものが『日本書紀』天武天皇 13 年（684）なのですが、この時に大地震があって「国を挙げて男女が呼び合いて東西を知らず」要するに右も左も分からないと。山は崩れ川は湧いて、国々の官舎や一般庶民の家屋は倒壊し、寺院や神社も破壊されている。その数を数えることもできない。多くの人や家畜なども亡くなっている。南海トラフ巨大地震に関する記録で最も古いもので、最初に出てくる地名はというと、実は「伊予温泉」なのです。これはどこかというと松山市の道後温泉なのです。道後温泉が埋もれて湯が出なくなりました。実は道後温泉は歴代の南海地震で、ほぼ止まっております。大体 3 ～ 5 ヶ月後に復旧はしているのですが、日本の文献史上、南海地震に関して最初に出てくるのは伊予なのです。そして土佐（高知県）も出てきます。田畑が 50 万頃余り、要するに 12 平方キロメートルが没して海になると書かれています。恐らく地盤の沈降現象が起きて、そこに海水が流入して海のようになって戻らなくなった、これも歴代の南海地震で共通している高知市周辺の被害で、既に飛鳥時代から記録されているという

ことです(図4)。

愛媛県はこの南海トラフ巨大地震だけではなく、いわゆる中央構造線断層帯が東西に通っています(図5)。先般4月14・16日に発生した熊本・大分地震に連なる中央構造線断層帯ですが、ここを震源とする地震も約400年前の文禄5年(改元して慶長元年、1596)に発生しています。いわゆる慶長の伏見地震で、秀吉が伏見城から逃げたという伏見地震と慶長伊予地震、慶長豊後地震とわずか1週間の間に中央構造線断層帯を震源として連続地震が発生している。広島と愛媛間で発生する芸予地震も、約100年の間で周期的に起こっているということで、愛媛は災害が少ないというのはとても言えない状況なのです。想定としても海溝型の地震があり、まず南海トラフを震源とする地震が今後30年以内に約70%程度で発生すると言われています。そして日向灘地震も、安芸灘の地震も過去に発生し、今後想定されています。

中央構造線断層帯は地震調査研究推進本部が発表している数字ですが、愛媛を東西に横切る石鎚山から伊予灘にかけての中央構造線断層帯では、ほぼ0～0.4%の発生確率ということで、あまり危機意識を持たなくてよいような数字に見えます(図6)。しかし、今回の4月14・16日の熊本地震のいわゆる布田川断層帯の布田川区間では発生確率は0～0.9%とされていたのです。そこで大きな地震が発生しているということで、侮ることなかれというところです。

2001年以降、近年の愛媛県内の地震ですが、4月16日の熊本・大分の地震の時はマグニチュード7.3で、私の実家のある愛媛県八幡浜市でも震度5弱を観測しています(図7)。実は私が勤務する博物館が位置する南予地方北部では、この3年間で震度5弱以上が3回、毎年1回ずつ発生していて、その度に私も展示物や収蔵庫が無事かどうかを確認するために発生直後、緊急参集要員として夜中にかけつけなければいけないという状態が続いています。2001年の芸予地震の後、愛媛では震度5弱以上の地震が5回観測されているのですが、その前の1971～2000年の30年間は震度5以上の地震は、実は愛媛ではゼロだったのです。この15年間で地震が頻発していることがわかります。

今回の熊本地震では、熊本から阿蘇、そして大分も揺れましたが、いわゆる深さ10キロ前後の比較的浅い活断層型の地震で、その余震などを見ても、大体大分県の別府湾のところで途切れていて、その東側の愛媛県側は動いていないのです(図8)。「まだ動いていない」と言ったら語弊があるかもしれませんが、実際、動いていないのです。これは4月16日に地震があった後に、この流れからしたら次は愛媛にくるかと新聞やテレビ、ネットでも紹介されたりして、愛媛県民も非常に恐れおののきましたので、これを機会に防災意識を高めようと、いま努力しているところです。

この300年間の南海地震をおさらいすると、宝永4年(1707)に宝永南海地震がありました(図9)。それは東海地方から四国沖までマグニチュード8.6で、この49日後に富士山が噴火した、いわゆる宝永の噴火の時の地震です。そして嘉永7年(1854)、改元されて安政元年になりますが、マグニチュード8.4です。この時は11月5日に南海地震が起こっているのですが、その32時間前に東海・東南海地震が発生している。ですから、東海・東南海地震は11月4日の発生になっています。そして昭和21年12月21日、70年前にマグニチュード8.0で、この時は東南海地震が2年前に発生していますが東海地震は発生していないということです。

さて、東日本大震災の本震とそれに伴う誘発地震を見ていくと、過去の愛媛で記録された地震史料と照らし合わせてこういうことだったのかと改めてわかったところがあります。それはマグニチュード9.0だった東日本大震災の後に長野県北部地震が栄村などで発生して大きな被害が出ていますが、これも余震というよりは海溝型の地震によって誘発された内陸型地震ということで、4日後には静岡

災害危険性の理解

「愛媛は気候が温暖で災害が少ない」のか？

周期的に発生する南海地震・芸予地震・日向灘地震

頻発する風水害・土砂災害・高潮

明治32年水害(愛媛県内犠牲者828名)

昭和18年水害(134名)・平成16年水害(26名)等

→「災害が少ない」言説が見られるようになるのは昭和40年頃。

「天災は忘れた頃にやってくる」

高知県出身の物理学者で随筆家の寺田寅彦の言葉

災害の事実→忘却→誤解→油断

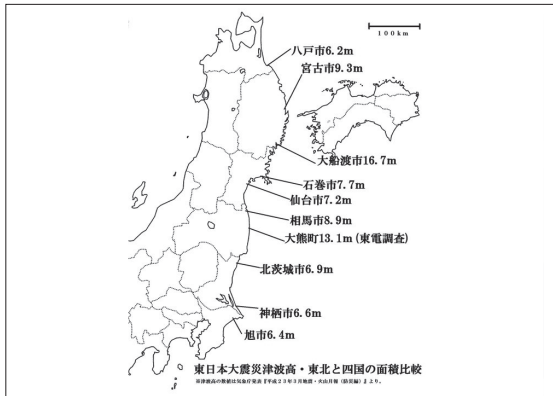


图 3

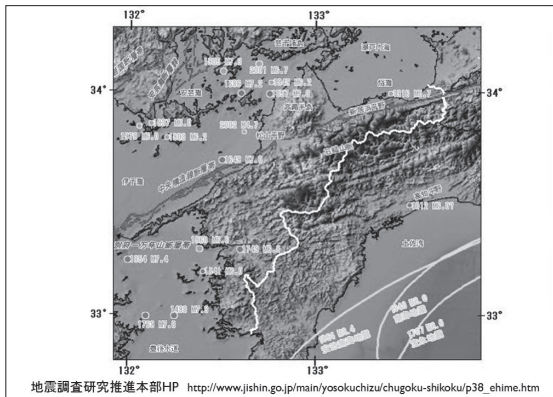


图 5

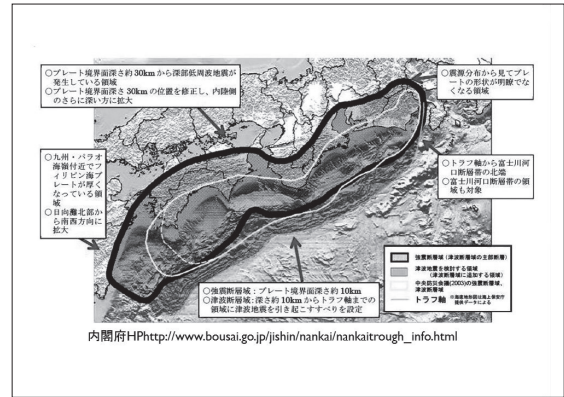


図 2

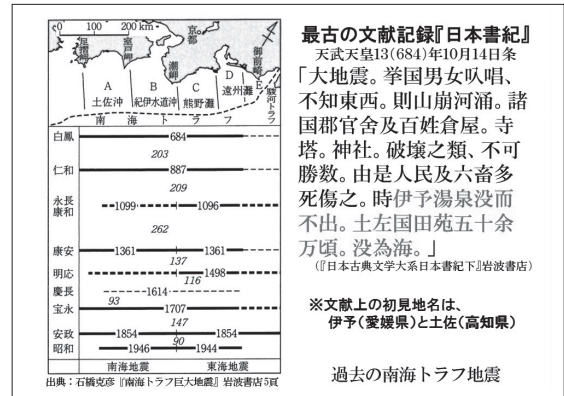


图 4

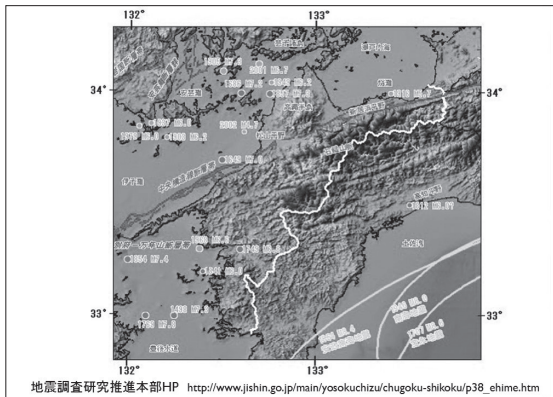


图 5

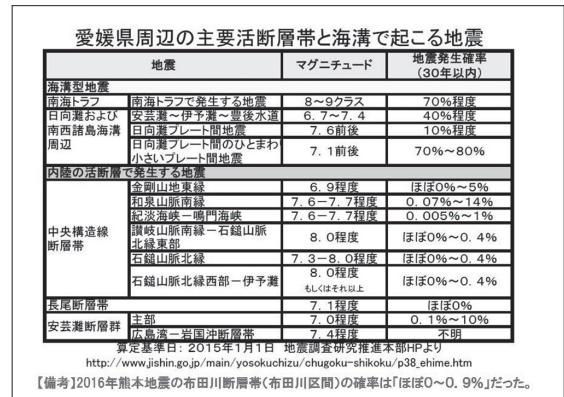


图 6

近年(2001年以降)の愛媛県内の地震

2001年以降、震度5弱以上の地震は5回。

→ 特に南予北部ではこの3年間は毎年震度5弱以上を観測

番号	発生日	震源	規模	深さ	震度(震度5弱以上)
1	2016/4/16	熊本地方	M7.3	12km	震度5弱 八幡浜市
2	2015/7/13	大分県南部	M5.7	58km	震度5弱 西予市
3	2014/3/14	伊予灘	M6.2	78km	震度5強 西予市 震度5弱 松山市 久万高原町
					宇和島市 八幡浜市 伊方町 荏原町
4	2006/6/12	大分県西部	M6.2	146km	震度5弱 今治市 八幡浜市 伊方町 西予市
5	2001/3/24	安芸灘	M6.7	46km	震度5強 今治市 上島町 西条市 松山市 松前町 砥部町 久万高原町 西予市
					宇和島市 震度5弱 新居浜市 東進町 大洲市 八幡浜市 内子町 伊方町

→ 幸い、愛媛県直下を震源とする大きな地震は発生していない。

→ 1971年～2000年の30年間は震度5以上の地震はゼロ。

图 7

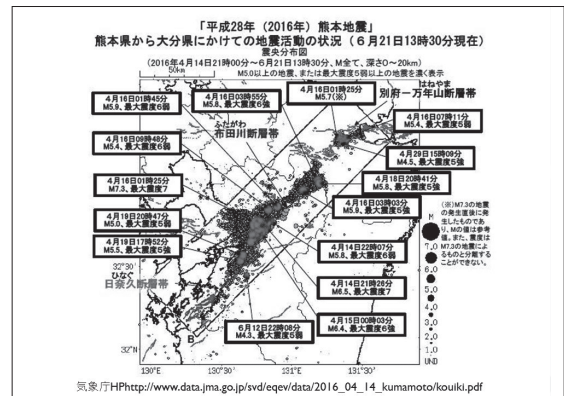


图 8

県東部地震も発生しています（図10）。ちょうど1ヶ月後の4月11日に福島県いわき市で震度6弱を観測した大きな地震も、誘発地震になります。これと似たような記録が愛媛県八幡浜市に残っています。これも余震といえますか実際には誘発地震なのです。図11では現代語訳していますが、記録をみると「嘉永7年11月4日の正午ごろに少々揺れ始める」と書いてあります。「少々揺れ始める」とあるので、南海地震はそんなに大したことはなかったんだなと思っていたら、よく考えると11月4日の正午なので、これは実は東海・東南海地震の揺れが四国の一番西端の九州との境のところまで伝わっていたということになります。その32時間後の「5日の午後4時ごろに大きく揺れ」、とあるのが南海地震の本震です。「町内が少々傷む」とあり、この時は家屋の損壊はそれほど多くはなかった。そして、その地震の約1時間後に「大津波があつて、現在の中心商店街を越えた海から約1.2キロほどいったところまで潮が上がった。住民は山の大法寺に上がった。余震が続いた」と。その2日後、「7日の午前10時ごろに大きく揺れ、家屋の損壊多し」とあり、これは実は誘発地震で、大分県側でもこの時の記録が残っています。四国と九州を結ぶ豊後水道を震源とするマグニチュード7.4の地震であり、この時が一番家屋の損壊が多かったということです。このように150年程前の安政南海地震では、最初に小さな揺れがあり、これは東海地震・東南海地震が四国まで伝わったもので、本震は32時間後に発生している。その1時間後に津波がきて、翌々日に誘発地震で豊後海峡のマグニチュード7.4の地震が発生して、この時は四国西部や九州では一番被害が大きかったということになります。

2. 災害の伝承化—忘却・記憶の実践—

こうした地震の史料から分かることと伝承をいかに次世代に引き継ぐのかということですが、災害の記憶は「記憶する」ということと「忘却する」ということが問題となってきます（図13）。忘却には、時とともに忘れ去られる「自然忘却」と、あとは私自身、博物館活動の一環として、高齢者向けの回想法などのワークショップをやっていると、どうしても思い出したくない記憶というものが出てきたりします。要するに、記憶を実践することで次世代に継承を促すということと、もう一つは自分を回復させるためにそれは忘れないといけないという「忘却実践」があるということです。

そういう視点は、個人レベルでも、集団レベルでも必要かと思っています。個人レベル、集団レベルでの記憶の実践というのも当然あるわけで、ひとは儀礼化されて年中行事や祭礼、民俗芸能になっていくものもあれば、物語化されて口頭伝承として伝説となるものもあれば、災害記念碑として顕彰するようなかたちで後世に受け継がれるものもあります。

記念碑についていわゆる災害碑を簡単に紹介しておきます。まず水害についてですが、これは明治32年8月に愛媛県内で828人が亡くなるという大きな大水害が発生しました、近代の愛媛県では一番大きな被害が出ました。最も被害が大きかったのが別子銅山（現新居浜市）で、そこが流れてしまって死者が多く出ました。犠牲者を供養する石碑がその2年後、要するに三回忌の供養として建てられています（図14）。三回忌だけではなくて、100年目となる1999年にも百年忌ということで建てられたものがあります。

図15は流された方が愛媛県新居浜市から国領川を通じて瀬戸内海に流れ出て、香川県三豊市の仁尾町の海岸に流れ着いて供養されている事例です。供養・慰霊・顕彰というかたちでいろいろな石碑等が四国で見られます。

図16・17は絵馬——お堂なので絵額ですが——で、「明治拾七年大暴風雨津浪惨状之図」という

ものです。愛媛県松山市大可賀という地域で、江戸時代末期に海岸部を新田開発したところです。低地で、ここに堤塘があったのですが高潮により決壊してしまって、そして集落に水が流入してしまいます。元々新田開発をしたところなので非常に低地で、逃げるべき高い場所がないということで53人の地元住民が犠牲になりました。ここに「津浪惨状之図」、「津浪」とありますが、気象現象で言えばこれは高潮のことです。この時の犠牲者を供養する「御名号堂」というお堂があり、絵額はそこに掲げられているものです。これは明治17年(1884)8月25日に発生した災害ですが、この絵額がいつ描かれたかという、昭和8年(1933)なのです。昭和8年というのは明治17年から数えてちょうど49年目、四十九回忌に当たる年です。もうひとつは、この年に三陸津波が発生しています。東北地方に甚大な津波被害があった時期ということです。49年までは供養できるけれども、四十九回忌で納め、弔い上げというかたちになる。その後、地元での記憶をいかに後世に伝えるかという危機感がやはりあったのだと思うのです。それで描かれて掲げられたのが、この昭和8年の水害の絵だと思っています。いわゆる記憶実践です。

あとは伝説のたぐいですが、これはこじつけてしまうと科学的には非常に怪しい分野になってしまっているのですが、「龍」や「蛇」という地名、伝説があると、そこは災害地名だと言われることがあります。必ずしもそういうわけではないのですが、実際に災害が起こったところに「龍」「蛇」という地名がつけられている。これは2年前の広島市での大水害の時もマスコミを賑わせましていろいろな議論が起きましたが、災害地名と「龍」「蛇」が全く無関係かというのを全てを否定することもできないだろうと思っています。例えば愛媛県の東温市の松瀬川は、高速道路の松山自動車道が通っていてちょうどここに中央構造線断層帯が東西に走っています。中央構造線断層帯とされるこの辺りは土砂の崩落が非常に起こりやすいところなのです。実際に寛政年間、江戸時代の中期ごろに大雨が降って土砂が崩落し、この川をせき止めたという言い伝えがあって、そのせき止めた地点のところに「龍神」が祀られているという事例もあります(図19・20)。ですから災害地名とされるものを全てを否定するわけにもいかないだろうと思っています。一つ一つ事例を検証するという作業を民俗学の立場でも行う必要があるのかもしれない。

地震、津波に関しては愛媛県と高知県とのちょうど県境の宿毛市に「^{はいたか}鵜神社」があります。愛媛県境から直線距離にして5キロいったところですが、ここに津波の遡上高の記録があります(図21)。江戸時代後期の安政南海地震では3.2メートル、宝年4年(1707)の宝永南海地震の津波では9.8メートル。地元の記録の中に、石段の上から3段目まで津波が上がったとあります。これは津波が上がっていったという遡上高の数値ですが、こういう被害が実際に起こっていて、地元に残る記録をもとに平成に入ってからこの石碑を建てて防災に努めているという事例もあります。

四国では徳島県内に古い津波碑があります。これは正平南海地震という中世の地震ですが、日本で最も古い津波碑が徳島県の南部に残っています(図22)。その近く、海陽町の鞆浦というところには江戸中期以前の石塔等も残っています(図23)。これは慶長の津波と宝永の津波の碑で、慶長の時には津波がきて100人近く亡くなった。その100年後の地震では、死者は出なかったと追刻されています。これは碑による防災効果ではないかと言われている。

供養という側面で言えば、先ほどは四十九回忌という例がありましたが、三十三回忌に建立された高知県須崎市の石造の地藏菩薩像があり、これも津波犠牲者の供養のために建てられているものです(図24)。

津波碑で記憶を実践するという事で興味深いのが、高知県須崎市にある「宝永津浪溺死之塚」で

この約300年間の南海地震

・震源：紀伊半島沖から四国南方沖

・特徴：周期的な巨大地震

1707年(宝永4年10月4日)

宝永南海地震(東海・東南海連動) M8.6

49日後に富士山噴火

1854年(嘉永7年11月5日)

安政南海地震 M8.4 32時間前に東海・東南海地震発生

1946年(昭和21年12月21日)

昭和南海地震 M8.0 死者1,330名

この2年前(昭和19年)に昭和東南海地震が発生

図9

【参考】東日本大震災と誘発地震(内陸型)

2011年3月11日 14:46

東北地方太平洋沖地震(東日本大震災) M9.0

13時間後:2011年3月12日 3:59

長野県北部地震 M6.7 最大震度6強

長野県栄村、新潟県津南町、十日町市で大きな被害

4日後:2011年3月15日 22:31

静岡県東部地震 M6.4 最大震度6強 富士宮市

1ヶ月後:2011年4月11日 17:16

福島県浜通り地震 M7.0 最大震度6弱 いわき市等

図10

安政南海地震と余震(誘発地震)

「大地心(おおじこ)つなみくわじのこと」

(豊後屋記録。八幡浜史談会蔵、掛軸、八幡浜市誌、泰申会『地震津波記録』所収)

- 1 嘉永7年11月4日正午、少々揺れ始める。
- 2 5日午後4時頃、大きく揺れ、町内少々傷む。
- 3 同午後5時頃、大津波、浜之町迄潮があがる。
町内の住民は大法寺へあがる。余震が多い。
- 4 7日午前10時頃、大きく揺れ、家屋損壊多し。
- 5 15日頃まで、山に小屋掛けしたり舟に避難

図11

安政南海地震(1854年)

I 最初の大きな揺れ(東海地震・海溝型)

嘉永7年11月4日 午前9時頃発生

熊野灘・遠州灘沖から駿河湾を震源 マグニチュード8.4

II 32時間後に本震が発生(南海地震・海溝型)

嘉永7年11月5日 午後4時頃発生

紀伊半島から四国沖を震源 マグニチュード8.4

III 約1時間後、沿岸部に津波襲来

11月5日夕方に津波。

IV 翌々日、最大の誘発地震(豊予海峡地震・内陸型)

嘉永7年11月7日 午前9時頃発生

豊予海峡を震源 マグニチュード7.4

図12

災害の伝承化—忘却・記憶の実践—

「忘却」 災害の「自然忘却」

「思い出したくない被災体験」の「忘却実践」

「記憶」 文書・日記・体験記等(個人・集団レベル)

→文字記録化された「歴史」へ

式典等の開催、災害碑等の建立

物語化(伝説)

儀礼化(年中行事・祭礼・民俗芸能)

→「伝承」を意図した記憶実践

図13



明治32年8月水害
別子流亡犠牲碑
(瑞応寺境内)
明治34年8月建立



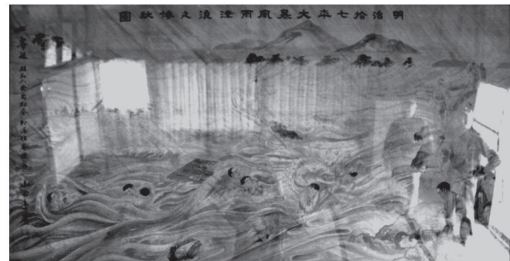
図14



明治32(1899)年8月水害
香川県三豊市(仁尾町)
「溺死三十三霊之塔」



図15



「明治拾七年大暴風雨津浪惨状之図」
(松山市大可賀)

図16

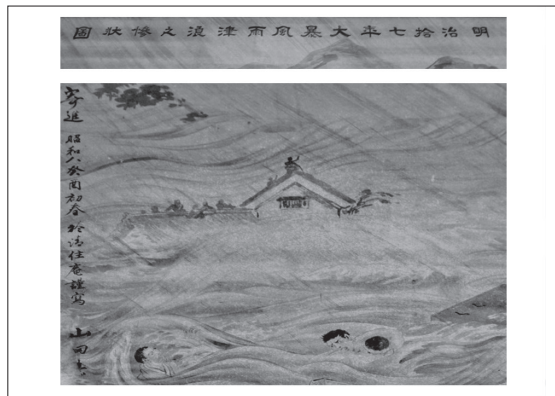


図 17

明治17(1884)年8月25日台風
(暴風雨・高潮被害)

松山市大可賀2丁目「御名号堂」。

高潮被害(堤塘決壊)で地元住民53名が溺死。

昭和8年奉納絵額「明治拾七年大暴風雨津浪惨状之図」

←昭和8年は昭和三陸津波で、東北地方に
甚大な津波被害があった年。

しかも明治17年から49年目にあたる年。

←四十九回忌を契機に描かれた可能性。

図 18

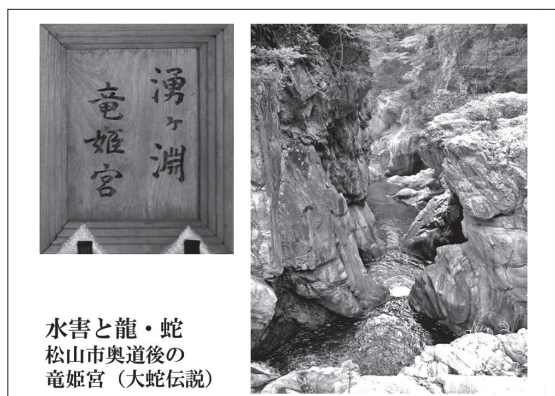


図 19

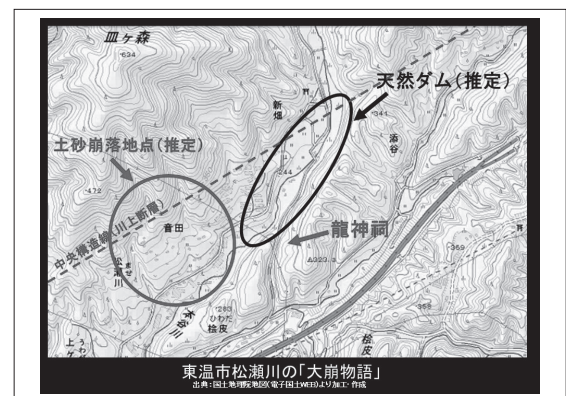


図 20

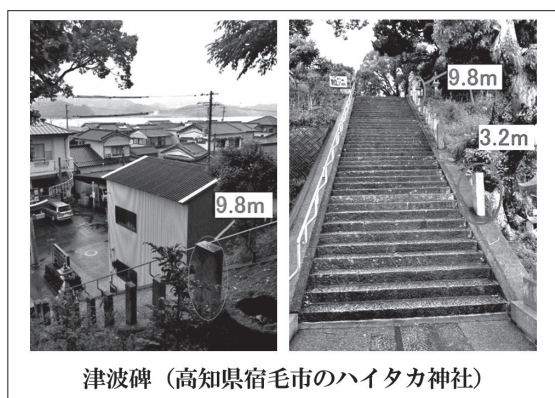


図 21



図 22



図 23



図 24

す（図 25）。宝永南海地震の時に津波がきて流された犠牲者をここに埋葬したという場所ですが、そこに建てられた碑を見てみると、ここに「安政三年」と刻まれてあり、安政年間に建立されていることがわかります。これは安政南海地震の 2 年後ということになります。宝永の地震から 150 年たって、また南海地震が起きて被害が出たぞ、となった時に、いわゆる「かぶせの記憶」で、元々塚だった場所に新たに石塔を建てている。地震が起こった 2 年後にひとつ前に起こった過去の大地震を想起して、それを「記憶実践」する、そういう事例もあります。

徳島県で石碑が特に多いのは海陽町ですが、ここまで津波が来たという潮位を示す津波碑には平成 8 年建立のものが多いです（図 26）。平成 8 年は昭和南海地震から 50 年の節目の時で、その 50 年の節目に記憶実践として建てたものなのです。ちょうどこの前年には阪神・淡路大震災も発生していますので、そうした防災意識が高揚した時に昭和南海地震の 50 年がきたということです。

愛媛では津波による死者を供養する石碑は今のところ確認できないのですが、昭和南海地震の後に海岸沿いの堤防が地盤沈降で下がってしまって、それを改修したという碑が結構各地に残っています。図 27 は愛媛県松山市（旧北条市）の北温海岸ですが、北条の沖に鹿島という島があり、鹿島神社の近くに要石というナマズを抑えていると伝えられる石があります。松山市北条の辺りは地震が少ないと言われているのですが、そう言いながらも、昭和南海地震の被害を示す石碑の中でも愛媛の中で最もシンボリックなものが昭和 37 年に建てられています。ただ、これは地元住民でもほとんど知られていない石碑でして、石に刻んだからといって、記憶が後世に充分伝わるわけではない。そんな事例と言えます。

図 28 は昭和南海地震の後、どれだけ地盤が隆起・沈降したかという四国の図ですが、高知県の室戸や足摺は隆起して持ち上がってしまうのです。一方で愛媛県の中予地方、東予地方のあたりでは 50 ～ 30 センチ、地盤が沈降します。そうすると海岸部の堤防が使えなくなる。そこで高潮が発生したり台風がくると被害が甚大になっていくということになります。そういうことが昭和南海地震だけではなく歴代の南海地震で見られます。図 29 も、海岸部のここに砂浜があったのですが、沈降したことで砂が波に洗われてなくなり、直接石垣に波が当たるようになってしまって防波堤が崩れたという被害の写真です。図 30 は西条市壬生川ですが、干潮時なのに海岸部では田畑に水がたまって引かない。海水が入ると作付けができない、そして井戸水に海水が入るという生活上の不便が非常に長く続いたということです。

津波の伝承・伝説に関してですが、瀬戸内海に津波が発生したという伝説が各地に残っています（図 31）。愛媛県松山市沖の由利島や興居島と中島。あとは大分県別府の瓜生島という島も慶長地震で沈降したという伝説が残っています（図 32 ～ 34）。大体、大きな津波がやってきて海岸から数百メートルほどが海中となって、という話で、地盤が沈降しているのです。ですから、高潮なのか津波なのか、地盤が沈降したところに海水が流入して、それを後の伝説で津波としているのかというのが、実は解釈が非常に混乱しています。

松山では先ほども言ったように地震で地盤が沈降してそこに海水が流入するということが繰り返して起きておりますので、恐らく瀬戸内海のこれらの伝承もそれに類するもの、つまり地震直後の津波ではなくて地盤の沈降、沈下による長期的な被害と解釈していいのではないかと思います。

参考までに四国ではないのですが、愛媛県の対岸の宮崎県延岡市伊形町に伝わる花笠踊りを紹介しておきます（図 35）。花笠踊りは 8 月中旬に行われるのですが、これは 400 年ほど前にここが津波に襲われたが、7 羽のシラサギが現れ、舞い始めると津波が治まった。以来踊りが奉納されるようになった

たという言い伝えが残っています。これは南海地震ではなくて日向灘地震でして、江戸時代のいわゆる外所地震の際の伝承とされています。市指定の無形民俗文化財になっていますが、津波の記憶を伝える民俗芸能は西日本では少ないと思ひまして、九州の事例ですが紹介しました。このように民俗芸能や民俗儀礼の起源伝承で災害をきっかけに始まったというのが非常に多いということで、民俗文化財や民俗学の研究と災害研究は親和性が高いと思っています。

3. 災害後の再構築―東日本大震災と愛媛―

ちょっと最後は急ぎ足でお話しします。災害後の再構築ということです。東日本大震災と愛媛県との関係ということで、東日本大震災の後に愛媛県内に避難している方が、いま大体 300 人くらいおられます。その方々への支援を目的として NPO 法人えひめ 311 が立ち上がってしまして、私もその会員になっています。愛媛に住んでいる方も避難してもう 5 年経ちましたが、一緒になってワークショップ等の活動を行っています (図 36)。お配りした資料に回想法シートが入っていますが、先般実施した「災害の記憶を伝える」と題したワークショップで、1 時間ほど私がしゃべって、30 分くらいこれまでの経験・体験を思い出してもらうという形式で使います (文末資料 2)。そこから皆さんでグループワークをしてもらいます。そして、言ってみればこれが今の愛媛の社会の縮図ですが、老壮青、男女、そして避難をしている人、元から愛媛に住んでいる人、それが災害情報を共有して防災力を高めるといふ、そういうワークショップを実践としてやっております。

次に、愛媛は江戸時代、宇和島藩に、慶長 20 年 (1615)、仙台の伊達政宗の長男の伊達秀宗が藩主としてやって来ています。それに伴って多くの家臣団も東北からやって来ています。そして東北の民俗芸能の鹿踊も伝承していて、現在でもこの伊達藩領であった宇和島・吉田両藩である、緑と黄色の地域に約 90 カ所伝承されています (図 37)。そういったこともあり、愛媛県の南予地方の人間は「元々の先祖は東北ですよ」と言う人が結構いて、親和性が高い。その 400 年の歴史ロマンに裏づけられた繋がりということで、震災後はいろいろな芸能団体の交流や講演・講座、シンポジウムなどがあり、それにより文化的な繋がりがより深まってきました。

このように、愛媛の南予地方は東北地方と元々ゆかりが深いということもあり、防災の面でもいろいろな交流を実践しているところがあります。今年 12 月 17、18 日には愛媛大学を会場に全国史料ネット研究交流集会在開催されます。全国各地の史料ネットの 23 人が 15 分ずつ、2 日間にわたって報告しあって交流するという、要するに顔と顔が見えるつきあいをしようというのが趣旨です。第 1 回は平成 27 年に神戸市で、第 2 回は平成 28 年 3 月に福島県郡山市で行われ、今回が第 3 回です。国立文化財機構も主催の中に入り、愛媛史料ネットも主催で開催するものですが、これはどちらかというと有形の資料レスキューが中心の団体です。

愛媛県内では現在、様々なネットワークがあつたり、伊予史談会やいろいろな博物館・文化財施設がありますが、地震に関する特集を組んだり展示をしたりというところが出てきています (図 38)。災害に関しては先ほども言ったように、ひとつの県で考えるのはちょっと難しいところがあります。広域で考えなければいけないということで、私の職場で来月 (平成 29 年 1 月)、「愛媛・大分交流講座」を開催し、大分側の史料から見た愛媛の地震について公開講座などを行う、そういう計画を立てています。

4. 防災・減災体制—ネットワークの構築と制度の活用—

博物館では現場レベルでの博物館協会や学芸員の集まりである「四国ミュージアム研究会」があります（図 39）。行政的なことと言えば、中四国の被災文化財の保護支援計画があります（図 40）。中国・四国 9 県プラス広島市、岡山市の 11 自治体の文化財課担当部局の、いわゆる課長レベルの申し合わせ事項で、平成 25 年に策定されました。広域支援として、文化財保護法に基づく文化財や保管施設の迅速・的確な保護を目的とした申し合わせができています——機能しているかは別ですが。行政の中でこれが決められているというのは実は非常に大きなことで、大規模災害等が発生した時にはこれが有効的に使えるということで、私たち現場レベルの人は約束手形として「みんなでこれを知っておこうね、持っておこうね」と、災害が起こった時にはすぐに動ける体制だということで「ここに平成 25 年申し合わせ事項が決まっています」と動くことができるよう研修会等で取りあげています。この申し合わせはカウンターパート制を取ってしまして、愛媛の場合は広島、高知でしたら島根とパートナーを組んで支援をするという取り決めになっていますが、これがなかなか動いていないという課題も当然あります。行政、自治体間で明文化されている事だけでも有難いと思っていますし、保護対象としては単に「文化財」ではなくて「文化財等」になっています。「等」が入ると未指定も入ってきます。文化財保護法の文化財・博物館法上の博物館資料・図書館法上の図書館資料・公文書なども明記されていて、この中に人的ネットワークの構築や情報整備なども書かれている。これが中四国での取り決め、申し合わせとしてあります。

あと、愛媛で各市町村の文化財担当の人たちとよく言っているのが、各自治体の地域防災計画についてです（図 41）。要するに、各自治体で災害対策基本法に定められた地域防災計画を策定するわけですが、その中に「文化財」や「博物館」という言葉を明記している自治体と、していない自治体がある。自治体によっててんでばらばらで統一感がありません。都道府県レベルで言うと、これは午後からお話いただく村上さんも関わっていますが、いわゆる災害対策基本法で定められた中央防災会議で平成 26 年 3 月に「大規模地震防災・減災対策大綱」が策定されていて、地域防災計画に謳われていなかったような事柄も書かれています。これが平成 26 年ですから、そこから改定がされていない、まだ反映されていない自治体が参考にするという意味でも、この中央防災会議の大綱が重要かと思っています。ただしこの中には無形民俗文化財や無形文化遺産、祭りや芸能という言葉は明記されていないことも問題点、課題として挙げておきたいと思います。

5. 愛媛県内での防災の取り組み

最後に愛媛での取り組みを紹介します。実際は、日常業務としてやっていたことの視点を変えただけです。これは、祭り・芸能・民俗技術といういわゆる無形の文化遺産が防災の側面では十分に引きあげられてこなかったけれども、無形文化遺産は被災地の住民をつなぎ、心を支える可能性を持つことが東日本大震災等で示されたということで、実践しているものです。

ひとつは愛媛の文化財、特に無形民俗文化財の所在情報の集約を、報告書や現地調査などを通して行っています。人のこと、道具のこと、場所のこと、環境そのもの、そういったものを対象としています。一事例として、宇和島市吉田町の吉田秋祭りの調査があります。ここは宇和海沿岸部で太平洋に面している地域で、図 43 の右は津波遡上を入れたハザードマップです。4 メートルの津波がくる

という想定になっているところにお祭りの道具や人、町が分布しています。報告書作成にあたっては、人や道具、御旅所や神社の位置などをマップ化して、掲載するという事で、いま進めています。

八幡浜市保内町の祭りについても同じく報告書作成を行っています(図43の左)。ここに三島神社があり、ここの地名は舟来谷、^{ふなきたに}「舟が来る谷」と書くのですが、ここが海岸から約1.3キロあります。安政南海地震の時にはこのあたりまで津波がきた、舟がここに打ち上げられたという記録が残っているところです。ちょうどここが神社で、ここが御旅所です。ここで行われる芸能の報告書ということで、伊予銀行の助成事業で今年度冊子を作成する中に、過去の地震災害についても盛り込む予定です。いま、道具類が保管されているところは大体このあたりです。番地や所有者まで書くと盗難などの管理リスクも出てくるので、教育委員会や地元の保存会等が保有する情報として作成を進めているところです。

あとは西予市明浜町狩浜です。これも豊後水道に面した場所ですが、鹿踊・太神楽・獅子舞・船形の屋台のほか、牛鬼という牛とも鬼ともつかない練り物があります(図44)。ここも、海のそばの公民館に道具が保管されていて、ちょうどここが御旅所にもなっています。そういった場所でハザードマップ作成のワークショップをいま計画しているところです。

最後になりますが、集約した情報をいかに公開するかということで、東文研のホームページに無形文化遺産情報ネットワークがありますが、将来的にはこれにリンクできるようなかたちで、愛媛でもいまホームページ公開を行っています(図45)。先般、50件アップしたのですが、3年計画で150件掲載を予定しています。これは文化庁の「文化遺産を活かした地域活性化事業」を用いたもので、その公開が先々月はじまったところです。実際には「えひめいやしの南予博2016」という観光イベントで実施したもので、観光イベント絡みでの助成金を活用したのですが、折角なので「防災」も視野に入れて事業を進めました。地域の無形文化遺産の所在情報の把握、それも意図したホームページ公開です。この中には年中行事も含めています。

以上、後進事例として愛媛県内の状況について事例報告させてもらいました。30年以内に約70%の確率で地震が発生するであろうということですが、危機感を持っている人、持っていない人とあります。今日のこの協議会の参加者を見ても四国からの参加者は私ひとりだけで、正直心細く、寂しい思いもしていますが、みなさんからいろいろとご質問、ご意見をいただければと思っています。それでは私の発表はこれで終わります。

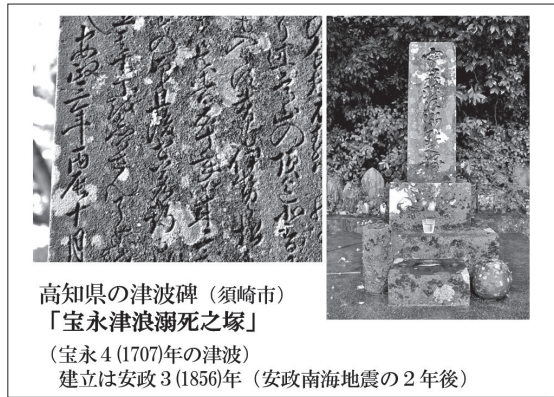


図 25



図 26



図 27

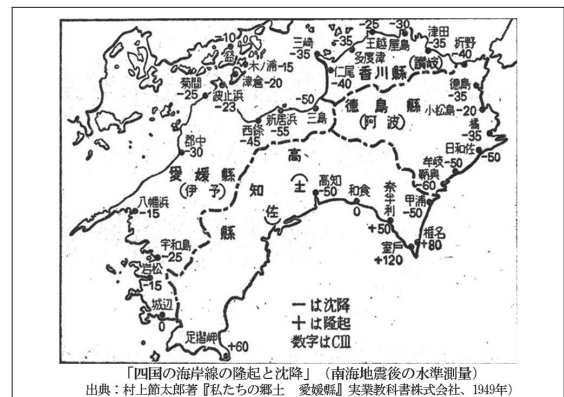


図 28



図 29



図 30



図 31

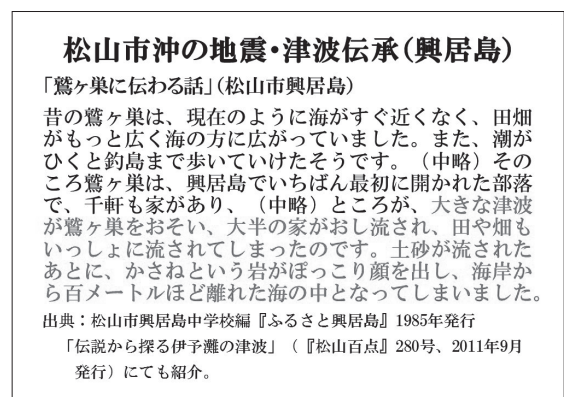


図 32

松山市沖の地震・津波伝承(中島)

「おたるがした」(旧中島町鏡地区)

むかしのある年のこと、おおけな地震があつてのう、島じゅうがぐらぐらとゆれだしたんよ。(中略)としよりが、「こりゃあ、おおごとになるど。津波じゃ。津波がくると。はよ、みな、山ん中へにげんと、おおごとになるど。」(中略)家も畑も、波にあらわれて、なんにもないんじゃけん。(中略)とてつもない大けなたるが、ごろんと山の根に、ころがとるんじゃ。(中略)村のあつたところはだれいうことなしに、あのたるのあつたところ「おたるがした」とよぶようになったんじゃと。

出典：中島町教育委員会編『中島のむかし話—伝説—』1982年発行
「伝説から探る伊予灘の津波」(『松山百点』280号、2011年9月発行)にても紹介。

図 33

松山市沖の地震・津波伝承(由利島)



参考：中村英利子
『歴史と文化・再発見の旅 新松山紀行』(アトラス出版、2012)にても紹介

図 34



宮崎県延岡市伊形町 花笠踊り

400年ほど前、伊形が津波に襲われる。7羽の白鷺が現れ舞い始めると津波は治まった。以来、踊りが奉納されるようになった(一説・伝承の創造過程は要検証)。市指定無形民俗文化財。

図 35

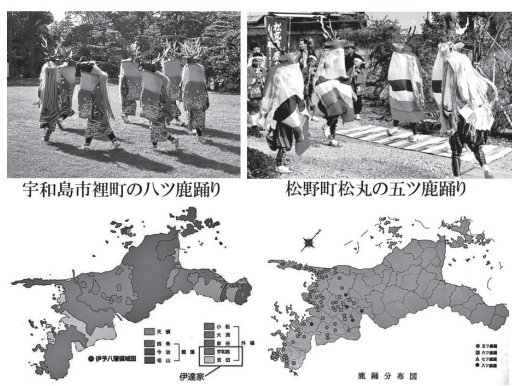
災害後の再構築—東日本大震災と愛媛—



NPO法人えひめ311主催
(愛媛への避難者支援)H28.12/4
松山市総合福祉センター

出身地、年齢、性別を問わず、自らの災害の体験・記憶を記録し、共有するワークショップ

図 36



宇和島市裡町のハツ鹿踊り

松野町松丸の五ツ鹿踊り

図 37

災害史の調査・文化財レスキュー

【災害史調査・研究】

伊予史談会
愛媛県埋蔵文化財センター
愛媛県歴史文化博物館等での成果の公表

【課題】

- ①災害の歴史・民俗に関する啓発・啓蒙書の未刊行
- ②平成13年芸予地震の「地震史」の未調査
- ③広域での災害史調査
→愛媛県歴史文化博物館では大分県との協力
平成29年1月15日「愛媛・大分交流講座」
「大分県側の史料から見た大分・愛媛の地震史」

図 38

防災・減災ネットワークの構築

愛媛県博物館協会

加盟館52館・事務局は県総合科学博物館／平成28年度テーマ「災害と博物館—防災・減災対策とネットワークの構築—」

四国ミュージアム研究会

『もっと博物館が好きっ！—みんなと歩む学芸員—』(H28年)刊行
四国内の学芸員約50名(愛媛16名)執筆
現場レベルでの日常(平時)の交流が進む。

広域での文化財保護計画

「中国・四国地方における被災文化財等の保護に向けた相互支援計画」

平成25年に中四国9県2市の文化財行政主管課間で策定
支援体制、保護対象、平時の活動(人的ネットワークの構築)等が明記

図 39

中四国被災文化財等保護相互支援計画

平成25年12月27日 中四国11自治体(9県・2市)文化財部局の申合せ

目的：災害発生時の広域支援

文化財保護法に基づく文化財、保管施設の迅速、的確な保護

支援体制：カウンターパート制

- ①鳥取県 徳島県 ②岡山県 岡山市 香川県
- ③広島県 広島市 愛媛県 ④島根県 山口県 高知県

保護対象：「文化財等」

文化財(文化財保護法) 博物館資料(博物館法)
図書館資料(図書館法) 公文書(公文書館法)

活動：①災害発生後 情報収集・レスキュー活動

②平常時 情報整備・共有、訓練、人的ネットワーク構築等

図 40

「愛媛県地域防災計画」(2015)の中の「文化財」

「愛媛県地域防災計画」(地震対策編 平成27年3月改正)
2-18-13 文化財施設
文化財建造物及び文化財が収蔵されている建築物(以下「文化財等」という。)の地震時の安全性を確保するため、文化財所有者、管理責任者又は管理団体(以下「所有者等」という。)は、必要な対策を講じるものとし、県教育委員会は、市町教育委員会の協力を得て、所有者に対して適切な指導助言を行う。

- (1) 文化財等の耐震補強工事の実施
- (2) 避難方法・避難場所の設定
- (3) 地震発生時における連絡体制、関係機関に対する通報体制の確立
- (4) 地震発生後の火災発生に対する防火施設の設置と防災訓練の実施

【「地域防災計画」に見る「文化財」他県の事例】

美術工芸品等の転倒・転落防止対策 山形等10県
文化財の所在情報の充実 秋田等11県
県と防災関係機関等(近隣県、民間団体等)との情報共有 茨城等13県
未指定文化財の救済 神奈川・鳥取・大分3県 ←大規模地震防災・減災対策大綱にない生活事例

典拠: <http://ch-dm.nich.go.jp/wp-content/uploads/2015/11/3地域防災計画の改善.pdf>

図 41

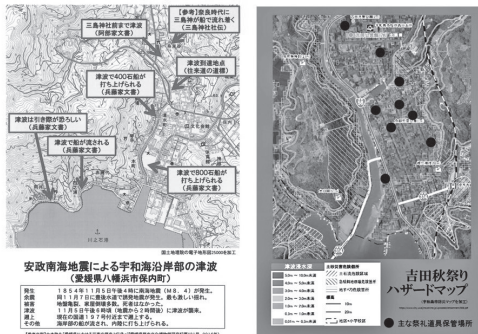
「愛媛県地域防災計画」との比較

「大規模地震防災・減災対策大綱」
(平成26年3月 中央防災会議)

(8) 文化財の防災対策

- 国、地方公共団体は、文化財の所有者等による建造物等の耐震化等の各種防災対策、美術工芸品等の転倒・転落防止対策及び各種防災設備の整備等の促進、史跡等に対する地盤の崩落防止措置等の防災対策を図るとともに、文化財の所在情報の充実、地方公共団体の文化財保護部局等と防災関係機関等との情報の共有を図る。
- 地方公共団体は、文化財の所有者等による消火活動や文化財の搬出、保全活動、観光客等の避難・誘導等が迅速・的確に行えるような体制の充実を図るとともに、日頃からの訓練等を実施する。

図 42



無形文化遺産のハザードマップ作成
(愛媛県南予地方の宇和海沿岸部)

図 43



図 44

無形文化遺産の所在情報の共有



HP「南予の祭りと芸能」(2016年10月公開・えひめい・しの南予博)
平成28年度文化庁文化遺産を活かした地域活性化事業
<http://www.iyashinonanyo.jp/culture/list/>

※3ヶ年計画で150件掲載
※東京文化財研究所の「無形文化遺産情報ネットワーク」への参加を意図

図 45

四国の災害特性と無形文化遺産の防災

愛媛県歴史文化博物館

専門学芸員 大本敬久

1 災害危険性の理解—「愛媛は災害が少ない」という忘却・誤解・油断—

一般に「愛媛は気候が温暖で災害が少ない」という言説が聞かれるが、これは事実ではない⁽¹⁾。地震では南海地震、芸予地震が 100～150 年周期でくりかえし発生し、今後 30 年以内にも南海トラフ巨大地震が約 70%の確率で発生すると予測されている⁽²⁾。また日向灘、中央構造線を震源とする地震も発生している（表 1「愛媛県における主な地震史」参照）。風水害、土砂災害は平成 16 年豪雨で 26 名の犠牲者が出たことは記憶に新しいが、明治 32 年 8 月水害では死者 828 名、昭和 18 年 7 月水害では重信川が決壊し松山周辺で広範囲に浸水し、死者、行方不明者 134 名の被害が出ている。また昭和 20 年枕崎台風でも死者、行方不明 182 名に及ぶ⁽³⁾。昭和 40 年代以降に「災害が少ない」との説明が増えてくるが、これは過去の災害が「忘却」されたことで生まれてきたもののだといえる。災害に対する防災意識の醸成、向上のためにも「災害が少ない」という「誤解」とそれにとまなう「油断」は克服する必要がある、各地域での災害の歴史・伝承調査やその成果の啓蒙・啓発活動が求められる。ちなみに「天災は忘れた頃にやってくる」とか「災害は忘れた頃にやってくる」という言葉があるが、これは四国・高知県出身の物理学者で随筆家の寺田寅彦の言葉とされる。

2 災害の伝承化—忘却・記憶の実践—

個人・地域レベルでは、災害の事実は時間とともに「自然忘却」される側面もあるが、個人レベルでは「思い出したいくない被災体験」を忘れようとする「忘却実践」の側面もある。愛媛県では平成 16 年豪雨から 10 年にあたる平成 26 年に、防災意識の喚起を目的とした水害史シンポジウムの開催を計画していたが、被災地の住民にとっては水害・土砂災害の記憶がいまだ鮮明であり、「歴史」として振り返るには早いという判断で実現しなかった経緯がある。これは地域（集団）での記憶実践と個人レベルでの忘却実践の相剋ともいえる。災害の記憶実践については、個人レベルでの記録（文書・日記・体験記等）・語りや、地域（集団）レベルでの災害体験記等の刊行等があり、これらが文字記録化された「歴史」として後世に継承される契機となる。また式典等の開催、災害碑等の建立⁽⁴⁾も記憶実践であり、災害の事実を物語化（伝説）⁽⁵⁾したり、儀礼化（年中行事・祭礼・民俗芸能）⁽⁶⁾したりすることも「伝承」を意図した記憶実践といえる。なお、災害の記憶を後世に伝承することを明確に意図していなくても、その起源が災害と関連している年中行事や祭礼は数が多い。京都祇園祭が災厄の除去を祈るもので、愛媛県宇和島市宇和津彦神社祭礼は慶安 2(1649)年の地震での被災からの復興として開始された可能性がある。人々の不安やリスクの除去が起源とされる儀礼は多く、その意味でも無形民俗文化財と災害研究とは親和性が高いといえる。

3 災害後の再構築—東日本大震災と愛媛—

愛媛県南予地方は江戸時代には宇和島藩領内であり藩主は伊達家であった。初代藩主伊達秀宗は仙台伊達政宗の長子であり、慶長 20(1615)年に宇和島に入部している。藩主に伴い家臣団、職人等約 2000 人が宇和島に来たとされ⁽⁷⁾、現在でも家の先祖が東北地方出身だと自認している住民も多い。民俗芸

能「鹿踊」も南予に約 90 ヶ所で伝承されるなど⁽⁸⁾、東北地方との歴史的、文化的繋がりは強調されていたが、平成 23 年の東日本大震災直後から南予と東北（宇和島と仙台）を繋ごうとする意識がさらに高まった。平成 23 年 10 月には宇和島市民文化祭「仙台と宇和島・伊達の絆」が開催され宮城県栗原市鶯沢八ツ鹿踊と宇和島八ツ鹿踊が共演したり、平成 27 年には宇和島伊達 400 年祭が行われ、鹿踊の東北遠征も行われたり、平成 28 年 5 月には愛媛県歴史文化博物館でシンポジウム「南予芸能講座～鹿踊の系譜」が開催された。もともとは 400 年の歴史ロマンを基礎とした繋がりであったものが、東日本大震災を経て、東北に学び、自らを顧みるといった防災も絡んだ繋がりに変化してきた。これは遠隔地であっても大規模災害によって地域が再構築される一事例といえる。類例としては松山市と郡山市の事例もある⁽⁹⁾。また、東日本大震災での愛媛県への避難者を支援する NPO 法人えひめとの協業で年齢、性別、出身を問わずに災害の体験を語り合うワークショップ「災害の『記憶』を『記録』する」を実施することで、避難者が地域の一員として、防災面で地域を再構築する機会となっている。

4 災害史の調査—課題としての啓蒙・啓発—

平成 13 年 3 月 24 日に芸予地震（震源は安芸灘、M6.7）が発生し、直後、愛媛大学と伊予史談会が中心となり「芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛」（現「愛媛資料ネット」・事務局は愛媛大学）が設立された。県内各所の地域資料救出、整理、保管等の活動が行われ、今年設立 15 周年を迎えたが、その活動が、資料保全のノウハウ・ネットワークの構築だけではなく、市民に対して防災意識を啓蒙・啓発する機会にもなっている⁽¹⁰⁾。またこの数年、伊予史談会⁽¹¹⁾、愛媛県埋蔵文化財センター⁽¹²⁾、愛媛県歴史文化博物館⁽¹³⁾等で人文系研究者による災害史の調査成果の公表も増えており、今後、市民向けの啓発用冊子の刊行も計画されている。しかし平成 13 年芸予地震に関しては地震被害を総括し、後世に伝える報告書・啓蒙書は未だ刊行されておらず、今後、人文系研究者による地震史料の収集や体験談の聞き書き等を行う必要がある。なお、災害史研究は県単位ではなく広域で行うべきもので、愛媛県歴史文化博物館では大分県との相互協力で講座を開催している。

5 防災・減災体制—ネットワークの構築と制度の活用—

文化財ネットワークとしては愛媛資料ネット以外に、昭和 35 年設立の愛媛県博物館協会（加盟館 52 館・事務局は県総合科学博物館）があり、年 2 回の活動を行っている。平成 28 年度総会では報告「災害と博物館—防災・減災対策とネットワークの構築—」があり、平成 29 年当初にも同テーマの研修を計画している。また、平成 17 年設立の四国ミュージアム研究会では、四国内の学芸員約 50 名（愛媛 16 名）執筆の『もっと博物館が好きっ！—みんなと歩む学芸員—』（平成 28 年）が刊行されるなど⁽¹⁴⁾、現場レベルでの日常（平時）の交流が進んでいる。また、平成 25 年には中四国 9 県 2 市の文化財行政主管課間で「中国・四国地方における被災文化財等の保護に向けた相互支援計画」が策定され、支援体制、保護対象、平時の活動（人的ネットワークの構築）等が明記されている。なお、愛媛県内 20 自治体の「地域防災計画」を分析し、文化財防災・減災についても効果的に明記されるよう、「大規模地震防災・減災対策大綱」（平成 26 年中央防災会議）をベースに文化財や博物館・資料館担当職員と問題意識の共有を図っている。

6 「無形」は入っているか？—文化財レスキューと無形民俗文化財—

文化財の防災・減災は、従来、建造物、歴史資料等の有形資料が主な対象とされ、祭りや民俗芸能、民俗技術など無形の文化遺産（無形民俗文化財）については「防災」という側面では充分に取り上げ

られてこなかった。「地域防災計画」でも無形文化遺産が明記される事例は少ない。東日本大震災では生活の再建、地域の復旧、復興の過程で、祭りや民俗芸能などの無形文化遺産が復興のシンボルとして扱われ、その道具の復旧、担い手の確保、祭りの場の再構築が進められることとなった⁽¹⁵⁾。「無形」についても文化財の所在情報（①人：祭りの担い手・保存会会員、②道具、③場所・建物：儀礼等を行う場所、④環境：祭りを行う「地域」そのもの）の集積や、災害ハザードマップとの照らし合わせ作業も必要であり、南海トラフ地震・津波被害が想定される南予地方沿岸部を対象に、現在その作業を進めているところである。また、無形文化遺産の所在情報の共有（将来的に東京文化財研究所の「無形文化遺産情報ネットワーク」⁽¹⁶⁾への参加）を意図して、平成28年10月にホームページ「南予の祭りと芸能」を公開した⁽¹⁷⁾。

註記

- (1) 拙稿「愛媛県の地震史—昭和南海地震を中心に—」『伊予史談』383号、2016年10月、「災害が少ない」と明記している事例は例えば愛媛県「愛媛県の紹介(2016年)」<https://www.sugowaza-ehime.com/index.php>
- (2) 地震調査研究推進本部「南海トラフの地震活動の長期評価（第二版）について」（2013年5月24日公表）http://www.jishin.go.jp/main/chousa/13may_nankai/index.htm
- (3) 拙稿「愛媛県における災害の歴史と伝承—地震・津波・水害を中心に—」『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』第21号、2016年3月
- (4) 註3にて、南海地震による四国内の津波碑や、愛媛県における大規模な水害・土砂災害の明治17年8月および明治32年8月災害による供養塔等を紹介している。
- (5) 註3にて、瀬戸内海の由利島、興居島、中島などに見られる津波伝承を紹介している。
- (6) 津波を伝承する民俗芸能の事例として西日本では宮崎県延岡市伊形花笠踊りがある。
- (7) 愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史近世上』、愛媛県、1986年1月
- (8) 愛媛県歴史文化博物館編『愛媛の祭りと芸能』、2016年4月
- (9) 拙稿「松山藩士族の安積開拓移住地の今—東日本大震災後の福島県郡山市—」『一遍会報』348号、2012年5月
- (10) 芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛編『愛媛資料ネット5周年活動記録集』2006年6月
- (11) 『伊予史談』383号（2016年10月）では「愛媛の災害史」の特集が組まれている。
- (12) 2014年6～7月に企画展「えひめ災害の考古学 —災害の過去と未来を結ぶ—」が開催されている。
- (13) 註3に同じ。
- (14) 四国ミュージアム研究会編『もっと博物館が好きっ！—みんなと歩む学芸員—』教育出版センター、2016年2月
- (15) 東京文化財研究所編『地域の文化遺産と防災』2016年3月
- (16) 東京文化財研究所「無形文化遺産情報ネットワーク」<http://mukeyi311.tobunken.go.jp/>
- (17) 愛媛県「南予の祭りと芸能」<http://www.iyashinonanyo.jp/culture/list/>

表 1 愛媛県関連の主な地震年表

番号	西暦	和暦	震源	被害内容
1	684	天武天皇13年10月14日	南海トラフ	南海、西海、東海道津波。土佐50万頃(約12平方キロ)水没。道後温泉の湧出が止まる。
2	794	延暦13年9月	南海トラフか	未知の南海地震か? 岡山大学今津勝紀氏によって指摘。
3	887	仁和3年7月30日	南海トラフ	畿内中心に五畿七道大被害。数えきれない溺死者。
4	1099	承德3(康和元)年1月24日	南海トラフ	土佐1000町(10平方キロ)以上が水没。伊予の記録なし。
5	1361	正平16(康安元)年6月24日	南海トラフ	土佐、阿波に大きな津波被害。阿波由岐1700戸流出。
6	1498	明応7年6月11日	南海トラフ	黒島(新居浜市)崩壊。8月25日東海地震で浜名湖海に繋がる。
7	1596	慶長元(文禄5)年閏7月9日	中央構造線	旧東予市で地盤沈下。板島城破損(宇和島市)。3日後に豊後地震、4日後に伏見地震。
8	1605	慶長9年12月16日	南海トラフか	伊予関連の文献なきも太平洋岸大きな被害。
9	1649	慶安2年2月5日	安芸灘～伊予灘	松山城、宇和島城、石垣崩壊。
10	1684	貞享2年12月10日	安芸灘～伊予灘	松山城破損。道後が泥湯となる。
11	1707	宝永4年10月4日	南海トラフ	県内全域に大きな被害。宇和島では床上1m 50cmの津波。死者12人、半死24人。
12	1854	嘉永7(安政元)年11月5日	南海トラフ	県内全域に大きな被害。南予沿岸部に津波襲来。
13	1854	嘉永7(安政元)年11月7日	豊後水道	安政南海地震の誘発地震。南予で多くの建物が倒壊。
14	1857	安政4年10月12日	安芸灘～伊予灘	強震が7日続き住民は竹林に避難。大洲、松山、西条被害
15	1905	明治38年6月2日	安芸灘	愛媛県内負傷者17名、建物被害235棟。
16	1946	昭和21年12月21日	南海トラフ	愛媛県内死者26名、家屋全壊302棟。2年前に東南海地震。
17	1960	昭和35年5月24日	チリ地震	御荘で養殖筏被害。
18	1968	昭和43年4月1日	日向灘	日向灘地震のあと8月に宇和島沖地震。
19	2001	平成13年3月24日	安芸灘	芸予地震。愛媛県内死者1名、負傷者75名

回想法シート(「災害の体験・記憶」)

記入日 年 月 日
居住地 県 市・町・村

お名前			様			出身地 県 市・町・村			メモ(ご自分の体験・記憶)		
和暦	西暦	月日	全国の災害／愛媛の災害年表	メモ(ご自分の生年・年齢)	〇知っている ×知らない	〇経験した ×していない	(参考)東予の災害	(参考)中予の災害	(参考)南予の災害		
昭和10年代	昭和18年	1943	7月下旬	昭和18年水害。愛媛県内で死者・行方不明者134名			今治-松山間鉄道不通	重信川の堤防決壊。松山市南部、松前町北伊予、岡田、松前の広範囲が浸水。	大洲で大水害。八幡浜、西予市野村など各地で河川氾濫。過去100年で最大の水害。		
	昭和20年	1945	9～10月	松崎・阿久根台風。終戦直後を襲った猛烈台風。愛媛県内死者・行方不明者182名。			強風で稲が立ち枯れ。収穫に大きな被害。	松崎・阿久根台風で重信川が、松山の松前町で1万戸が浸水。			
	昭和21年	1946	12月21日	昭和南海地震(M8.0)。全国で死者1300人。愛媛で死者26人、家屋全壊155棟。			現在の西条市壬生川を中心に死者9名。海岸部で地震沈下、浸水、液状化の被害。	現在の松山・東温・松前・伊予で家屋倒壊により死者14名。津波で浸水被害。八幡浜で死者1名。津島で地盤沈下。			
	昭和22年	1947	9月14日	カスリーン台風。関東で大きな被害。利根川・荒川決壊							
昭和20年代	昭和24年	1949	6月18日	デラ台風。全国で水害、愛媛県で漁船多数遭難。					デラ台風で宇和島で漁船多数遭難。		
	昭和25年	1950	9月10日	キジヤ台風			壬生川をはじめ沿岸各地で高潮被害。	大雨・高潮被害。県内死者5人、負傷者92人、家屋全壊178戸、床上浸水8,124戸。			
	昭和26年	1951	10月15日	ルース台風で瀬戸内海で高潮被害。			大雨・高潮被害。県内では東予を中心に死者28人、行方不明17人、家屋の全壊525戸。				
	昭和34年	1959	9月26日	伊勢湾台風。高潮被害。台風による死者・行方不明者最大。							
昭和30年代	昭和38年	1963	1月	三八豪雪				三八豪雪で、久万町内で約2mの積雪。交通途絶。	三八豪雪で大洲市山間部では1.5mの積雪		
	昭和43年	1968	4月1日	日向灘地震(M7.5)。愛媛県内で負傷者3人。					宇和島で震度4。地震から30分後に46cmの津波。		
	昭和43年	1968	8月6日	宇和島地震				宇和島地震により負傷者県内15名。道路損壊多数。各所で停電	宇和島地震(M6.6)。南予各地で震度5を記録。家屋損壊多数。		
	昭和45年	1970	8月21日	台風10号により県内浸水被害			台風10号により今治市の防波堤決壊。市街地が浸水				
昭和50年代	昭和47年	1972	9月8日	東予集中豪雨			集中豪雨で今治市で蒼社川などが氾濫				
	昭和51年	1976	9月	台風17号で全国の死者・行方不明者171名			台風17号。今治は800mm近くの降雨により、各所で土砂災害。死者多数。				
	昭和54年	1979	6月～7月	松山市内河川氾濫				集中豪雨で、石手川、宮前川などが氾濫。錦文街など松山市中心部でも浸水。			
	平成3年	1991	9月27日	台風19号で強風、高潮。青森県でリンゴ被害(りんご台風)				中島で甚大なミカン被害。松山高浜で高潮被害。	宇和島沿岸各地でミカンが潮をかぶり、大量枯死。		
平成50年代	平成6年	1993	7～11月	平成6年大水				松山大浸水で、11月下旬まで124日間の断水。69億円の農業被害。			
	平成7年	1994	1月17日	阪神・淡路大震災(M7.3)				松山で震度3			

報告 3

文化遺産の複製と信仰環境の維持－防犯対策の事例から－

大河内 智之（和歌山県立博物館）

久保田 午後のおひとり目の発表者は、和歌山県立博物館の大河内智之さんです。午後はおふたりの発表がありますが、どちらも有形のモノをどう扱うのかという内容です。無形文化遺産とはいえ、どうしても有形のものは関わってきます。それで有形の話もぜひ取り混ぜたいと考えていたところ、たまたま和歌山県立博物館で 3D プリンタを使った展示や、それを防犯に結びつける活動をされている様子を伺って、これは非常に面白いなと思いました。聞かれる方も最初はびっくりされると思うのですが、非常に興味深いお話になるかと思います。それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに

和歌山県立博物館主査学芸員の大河内です。どうぞよろしくお願いいたします。私自身は仏像や神像などを対象とする彫刻史、美術史を専門としています。無形民俗文化財という枠の中にしっかりと話を落とし込めるかどうか自信がないところもありますが、いま和歌山県立博物館が核になって行っている複製を利用する事業をご紹介します。まずは文化財の盗難の問題をお話させていただき、それからその先でどうやって守るかというお話をするかたちになるかと思います。

現在、文化財の盗難被害が全国的に発生しています。国の重要文化財等の被害もありますが、多くの場合はそういった指定を受けていないものが盗まれています。盗難被害だけではなくて文化財を破壊する、破損させるような被害もたくさん起こっているわけで、直近で言うといままさに被害が拡大しているのが福島県の須賀川・郡山・福島で、お墓の石仏等が倒されて首が折られたり、お寺に侵入されたというケースも起こっています。また続報が出てくるとありますが、100 体以上壊されているという話です（2016 年 12 月 10 日犯人逮捕）。そうした文化財が被害を受けるという事態がいろいろと起こっている状況です。

1. 和歌山県下で発生した文化財連続盗難事件

今回は特に和歌山の事例ということになりますが、和歌山では過去最悪といってよい盗難被害が起こっています。平成 22 年の春ごろから翌年にかけてですが、警察に被害届が出されたものだけで 1

年ほどの間に連続 60 件、仏像、仏具、仏画、そうしたものが盗まれました。被害届の数では仏像が 172 体、仏具 90 点でしたが、これは実数とは到底言えない数で、実際にはそれ以上の被害が起こっていて被害届も出ていない、あるいは盗られたことにさえ気づいていないという、そんなケースも含まれていると考えられます。非常に大規模な、空前の被害が和歌山では発生しました。

なぜこういった文化財盗難が増加するのかということですが、現在は盗む側と盗まれる側の状況が不幸な一致をしている時期と言えるかと思います。盗む側の事情ですが、仏教美術、仏像等のブームが結構長い間続いています。仏像好き、あるいは骨董品好き、テレビ番組などの影響もありますが、そうした需要の広がり国内でも起こっていますし、世界的なマーケットとしても日本美術あるいはアジアの美術というのは非常に愛好される方がいます。一方で、ネットオークションなど取引方法の多様化もあり、そういうところに供給するために卑劣な犯罪を犯す犯罪者が出現しているという状況があります。

一方、盗まれる側ですが、住職のいるようなお寺も被害を受けますが、それよりは圧倒的に集落で守っているお堂や神社が被害を受けています。村で守っている、コミュニティで守っているような場所です。そうしたところが人口減少、高齢化といった本当に大きな問題の中で、かつて日々の信仰活動で守られてきた信仰の場が維持・管理しにくくなっている現状があります。そういう中で守るほうが守り切れない、盗るほうはそれがお金になるわけですから盗る動機がずっと続くわけです。そういうことが不幸な一致をしていると言えるのではないかと思います。

このように、平成 22～23 年にかけて盗難被害が続々と発生しました。昨日どこかの市で盗られた、次の日にはどこで盗られたというような情報がくる。例えば、図 1 は和歌山県紀の川市の中津川行者堂という場所ですが、葛城修験の聖地のひとつです。聖護院の修験者の拠点になった場所で、極めて重要な修験道関連資料がお堂の中に密集しているようなところなのですが、管理している集落から 2 キロほど山の中に入った場所にあり、かつ軽トラぐらいだったら入れる道がある。また集落の中を通らずともこのお堂に行けるとか、防犯のことを考えると三重苦みたいな場所です。過去にも盗難被害を受けていたのですが、この時も平成 22 年 4 月にまずお堂の外の鰐口が盗られ、その後、4 ヶ月後に本尊が盗られるというかたちで被害が拡大しました。私自身が今日までずっとこの文化財の防犯のこと、盗難のことについて継続して行っているのは、実はこの中津川行者堂の事例がきっかけになっています。4 月に鰐口を盗られた時に、一部寄託品は博物館で預かっていましたので、地区の役をしている人から、「実は鰐口を盗られた」と電話がありました。その時の電話は「鰐口を盗られたんやけれど、新しい鰐口はどこで買うたらええのかな」という電話だったんです。それは仏具屋さんで買ったらいいのですが、でもちょっと心配ですねというようなことを言いまして、またお堂の様子を見に行きます、なんてことを言いながら目の前の仕事をバタバタとしているうちに、8 月にもう一度電話がかかってきました。「お堂の扉が破られて、本尊なくなってしまうたんや」と連絡がありました。本当に血の気が引くというのは人生の中で何回か経験するのかもしれませんが、もうこの電話の時に本当に血の気が引きました。私がすぐに対応していたら絶



図 1 中津川行者堂（紀の川市）

対に防げた被害なのに、みすみす次の被害を地域の人たちに受けさせてしまった、自分の責任だという思いを強く持ちました。博物館、文化財行政に関わる者として、盗難に対する対策というのはまさに自らも当事者との思いを持ち、自分の問題と受け止めて、取れる対策を取っていきました。

まず、この中津川行者堂は管理をする上では本当に三重苦みたいところなので、博物館としては、とにかくいったん全部博物館の収蔵庫に移しました。一方、こういう被害が拡大している状況だったので、県教育委員会としてもうひとつの対応を取りました。この頃までは、被害の発生を把握できるケースもあったのですが、例えば、新聞報道なんかで先に出てこちらが把握するケースもありました。そこで、とにかく行政としてどんな盗難被害が起こっているのかを、タイムラグなしにきちんと把握しようということで、県教委の文化遺産課と和歌山県警が相談をしました。文化財指定・未指定は関係なく、文化財だと想定される被害届が県警に出たら、その情報を直ちに県教委にFAXで流してもらうという体制を作りました。いまでもこれはやっていて、例年大体3～4件の被害が発生しているのを把握できています。全国的に被害統計をとると和歌山県は圧倒的に被害が多い県だと見えるのですが、実態は、そうして被害を可視化しているので結果的に件数が出るというかたちになります。実際には全国都道府県、どこでも日々盗難被害が起こっているというのが実態です。それをどう把握するかというのは非常に大事なことだと思います。

博物館としては、そうやってお堂にあったいろいろな文化遺産を預かるという対応で守るとともに、展示というかたちでアピールができますので、文化財の盗難が多発していることをアピールしました(図2)。まだ被害が拡大している最中に急遽年度計画の中になかった展覧会を差し込んで、それをマスコミにもたくさん出して、いろいろな方面から守っていく、管理をしないといけないということを実践することもしました。

その後、平成23年4月になって犯人が逮捕されました。連続60件以上の被害でしたので、被害が発生している最中は、本当に大規模な窃盗団が暗躍しているのではないかと疑心暗鬼でしたが、捕まってみたら車中泊をしている住所不定の中年の男が昼間に盗りやすそうところを見繕って、夜に盗っては和歌山から大阪に出て、大阪の古物商に延々と売っていた、それをずっと繰り返していたんだということがわかりました。盗んでいた犯人も当然悪いわけですが、もうひとつ被害を拡大させたのはこの買い取っていた古物商で、まさに犯罪の片棒を担いだと思いますが、結果的に言えば共犯ではなかったので逮捕はされませんでした。そういう業者のところに行ってしまったということも含めて、いろいろな悪い要素が重なって、大規模な被害になったという状況でした。

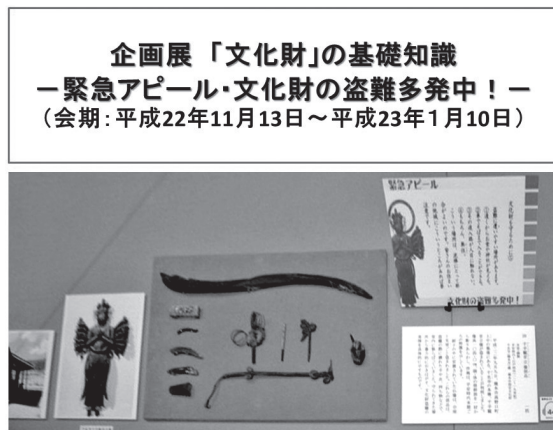


図2 和歌山県立博物館での緊急アピール



図3 中津川行者堂の本尊(役行者像)



図4 押収された盗難品

結果的に古物商の元にあった、まだ転売していなかった文化財は警察が所有権を放棄させて回収しました。図3は、先ほどの中津川行者堂の本尊です。役行者像も床に置いて保管されていた状況ですが、こんなかたちでも何とか取り戻すことができましたのですが、図3の左で役行者の脇にいる前鬼と後鬼という2体の鬼は取り戻すことができませんでした。ちなみに、この左側の鬼のお像は、1年くらいたってから、いろいろと情報を収集する中でインターネット上に画像が出ていましたので、どうも「ヤフオク！」(オークションサイト)

で転売されていたということが後から追跡ができましたが、いまはもうどこにあるかわからない状況です。そんなかたちで売られて、いまでも行方不明になっています。

被害届を出した所蔵者の元に返ったものもあります。古物商から回収した何十体の中には返すことのできたものもありますが、大半が取り戻すことができていない状況です。それから、ややこしい話なのですが、そうやって回収したけれども、所有者の元に戻すことのできない文化財というものも発生しました。多くの地域でお堂の中の仏像を盗られたわけですが、ほとんどの場所で写真ひとつなかった。写真がないのでもちろん寸法や記録もないわけで、被害届を出す時もものすごく困っている地域が多かったです。「一体、何が何体盗られたんや」と言っても、ほこりの跡とかで「5体やな」というのは分かるのですが、「えーと、何如来かと言われてもわかりません」とかいうかたちで、そもそも何を盗られたかわからないという地域もありました。それでも被害届は何とかして出して受理してもらうのですが、いざ目の前にそれが戻ってきても、それが自分のところのものであることを確定する材料が何もなし。記憶があればそれでも何とかいけますが、それもなかなかない。普段、年に1〜2回しかお堂を開けないなんていうところはざらにありますし、ではその時に仏さんの顔をまじまじ見ながら拝んでいるかといったら、そんなこともないんですね。そうすると「自分のところのはどれかな」ということになってしまいます。

まさにそんなことも重なって、最終的に回収したのに戻すことのできない文化財が43点取り残されてしまっています(図4)。警察は、こういう証拠品というのは、ある程度年限がたつと処分しないといけないんですね。処分ということは売るか捨てるかなのですが、売るわけにも捨てるわけにもいかなので博物館に移管するというかたちで処分をしてもらって、博物館では所有者不明の預かり品ということでこの全てを受入れ、いろいろな追跡をしました。

例えば、図5の3体については私自身が過去に調査をしたデータを確認していたら、平成16年の写真に同じものが映っていたのを見つけたので、これについては返せました。しかし、そのような具合に返せる事例もなかなかなく、まだ40点が所有者不明のままとなっています。事件が解決して犯人の裁判が終わった後もまだ爪跡が残っているような状態です。

あるいは一部はオークションカタログに載っているのが見つかりました。これも博物館に送られてきたカタログをペラペラと見てみると、「あっ、見覚えのある仏像が載っている」ということで調べたら、紀の川市穴伏の円福寺というお寺で盗まれた仏像3体でした(図6)。これは先ほど言った古物商で見つかったものではありません。ですから要するに、早い段階で転売され、転売、転売が重なっ

たものがオークションカタログに浮上してきたのです。それをオークション会社に連絡して、それから所蔵者と間をとって交渉し、買い戻しをして取り戻すということができた事例もあるのですが、それは本当にごく一部でほとんど奇跡に近いものであり、なかなか取り戻すことができないというのが実際のところです。

先ほどの、例えば博物館で展示をする際、それからいろいろな地域で調査をしたりする時に防犯のことをお伝えする中で、なぜ村が守ってきた文化財が盗まれてはいけないのかということをお伝えしています。3つ挙げていますが、まず文化財の窃盗というのは伝来してきた本来あるべき場所からの篡奪です。文化財というのはまさに歴史を証明してくれる資料ですから、それを篡奪されるということは地域の歴史あるいは地域に生きる人々の歴史を奪うことになります。まさに文化財盗難の卑劣さというのはそこにあるんだということを強調しています。例えば「緊急アピール・文化財の盗難多発中！」という展覧会の場合は、盗難の現場に落ちていた仏像の部品を展示しました。このころは、まだその仏像は見つかっていない段階ですが、当時盗まれていることがわかった時に、現地のお堂に仏像の部品がばらばらと落ちていたわけなんです。文化財盗難や仏像の盗難は、どんなふうに盗まれているのかなかなかイメージを持ちづらいものだろうと思います。何となく盗賊が華麗に盗み出してひらりと逃げていくみたいな、下手をしたらそんなふうに思ってしまうかもしれません。でも、現実の文化財盗難の現場は本当に悲惨です。仏像を盗っていく人が文化財に精通した研究者みたいな人だというのも、ほぼ実態とかけ離れています。よく言われるのが、「調査してデータを出したら、それを見て盗りに来るので調査はせんといて」という話がありますが、そんな緻密な調査をして盗っているような泥棒はほぼいない。重要文化財を狙うような窃盗団について言うと、そういう要素がないとは言わないですが、いま日々起こっている文化財窃盗というのはもうそんなレベルではありません。盗りやすいところから盗っています。盗りやすいところから盗っているのです、その仏像自体を大切にしようという、そんな思いもありませんから、まさに引きちぎるように、引きはがすように現場から篡奪していっています。ですので、脆弱な部分の部品なんかがばらばらとこぼれようがお構いなしで、



図5 所有者に返還できた仏像
(紀の川市桃山町安楽寺所蔵)



図6 オークションカタログで発見された盗難仏

まさに現地はそんな悲惨な状況で盗まれています。そういうこともこの時の展示では示しました。普段の博物館では極めて冷静に理論的に展示をするわけですが、あえてそうではなく感情を込めるかたちで、絶対に盗みの行為は許せないんだということを伝えながら展示をしました。

文化財の窃盗は、まさに歴史を奪う行為であるということです。刑法で言うと窃盗犯なので、被害額が大きくなければ微罪でしかないのですが、実際には歴史を奪う行為なのです。例えば、パーミヤンの石仏やパルミラの遺跡が爆破されるのと村のお堂の仏さんが盗まれていくのは全く同等の倫理的な罪を犯している犯罪だということを強く感じます。

2番ですが、ものが盗まれると警察に届けますが、これは物質としての文化財が盗まれたことに対する届け出ということです。でも、そのものの被害だけではなく、紛れもなく所蔵者あるいは地域の人々の心、絆にもダメージを負わせることになります。喪失感、あるいはもうちょっとこうしていたらよかったのにと自分を責める自責の念。それから、その時に村のお堂の役をしていた人が「おまえ、何しとったんや」というかたちで責められる。もう、まさに絆にも傷をつける。本当に様々なダメージを、文化財盗難によって負うという状況があります。

そこで、3番です。そうした被害に遭わないために何が大事かということ、もう一言しかありません。盗まれないこと、もうこの結論しかないわけです。盗まれないことこそが、こういうダメージを受けないために必要。当たり前と言われるかもしれませんが、それしかないという状況ではないかと思います。そのために体制づくりを行うことが重要ですよということになります。例えば、防犯の取り組みをしましょう、鍵が掛かっていなかったら鍵をしましょう、鍵が1個しかなかったら2〜3つにしましょう。防犯カメラ、防犯のライトをつけましょうと、お金があれば、電気さえ通っていれば、とかそれはいろいろな対策はありますが、それが何もできない地域があるということが現状です。例えばあるお堂に平安時代の仏像があると、「これは850年前の仏像です、すごいものがよく残っていましたね、次の世代までしっかり受け継いでいきましょう」と、文化財行政に携わっていると、われわれはつい未来に引き継ごう、バトンタッチしていきましょう、守ろう守ろうと言うわけです。でも例えば75歳ぐらいの区長さんが「うちの集落は僕が一番若いんや」と言うような、本当に限界集落になると、誰にどうバトンタッチすればいいのか、ということは具体的に起こり得るわけです。それに対して何か方法がないかということで、今日の文化財の複製を活用するということがようやくひとつの方法として出てくるということになります。

2. 文化財の複製を活用した文化財の保全と信仰環境の維持

3Dプリンタを使った文化財の複製のついでにご紹介します。文化財の複製は、例えば複製を作る業者をお願いしたら本物そっくりにきっちりとしたものを作ってくれますから、別にいま出てきた話ではないのですが、ちょっとした大きさの仏像を1個作ってもらうのには、やはり数百万、あるいはそれ以上という単位でお金がかかってくるのが現状です。5万円で作れるんだったらやろうかとなるのですが、300万円ですと言われたら複製作りはなかなかできません。

実は、和歌山県博では地元の県立和歌山工業高校と連携を取り、この盗難の問題とは別に、平成22年度から展示のユニバーサルデザインという観点で文化財レプリカを作る取り組みをしています。視覚に障害のある方に博物館をどう利用してもらうかという問題に対して、地元の高校が導入した3Dプリンタを活用し、盲学校・工業高校・博物館が連携して、「触れる文化財レプリカ」を作ろうと

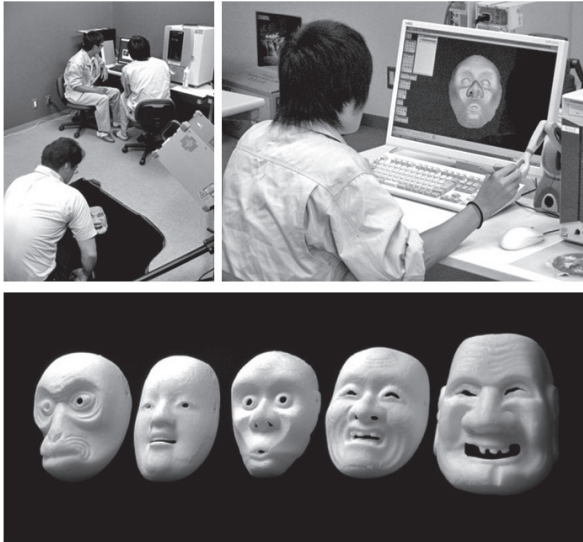


図7 レプリカ製作

いうことで取り組みを始めていました。図7が実際に計測して3Dプリンタ、ABS樹脂プラスチックで作っているものですが、学校と連携しますから、人件費は要らず材料費だけで、非常に精度の高いものが作れると。例えばお面だったら2万円位の材料費ですむということであれば、博物館で自由に触ってもらう資料としてどんどん作れる。そうした技術的な達成が背景にあります。それを踏まえて、文化財盗難に対してひとつの方法として、このレプリカを活用するということを思いつき、いま継続しています。

製作の方法ですが、まず学校に文化財を搬入します。これは学芸員がまさにそのプロですから、梱包して輸送し、学校で開梱します。そして図8はレーザーで計測したデータを高校生がつないでいるところです。いろいろな角度から取ったデータをつないでくれています。出来あがったデータはどうしても細部に取り切れないところ、甘いところ、修正を施さなければならないところがあります。それをCADという、工業高校で製図などをするためのソフトを使って、細かいデータを修正、調整していきます(図9)。そして出来上がったデータをプリンタにかけて(図10)、それを出力したら図11のような形で出てきます。図11は左が実物で右が複製ですが、そうやって出来上がったものに博物館で色を塗って完成させるというかたちで、レプリカを作っています。図12は左が平安時代後期、900年ほど前の薬師如来座像です。右が着色した3Dプリンタ製の仏像ということになります。

色塗りの部分がやはりどうしても大変なのですが、いまのところ博物館の職員で油絵をやっていた人に「ちょっとやってみる？」と聞いたらものすごく上手にやってくれているという奇跡が起こって、こうして色を塗れているのですが、なかなか色を塗るのは大変です。業者で作る際も色塗りの工程で工程数が増えるので、何百万円になっていくわけですが、いまはそんな方法でやっています。

今後は和歌山大学の美術教育専攻の学生に協力してもらうことになっています。こうして、業者に頼んだら何百万円、下手をしたら一千万円と言われるようなレプリカが、材料費数万～数十万円ぐらいで済む。その数十万円もいまは文化庁からの補助金を活用してやっていますので、地元負担なしにそうやって作ったものを置き換えるということ、それが技術的に可能だということで進めているわけ

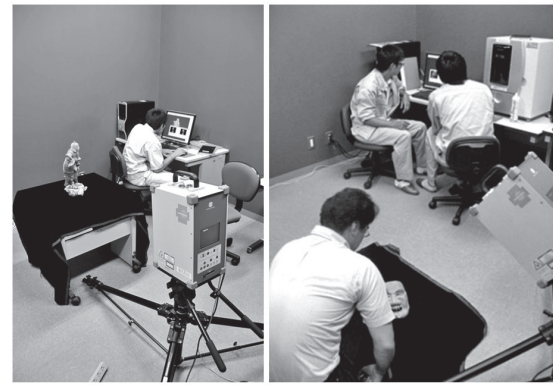


図8 レーザー計測の様子



図9 CADソフトによる3Dデータの修正作業



図 10 3D プリンター

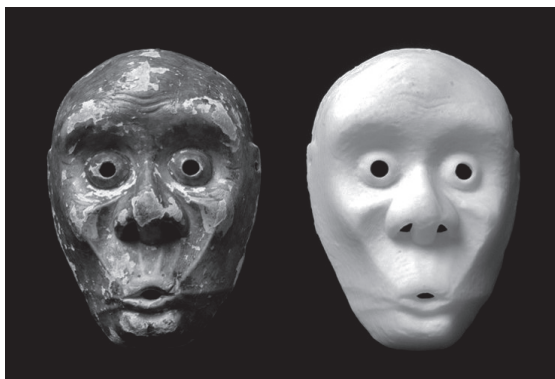


図 11 実物資料（左）と出力したレプリカ（面）



図 12 実物資料（左）と彩色したレプリカ
（薬師如来座像）

です。

実際に、そうして作った文化財の複製が現地のお堂に安置されています。今年度までに 9 か所で安置をしています。図 13 は一番初期に、まだ色塗りが難しくて大変だった段階のもので、あまり本物っぽくなっていないのですが、和歌山県紀の川市林ヶ峰観音寺というお寺の約 1,150 年前の平安時代初期の仏像です。調査に行ったら、村のお堂の片隅にちょこんと置いてあった仏像が平安時代初期の仏像だったのです。最終的に博物館で預かったのですが、預かった後、県指定の文化財になりました。そういう全く無住の村のお堂に、ものすごく古い仏像がありました。お堂は地区の集会所を兼ねていましたが、そんなに頻繁に人が来ないようなところだったので、地域の人たちが「そんな古いものだったら管理ができないから怖い」ということになり、博物館で預かることになりました。ポイントになるのは、博物館がそうした文化財を預かるということ自体は別にいま始まったことではなくて、昔から延々とやっているわけです。博物館はそういう機能がありますから、モノ自体を預かることはたやすくできます。しかし 1,150 年前の仏像がそこにあるということは、要するにその地域の人たちがずっと維持し続けてくれたわけですね。地域の人たちとともにあった仏さんを預けて、モノさえ残すことができればそれでいいのかという問題があります。信仰の対象ですから、管理は大変でも、それを預けていいのかという気持ちもやはり一方であるわけです。そういう中で、文化財を守りつつ、安置されてきた信仰環境も守り維持するためのひとつの方法として、複製を現地に置き、実物は博物館で保管するというのを平成 24 年に初めて行いました。

この方法がベスト、ベターだとか、どんどんやるべきだということではありません。地域の実情の中で文化財を守るための様々な手段のひとつだということです。集落でもう一度価値の再発見をしてみたらみんなで守っていく体制を作る、これがベストですが、その体制も取れない、さきほども言ったように、無住であつたり高齢化していたり、あるいは

はお堂に電気もきていないとか、そういう状況もある。その究極の選択のひとつとして、この3Dプリンタ製のお身代わりの仏像を安置するというを行いました。

これはオークションカタログに出ていて買い戻すことができた愛染明王立像の事例なのですが、盗まれたのはやはり無住で、普段はほとんど地区の人が行くことができない集会所に安置されている仏像がどっと盗られてしまった。そのうち3体を買戻しというかたちで取り戻すことができたのですが、取り戻した後もお堂の管理状況を劇的に改善させることはできなかった。ではどうか、せっかく取り戻したものをまた盗られたら怖いので博物館で預かってもらうという選択を、ここの地域の場合も採りました。

図15は左が実物で、右が3Dプリンタ製のレプリカです。かなり複雑な形状なので技術的に大変でした。図16は高校生が奉納しに行った時の様子ですが、高校生たちが頑張って本当に細かくデータを取ってくれて、何とかこういう復元をすることができました。いま、ここに高校生が映っています。先ほどの例でも図14に高校生が映っています。高校の授業の中で作って、色付けは博物館でしますが、それをただ単に渡して終わりではなく、製作に携わった高校生とあえて一緒に納めに行き、村の人たちにも集まってもらうというところまでをひとつのセットにして、この複製を安置する事業を行っています。

もうひとつの事例は、さきほど図12で示したお像です。ここの場合もお坊さんに来てもらって、村の人たちにも集まってもらって、この薬師寺というお寺の本堂の厨子の中に安置しているのが、図12の右側の複製です。住職さんと言っても兼務住職なので、普段はこのお寺にいらっしゃらない方です。その日は来てもらって魂入れの儀礼をすることにより、まさに本尊がこの3Dプリンタ製のレプリカに移ったというかたちになります。(図17・18)。それは宗教的な儀式、儀礼ですが、一方で高校生たちがこうやって地区の人たちと交流をする。そしてい



図13 実物（左）とレプリカ
(紀の川市観音寺林ヶ峰観音寺)



図14 奉納の様子（紀の川市観音寺林ヶ峰観音寺）



図15 本物（左）とレプリカ
(紀の川市円福寺愛染明王立像)



図 16 奉納の様子（紀の川市円福寺愛染明王立像）



図 17 地域の方々とレプリカの仏像



図 18 レプリカへの魂入れ

いろいろお話をする。こうやって複製を安置することに対して、やはり当初は抵抗があったり受け入れ難かったりするケースがあり得るのではないかと思います。けれども、実際にやると「もうこれで安心して夜も寝られるわ」「代わりに来たお身代わりの仏さんを本物や思うて祀っていくわ」「複製と言うからもっとちゃちいもんやと思ったらしっかりしてるやんか」などという感じで受け入れてくれました。「ちょっとそれはな…」と面と向かって言われたケースというのはありません。ただし、内心の問題はわかりません。ひょっとしたら、「やっぱり複製っちゅうのはな…」と思っている人もあるかもしれない。それからこういうことをやりましたと報道されたり、SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）で広報したりすると「お寺に偽物を安置するなんてありがたくないわ」みたいな意見が、当事者以外のところからたくさん降ってきます。でも、当事者はそういう言い方をしないし受け止め方をしていないので、そうした批判はあまり気にしていません。

複製の仏像と実物の仏像の違うところは、要するに経てきている時代、時間の差があるということです。そういう点で違いはあるかもしれませんが、新しいお身代わりの仏像を、製作に携わってくれた、頑張ってくれた高校生が納めにいくことによって「あの子らが作ってくれたんや、うちのためにこうやって頑張ってくれたんや」となる。「どういところが難しかった？」とかいろいろな話を聞いて、「いやあ、ここのところは難しかったんですけどどうまいことができましたわ」なんて話をしながら1時間ほど滞在して、その集落の様子も見てもらっ

て帰ってくる。学校としても、教育効果が高いということによいということになりますが、地域としても、こういう子たちが作ってくれたんだという、そういうひとつの新たな物語になります。仏像が、高校生たちが作ったものだという物語を背負っていることによって、受け入れる際の心理的ハードルも下がっているのかなと思います。「あの子たちが作ってくれたもんや」という物語、そして、魂入れをしてお身代わりになったというかたちで十分受け入れをしてもらえているというのが現状です。

これに関わったあるお坊さんが雑談のなかで話していたのは、「実物は木、複製はプラスチックで、素材が変わっただけで、きちんと儀礼、儀式をしたら祈りの対象としては一緒なんちゃうか」ということでした。

こうした物語などの価値付け等も含めた取り組みをしているわけですが、これは3Dプリンタを使ってすごいやろう、というふうに進めている事業では全くありません。マスコミとしては高校生が文化財を最新技術で作った珍しい活動みたいなかたちで受け止められ、それで報道してくれる、それはそれでありがたいのですが、やっている側としてはそういう最新技術をひけらかしたりするつもりは毛頭無いわけです。盗難被害に対して、とにかく盗まれないようにするためのひとつのアクションとして、管理体制が取れない地域について、方法のひとつとして、仏像を安全な場所に保管するという措置をとる。かつそのことと、信仰環境——これが守られてきた場所というのはそれ自体がひとつの文化財だろうと思いますが、その環境を守る、この2つを両立させるためにこうした取り組みを行っているところです。ですから、これだけが全ての方法であるとは到底思っていない。文化財を守る、それは有形のもの、無形のものを両方とも守っていくためのひとつの方法として、こんなことを和歌山でやっているということを皆さんにお伝えすることができたらと思います。ありがとうございました。

質疑応答

質問者 犯人の裁判の結果はどうだったのでしょうか。というのは、量刑は、こういう犯罪の抑止力にはならないと考えたほうがよろしいのでしょうか。

大河内 この犯人の場合は連続60件ということで被害届が出ていて、被害額も数字で出てはこないのですが結局加算していけば大きくなるということで、最終的に裁判で確定した刑は懲役3年という刑でした。窃盗犯の懲役でいうと長いと思いますが、文化財を盗んでいくようなやけっぱちになっている人にとって言えば、それが抑止力になるような量刑かどうかというと、そんなふうにも思わない、非常に軽い刑ではないかと思います。

質問者 鳥取県教育委員会の中森祥です。いま10体作っておられるということですが、どういう基準で選定されたのでしょうか。

大河内 実質的に言えば、「うちのも作ってほしい」という声が上がってくるケースもあるのですが、学校と連携して作っているために、次から次にどんどん作れるわけではありません。やはり学校の授業のカリキュラムの中に組み込んでもらってやっていますので時間の限りもあります。年間で作れる件数でいうと2件くらいになっていきます。ですから、そのところは残念ながらコントロールしなければならぬ状況にあります。そこは日常的にいろいろな所蔵者さんと連携を取っている博物館で、緊急性の高いものを、次はここがふさわしいということでコントロールしています。もちろん先方と既に接点があるということになります。そもそも、モノを輸送したり運んだりする必要もありますので、博物館がある程度様子を見ながらやっているという状況です。

平成28年12月9日

第11回東文研無形民俗文化財研究協議会報告資料

文化遺産の複製と信仰環境の維持

—防犯対策の事例から—

和歌山県立博物館主査学芸員 大河内 智之

1. 和歌山県下で発生した文化財連続盗難事件

・事件の概要

和歌山県では平成22年（2010）春ごろから翌年4月にかけて、連続60件（被害届提出分のみ）に及ぶ仏像等文化財の盗難事件が発生した。被害届が提出されなかったり、被害に気づいていない事例もあったと想定されるので、その数はさらに多かったとみられる。被害に遭った場所のほとんどは、地域住民によって管理される無人の寺（堂）や神社（小祠）であった。全国的に言っても、過去最悪レベルの連続文化財窃盗事件であった。文化財の盗難被害が増えている要因は、骨董品や仏像のブーム等により国内外で文化財の需要が高まっている一方で、集落の人口減少や高齢化によるコミュニティの縮小により、保全するための体制を構築しにくくなっていることが大きい（→あらゆる文化財を取り巻く状況と同様であるが、一方で金銭が関与するため悪質な被害につながり、ただちに発生する可能性があり緊急性が高い）。

・盗難被害発生中の状況

平成22年夏ごろから、例年に比べて盗難被害が際立って多いことが把握されはじめ（当初は新聞報道等）、和歌山県教育委員会では和歌山県警察の担当課と連携し、被害届があった場合に情報を提供してもらう体制を作り、その都度、市町村教育委員会に注意喚起を行った（協力体制は現在も継続中）。

和歌山県立博物館でも資料の緊急避難（紀の川市・中津川行者堂）や、注意喚起のため企画展「文化財」の基礎知識－緊急アピール・文化財の盗難多発中！（平成22年11月13日～平成23年1月10日）を開催するなど、文化財を保全する当事者として、博物館機能を活かした対応をとった。

・犯人逮捕後の顛末

平成23年4月、犯人逮捕。住所不定で車中泊をしていた男で、日中に下見をし、夜中に犯行に及び、大阪の古物商に持ち込み続けていた。供述では犯行先は80か所以上に及び、文化財に対する知識はなく、手当たり次第の犯行であった。買い取っていた古物商は共犯関係にはなかったが、結果的に犯罪を拡大させた張本。古物商の手元にあった転売前の文化財については所有権放棄させて警察が回収し、捜査の進展の中、元の所蔵者が判明したものは返されたが、被害地域の多くは文化財の写真やデータもなく、最終的に43点が所蔵者不明のまま取り残され、現在和歌山県立博物館で引き取り管理している（所有者不明のまま寄託、という対応。3点については博物館で所蔵者を見つけ返却）。ほか、オークションカタログに掲載された被害品を発見、買い戻した事例もあり。現在も毎年数件の文化財盗難被害が発生していて、状況が改善しているとはいえない。

・連続文化財盗難事件の教訓

文化財の窃盗は、それが伝来してきた、本来あるべき場所からの篡奪であり、地域や人々の歴史を奪う卑劣な犯罪である。かつ物的な被害だけでなく、喪失感や自責の念など、所蔵者や地域の人々の心にもダメージを負わせる。そうした二重の被害にあわないために必要なことは、とにかく「盗まれないこと」。写真撮影やデータ把握の上、地域の人々が地域の文化財に関心をもち自ら守り、防犯体制の構築ができればよいが、それ自体が難しくなっている地域が増えているのが現状。

2. 文化財の複製を活用した文化財の保全と信仰環境の維持

・文化財の博物館への寄託と文化財レプリカの活用

地域の中で守られ伝えられてきた文化財は、地域とのつながりを失うことなく、そのままの環境で維持・管理されていくことが最善であるが、防犯・防災の観点からやむを得ず他所に移さざるをえない事例があり、博物館はそうした場合の移動先として資料の寄託を受けてきた。ただし仏像等を移すことは信仰環境が大きく変容することであり、心理的なハードルは大きい。

和歌山県立博物館では平成22年度より、県立和歌山工業高等学校と連携し、視覚障害者の学習支援のため、3Dプリンターによるさわれる文化財レプリカを作成（平成26年度内閣府バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰内閣総理大臣表彰受賞）しているが、この文化財レプリカを、防犯環境の整わない寺院や神社に安置し、盗難被害防止につなげる活用を平成24年度から継続して行っている。

・製作の流れ

- ①三次元デジタイザーを用いて資料を様々な角度から非接触でレーザー計測する。
- ②データを統合し、さらにCADソフトを用いて必要に応じて修正を施す。
- ③完成した立体データを3Dプリンターに入力し、ABS樹脂（プラスチック）によって出力。
- ④彩色（これまでは博物館職員（油絵経験者）が担当、今後は和歌山大学と連携）

→資料の取り扱いは学芸員が行い、データ計測やデータ修正などは高校生との共同作業。正規の授業時間に実習として行うので、担当教員と技術面での事前事後の検討や、教育面での目標設定、授業進行の調整など、相談を行いながら実施。

・これまでの複製仏像・神像の安置先

平成24年度	紀の川市	林ヶ峰観音堂	菩薩形坐像（平安時代）
	紀の川市	中津川行者堂	役行者及び前後鬼像（室町時代）
	田辺市	滝尻王子宮十郷神社	滝尻金剛童子立像（平安時代）
	有田川町	某神社	女神坐像（平安時代）
平成25年度	かつらぎ町	三谷薬師堂	女神坐像（平安時代）10軀
平成26年度	紀の川市	円福寺	愛染明王立像（江戸時代）
平成27年度	紀の川市	薬師寺	薬師如来坐像（平安時代）
	海南市	海雲寺	釈迦如来坐像（南北朝時代）
平成28年度	紀の川市	横谷区茶所	仏頭（平安時代）
	高野町	花坂観音堂	阿弥陀如来坐像（平安時代）※製作中

・複製をいかに受け入れてもらうか

仏像・神像の複製を提供し、安置するにあたっては、「信仰の対象が複製でいいのか」という声（あるいは内心の思い）が上がるのが想定された。ただ実際に提供してみると、地域住民から「夜も安心して寝られる」といった感想をいただくなど好意的で、複製を拒絶する声は当事者外（例えば提供を報道やSNSで知った人の感想）からはあるが、当事者からは意外なほど聞こえてこず、「お身代わり」という呼び方で受け入れられているケースが多い。それだけ当事者にとって深刻な問題であったということであるが、それとともに、制作に携わった県立和歌山工業高等学校の生徒が現地を訪れ、地域住民と実際に会って、複製を奉納する取り組みも行っていることも特記したい。高校生が作ったという新たな「物語」（「物語」はさまざまにあり得る）が、「複製」を「お身代わり」として受け入れる上でのハードルを下げる要因となっていると考えられ、高校生への教育効果も高く、効果的である。

※文化財レプリカの作成については拙稿「さわれるレプリカとさわって読む図録—展示のユニバーサルデザイン」（『博物館研究』549、2014年）、文化財盗難の実状と対策については同「仏像が大量に盗まれたのはなぜか—和歌山県仏像盗難事件の教訓—」（『月刊住職』506、2016年）に詳細を述べているので参照されたい。

報告 4

祭礼具から考える無形文化遺産の保持

岡部 達也（宮本卯之助商店）

久保田 最後の発表は宮本卯之助商店の岡部達也さんです。宮本卯之助商店は浅草にある祭礼具、お神輿や獅子頭を中心に作って販売されているところで、太鼓の資料館もあります。震災後に獅子頭をはじめ、いろいろな道具を復元するという作業をされてきました。今日はモノから考える無形文化遺産の防災という観点でお話をいただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

* * *

はじめに

みなさま、こんにちは。東京浅草からまいりました宮本卯之助商店の岡部と申します。私どもの会社ですが、文久元年（1861年）に創業いたしました。元は太鼓から始まり、神輿・山車・獅子、その他祭礼用品を多く取り扱っている業者です。東北の震災から5年たちまして、その間に約50頭の復元と修理を行いました。50頭というのは虎頭と獅子頭です。その他太鼓などを入れると、100点以上の祭礼具を復元、新調させていただきました。

今日のお話では、まず復元製作に当たってどういうことをしたかということをご説明します。その次に、所有している祭礼具の把握について。獅子以外の祭礼具の形や何を所有していたかということが、東北の現場では全く把握できていなかったという実態がありました。ですから、祭礼具に関して採寸、写真を撮るなりしてくださいという説明をさせていただきます。次に、記録としての写真撮影について。これは記憶ではなく、記録として写真撮影してほしい。その撮影の方法についてお話しします。これは後々いろいろな災害、水害・火災・盗難、そういうことに対してまた同じものを作るための写真の撮り方、それに伴った採寸方法をご説明させていただきます。今回は太鼓と獅子頭の2点だけを取りあげました。最後に、お作りしたものの保存方法、どう保存するのかということをご説明させていただきます。

1. 復元製作にあたって

復元製作にあたって、今回は記憶からと写真から、大まかにこの2点から復元いたしました。記憶からの復元というのは、全て記録物が流されてしまった、品物も含めて何もない状態からお

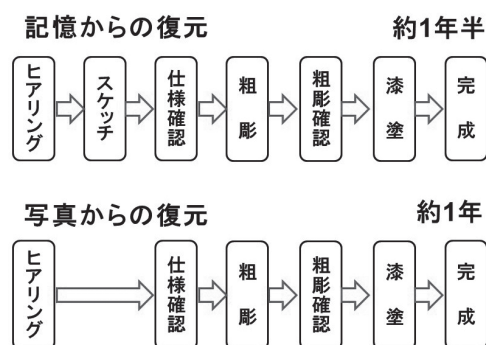


図1 完成までの流れ

獅子を作っていったわけです。どういうふうに作っていったかということ、まず現場に赴き、年配の方々、若い方々からヒアリングをしました。最初に「どのぐらいの大きさですか」「どういう獅子ですか」と聞いたのですが、「大体このぐらい」と、ものすごくアバウトな答えなんです。「このぐらいでこのぐらいかな、高さはこのぐらいかな」と。それもみんな同じならよいのですが、人によって10センチも違う。そういう記憶の曖昧さが感じられました。大きさや形状のスケッチをして、確認してもらいました。当社

は未だアナログなので全部木彫りで、彫刻していきます。大きさや形状を確認し合いながら、大体1年半くらいの長いスパンをかけてひとつのものを作っていました。

写真からの復元も結構大変でした。写真で形や色はわかるのですが、写真というのは平面なんです。人間の顔もそうですが、お獅子も凹凸があります。ほっぺたがどのぐらいか、目のくぼみがどのぐらいか、まゆ毛の厚さはどうか。あとはモミアゲもあるのですが、このモミアゲがどのぐらいの厚さ、長さかという彫りの深さは、写真ではわかりませんでした。ですから、形にしてからようやくみなさんの記憶がよみがえって、それから復元作業に至ったということです。

図1が、記憶からと写真からの完成までの大体の流れです。まずヒアリングから始まり、スケッチをして仕様の確認。その後に、^{あらぼり}粗彫といってお獅子を簡単にかたどったものを確認してもらいます。粗彫を確認して、それが完成しましたら漆塗りを施します。加えて金箔も施して完成に至ります。写真からの復元には、ヒアリングと仕様確認の間のスケッチがありません。スケッチをなくしたとしても、やはり完成まで1年間かかりました。

図2は岩手県釜石市の虎舞で、「これを元に作ってくれ」と言われてこの写真がメールで送られてきました。見えている部分はある程度わかるのですが、見えていない部分、横の部分、後ろの部分がどうなっていたかがさっぱりわかりませんでした。それで現地に行っているいろいろお話して完成したのが、図3です。納品の時、地域の方々にいただいた言葉で一番うれしかったのが、「うちの獅子が帰ってきてくれた」というものです。

図4は宮城県雄勝町のテレボクというちょっと珍しい獅子ですが、この写真と、正面、側面の写真が残っていたのである程度は復元できました。しかし鼻から口にかけての部分、写真ではどこがへこんでいるのか膨らんでいるのかわかりませんでした。宮城の学芸員の方にも聞いたのですが、やはり記憶がない。地元の人たちも記憶がない。さてどうするかということで、2頭作りました。へこんでいるやつと、膨らんでいるやつを2頭作って、どちらでしたかといろいろな人に聞きました。結局は、膨らんでいる獅子でした（図5）。

一番苦労したのが、目です。写真では上を向いているのですが、目の向きによっても、全然表情が変わってしまいます。人形などでもそうですが、目は最後に入れる。最後に入れて魂が入るといわれますが、獅子も全くその通りです。ですから、この目の向き、瞳の描き方によって全く表情が変わってしまいます。そういうところも苦労しました。

これは粗彫した頭です（図6）。粗彫の段階で現場に行き、その場で、ここがどうだった、ああだったという書き込みをペンでしていきました。この形になってやっとみなさん、だんだん記憶がよみが

えってくるのです。そうすると、もうちょっと鼻が大きかったとか——ここが黒く塗ってあった。鼻の穴がもうちょっと大きかったということです。顎の下も、ここのところはくぼんでいたのではないかと、そういう記憶が出てくるのです。このペンで描き入れしものを持って帰って、これを直して持って行って、また直して持って行ってと、最低でも3回はこの作業を繰り返してやっと塗りに回すということになります。これは虎ですが、こういう工程を繰り返してやっと木地が完成したのが図8の写真です。

図8の荒彫では、口の周りに赤い線があります。これは塗りの色分けなんです。これは虎だから黄色に塗ります。虎の口元は白色で塗ります。だから白い線がここだよと、塗り分けをこの辺にしてほしいということを示しています。ただ、この辺と言うのが非常に曖昧で、やはり写真も残っていない状態でしたので、これも記憶から復元するしかなかったのです。あともうひとつ重要な部分が、祭礼でどういう舞い方、持ち方をするかということです。同じ獅子でも、この虎は全く舞い方も持ち方も違います。虎の場合は笹食^{ささば}みといって、私も勉強不足で知らなかったのですが、笹を束ねたもの根元から上までぐっと噛むような仕草があります。基本的に頭の材質はキリですが、強化しなくてはいけないということで、歯のインプラントのように、歯と牙の部分だけ硬いヒノキ材を使っています。歯の部分はすごい負荷が掛かる部分なので、強度を増して壊れないように作りあげたという、これもひとつの例です。

図10は獅子頭です。写真から形にして粗彫の確認を繰り返し行いました。木彫りの、塗る前の状態で持っていった時に、すごくニコニコされて、我慢できなかったのかこの状態で舞っていました(図11)。太鼓もないのに、木彫の頭だけで舞っていました。本当にそれだけ嬉しかったのだなと思いました。これは大体みなさん同じで、この状態で持って行ったらみなさん写真を撮ってすごく喜ばれていました。

図7は、図6の獅子が完成した写真です。これはまだ目が入っていません。目は金箔ではなく金具が付いていたということで、真鍮の金具をはめ込んで作りました。特徴としては、やはりこの牙です。この獅子は江戸前に近いのですが、江戸前とはちょっと違います。この鼻から唇にかけての高さというのも独特なものがありました。

図9は先ほどの図8の虎です。この白い部分は、1回塗ったら「もっと白かった」と言われて白の部分塗り足しました。この鼻の色も、茶色や黒などいろいろあるのですが、やはりこの状態で持っていても「やっぱり違った」と言われるんです。私どもが求めているのは復元ですので、持って帰って再度塗り直しました。復元した半数で繰り返し作業を行いました。

図12が雄勝町の5地区の獅子です。これはみなさんご存知だと思うのですが、神社で使う調度品、これもお祭りに欠かせないものになります。水玉と呼ばれるお皿や徳利があります。これも、どういうものがあってどのぐらいの大きさだったかということは、みなさん記憶が曖昧です。

2. 所有している祭礼具の把握

今回、こういうお話をさせていただくにあたって、所有している祭礼具の把握をしていただければと思っています。それは、ざっと見てこのくらいかと思います(図13・14)。太鼓、獅子や鹿、虎、神楽面。剣舞では被り物があります。その他、篠笛・鉦・衣装。よく見落としがあるのが、バチ。さらさらというのは、東北にもあると思うのですが、竹でできた「すりざさら」など地区によって呼び方



図2 残されていた
虎頭の写真(釜石市)



図3 完成した虎頭



図4 残されていたテレボ
クの写真(石巻市雄勝町)



図5 完成したテレボク

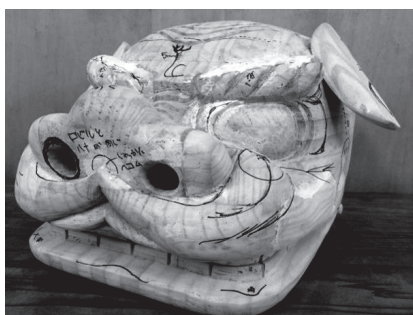


図6 荒彫した獅子頭



図7 完成した獅子頭



図8 荒彫した虎頭

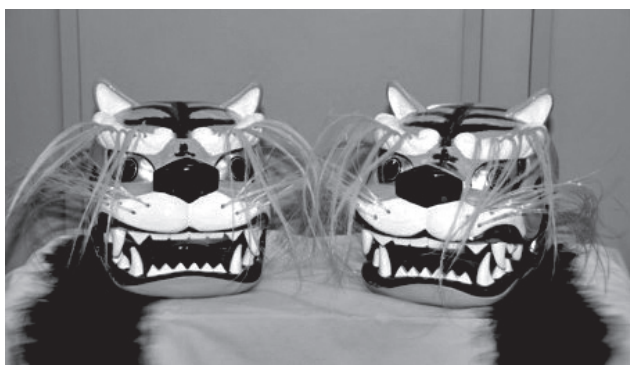


図9 完成した虎頭

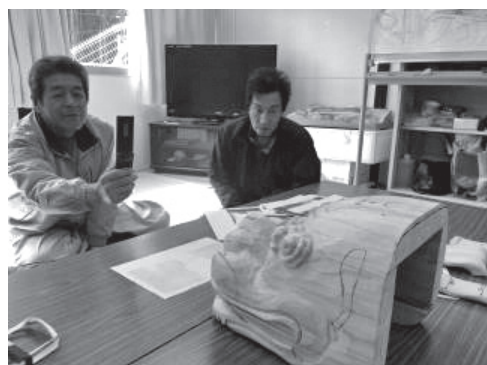


図10 獅子頭を見ての打ち合わせ



図11 完成前の獅子頭を手取る地元の方



図12 石巻市雄勝町の5地区の獅子頭

が全然違います。あとは刀。大きいものでは山車、お神輿、提灯、幕・のぼりなどです。

半纏はお祭りの雰囲気など全体を撮った写真に大抵写っていて、これはわかるのですが、一番苦労するのは衣装です。衣装は物によって仕立てが全然違います。隣の地区、そのまた隣の地区でも仕立てが違います。なぜ違うかというとな舞い方が全然違うので、それに則ったつくり——紐の有無や取付位置などで分かれるので、仕立てについてもしっかりと把握してもらいたいと思います。

太鼓だけでも「種類がこんなにあるの?」と言われますが、これで10分の1くらいです(図15)。太鼓の種類は50以上もあります。雅楽で使うもの、長胴太鼓など能・歌舞伎で使うもの、郷土芸能、組太鼓、そういうのがいっぱいありますので、これもどういう部類に当たるのか、どういうものなのかということ把握していただければと思っています。

今回、製作するに当たって大変だったのが獅子頭です。何も残されていなかったのがヒアリングとデッサンをしました(図16)。先ほど説明しましたが、一番肝心の重さというのが分かりませんでした。重さというのは、材質によって全然違いますし、仕様がありまして毛や麻がくっついていたり、そういう装飾品によっても重さがだいぶ変わってきます。あとは木地の厚みです。その人の持った感じ、重かった、軽かったとかそういうことがあるので、今後のことも考えると、重さもしっかりと量る必要があります。

太鼓は、これは正直言って復元できません。形は復元できても音は復元できません。なぜかという新しい牛の皮、馬の皮は張りがありますから、音が甲高くなります。あのドンドンという低い音が出るには、使い続けて10～20年かかります。ですから、復元は非常に難しいです。形はカタログで確認していただいていたいました。これもやはり寸法と材質が大切です。材質で一番よいのはケヤキで

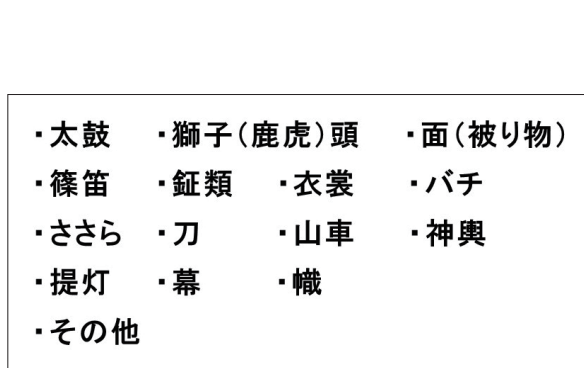


図13 所有している祭礼具の把握



図14 所有している祭礼具の把握



図15 様々な太鼓

	製 作 方 法	要確認
獅子頭	ヒアリング、デッサン	形状・重さ
太 鼓	カタログ写真で確認	寸法・材質
神楽面	ヒアリング デッサン ビデオ等	材質・塗装
衣 裳	生地サンプルを確認	仕立て
篠 笛	調子⇒音源 指穴⇒現物で確認	調子

図16 復元にあたってのポイント

す。あとは目有^{めあり}といって栓や柄を使ったりします。中には栗の木を使っているところもありました。

神楽面、これは非常に曖昧で、何もない場合はヒアリングしてデッサンしました。あとはひとつ、宮城県名取市ですが、ビデオテープからの復元となりました。今はDVDになってしまってビデオテープをかける機械がなく、流したビデオテープから写真を撮って復元したという経緯がありました。

あとは塗装です。結構ペンキで塗ってしまったり、てかてかした塗装もあったので、これも光っているか光っていないか。肝心なのは雨の日の使用です。神楽面というのは顔料で塗られます。顔料は色のついた粉末です。しかし、雨の日に使用すると水に塗れ顔料がはがれてしまうのです。また染みになってしまいます。ですから、雨でも使用する場合は顔料ではなくカシューや漆で塗装をしました。

先ほど言った衣装、これは生地サンプルを確認した上で仕立てをどうするかを考えます。同じものは作れなかったのですが、舞いやすいような、着やすいようなスタイルで新たに作らせていただいています。

篠笛も、何本調子かという調子があります。篠笛はチューニングができません。ですので、その調子によって音が変わってきます。これも音源をお借りして、その音源に合う調子を選んでお渡ししていました。指穴^{しげつ}も、7個のもの、6個のものがありますので、現物で確認して見てもらって、お納めしている状態です。ただ、場所によってはどちらとも当てはまらないものもありました。釜石市では穴が4つしかない非常に珍しい笛がありました。それをどうしたかという、7つの穴のうち3つをテープでふさいで、お納めしています。

3. 記録としての写真撮影

これが残されていた写真の例ですが、この様な写真しか残っていなかったのです(図17)。これはもう当然だと思うのですが、お祭りの記録としての写真です。モノとして私どもが撮っている写真は、これは本当にごく一部ですが、頭の上から横から、そしてさまざまな角度をアップしています(図18～20)。獅子頭1頭で約120枚撮ります。あとは外面の形は大体わかるのですが、一番大切な部分が内側です。この内側はあまり撮る人はいないと思うのです。この内側は非常に大事で、これは何かというと後で採寸の時に説明しますが、持ち手がここにありますがね。中に手で持つところがあるのですが、この持ち手も場所によって全然違います。あとは、ここに耳の棒が付いている、付いていないというのがあります。この場合は紐で全部留まっていた。そういう仕様も含めて、裏からの写真というのは非常に大事になります。

さらに頭を組み立てるにあたって、反物を取り付ける時も、図18の場合は穴がすごく大雑把にあいています。本当はこの3倍くらい、穴があいた方がしっかり留まります。これは先ほどの耳の部分です。これは舌です。舌がどう取りつけてあったか。これはわざとカタカタ音がするようにしています。口を開けた時にカタカタカタッとして子どもたちを怖がらせるというものもあります。この舌も、もししっかりつけてしまうとその風習がなくなってしまうので、全部再現しています。

また、獅子でもいろいろあります。図19は三匹獅子(三頭舞)です。それも、先ほどと同じように細かい部分を撮っていきます。反物を取りつける場所も大切です。これは頭に被るカゴがついています。カゴの中に藁が入っていたり、スポンジが入っているところもあります。これは地区や保存会によってまちまちです。図19の左下の2枚の写真は羽根です。鳥の羽根が頭についています。取り付け方もさまざまです。お客さまと打ち合わせをした上で新しく作ったり、修理をしたりしています。

■ 記録としての写真撮影



図 17 お祭りの記録としての写真

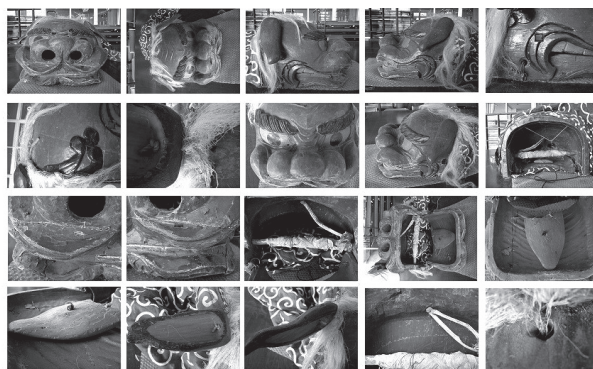


図 18 獅子頭の記録

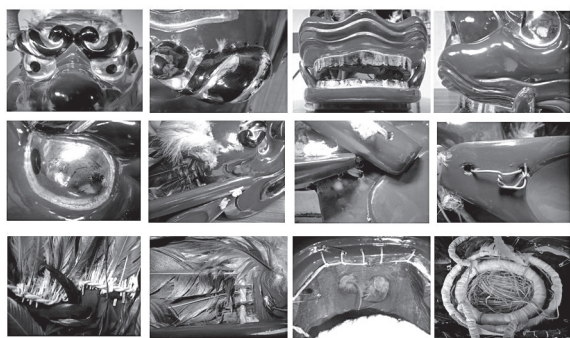


図 19 獅子頭の記録



図 20 獅子頭の記録

獅子に戻りますが、図 20 が反物の取り付け方です。これには「みの毛」といってヤクの毛が付いております。このように仕様の違いがあります。結構、写真を撮らないのは反物の全体の写真です。どういう反物をどういう生地で作っているのか、どういう柄なのかという全体を把握できるように、全体写真も撮っていただけたらと思っています。

次に図 21 が神楽面です。神楽面は正面と側面と裏は多分撮られていると思いますが、なかなかいいのがこの 2 枚、上からと真下から。あとは顎の部分の繋ぎで、これがどういう仕様になっているかも、できれば写真を細かく撮っておいてもらえればと思います。神楽面で一番大事なのが目です。この目の穴のあけ方、角度によって、同じ場所でも見え方が変わります。これもしっかりと記録して、再現できればと思っています。

最後にその他の調度品、祭礼具ですが、矛や弓、神楽鈴、腰紐、太鼓などがあります（図 22）。太鼓も胴を撮っていただきたいと思っています。これはケヤキではなく^{せん}栓という材質です。そういうことが後々分かりますので、そこまでしっかり撮っていただければと思います。

4. 採寸方法（太鼓・獅子頭）

採寸方法です。太鼓の採寸方法ですが、問い合わせの際、胴の高さを測ってくる方が多いです。締太鼓に関しては皮の直径を測って「これと同じもの」と相談を受けることが多いのですが、これは両方とも間違っています。基本的には図 23 のようになります。太鼓に関しては打面の直径です。締太鼓はへりの高さによって厚みが変わってきます。それで何丁掛という種類が 5 つあります。ここが何ミリかで何丁掛かが決まりますので、このへりの幅を測ってください。あと大事なのは紐の長さやボ

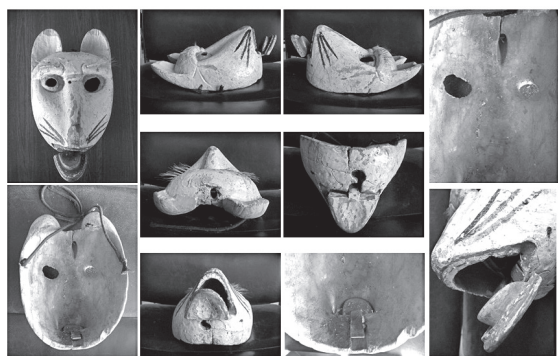


図 21 神楽面の記録

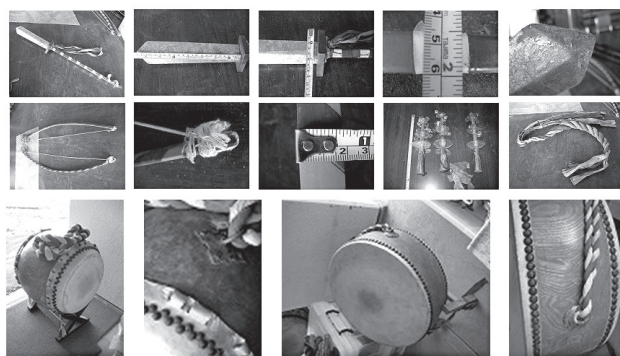


図 22 その他の調度品の記録

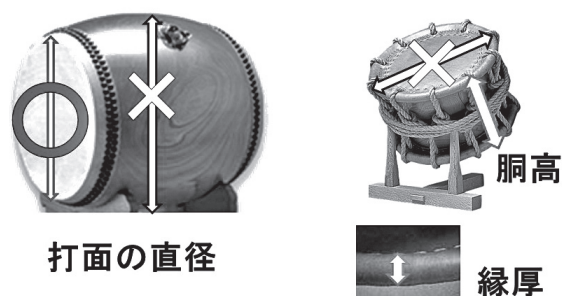


図 22 その他の調度品の記録



図 23 太鼓の採寸

ルトなども関係がありますので、胴の高さも一緒に計測していただければと思います。

獅子頭に関しては図 23 の右側が基本の大きさになりますので、ここで測ります。ここは顎寸と言って、顎寸で獅子の基本的なサイズがわかります。先ほど後ろからの写真が必要だといったのもこういうことです。ですから、必ずここを測るようにしていただきたいです。獅子に関しては、できれば上から、横から、下からの写真と、寸法をある程度とっていただければ、後々何か災害があった時にまた同じものが作れます(図 24・25)。お預かりした獅子は全てこういうふうに採寸しています。写真での記録も行っています。獅子の眉やモミアゲ部分の仕様も細かく採寸して記録するのがよいです(図 26)。獅子によっては口が 5 センチだったり 10 センチだったり、全開だったりしますので、開口部分がどのぐらいかという記録もしていただければと思います。他に、耳の仕様、顎の仕様、あとは歯です(図 27)。歯がギザギザなのか真っ直ぐなのか。舌も大きさを採寸します。先ほど言った目の仕様ですが、一重でも周りにもう 1 周ぐるっと回っているところもあります。

太鼓についてはこれだけ測ってほしいところがあります(図 28～30)。このうち図 30 は、少し大まかなのですが桶胴太鼓で、担ぎ桶の類です。郷土芸能太鼓は三匹獅子の中の小さい太鼓も含めたものです。大拍子はお神楽子等で使います。ここに「中縫」と書いてあります。桶胴といってもいろいろなサイズがありますが、胴の直径がわからないと革は作れません。内側に胴を入れるわけなのですが、胴が大きいと皮に入らなかったり小さ過ぎると逆に音が出なかったりしますので、この中縫寸法というのが非常に大事になります。

次は獅子頭。獅子頭も大まかには図 31 に示した ABCD を採っておけば大体わかります。寸法と重量、材質、形状、雄雌。雄が宇津、雌が権九郎といいます。雌のほうが雄っぽいのですが、これが総称です。ただ、これは総称ですので、雌の形をしていても「雄」と言うのでしたら雄になります。次に耳の形状、目の形状です(図 32)。開眼というのは瞳のことになります。鼻、持ち手。この持ち手は、

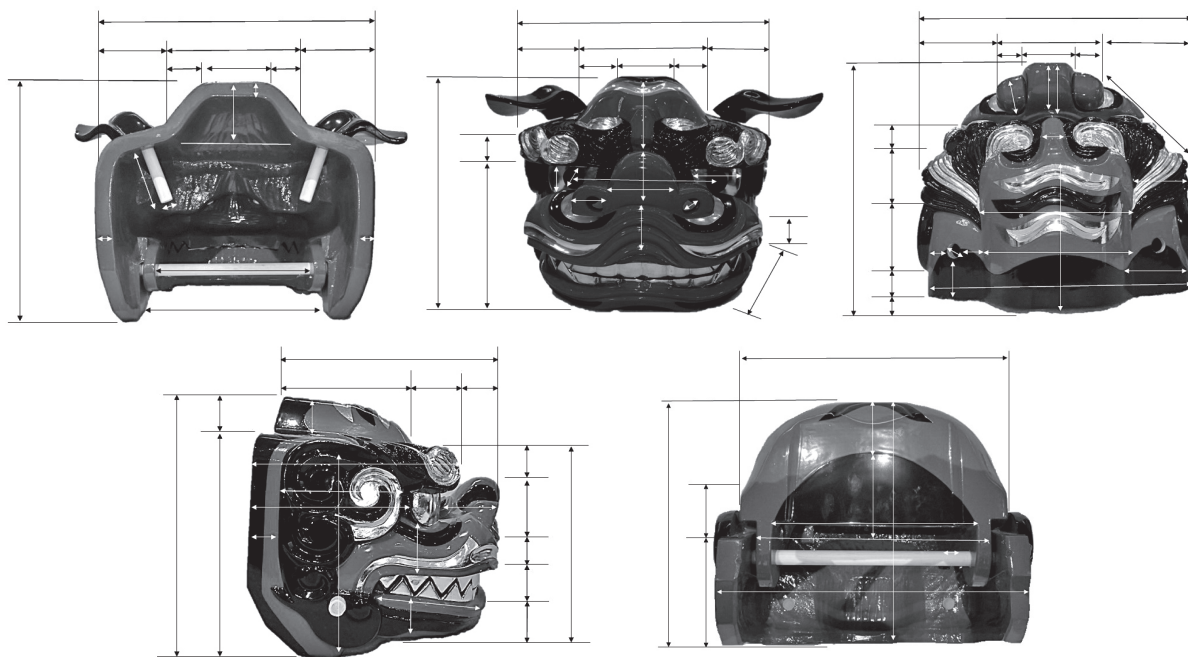


図 24・25 獅子頭の採寸

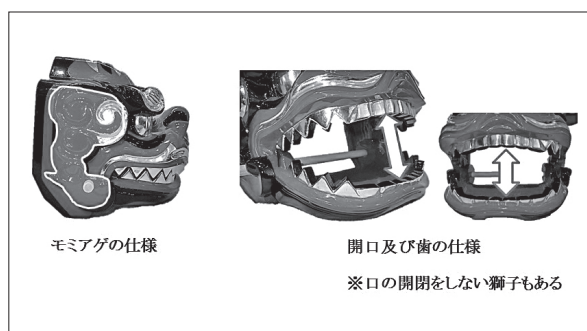


図 26 眉やもみあげの仕様



図 27 獅子頭のその他の仕様

先ほど上にあったり、奥にあたりした部分です。くわえというのは口でくわえる部分。下のほうに棒が1本あるのですが、それをくわえています。顎の開口や舌の形状(図33)。塗装也非常に大事です。あとは尾っぽに毛がついている獅子もあります。顎下の紐というのは、顎をパンパンとやりますね。その時に支える紐です。中に手を入れてパンパンやるところが東北では結構多かったので、これも入れています。

最後は反物です(図34)。反物を広げるとこんな形になります。これは全部ではなくて横から見た部分。全体を広げるとこういう形になっています。しっぽがついているか、ついていないかは別として、これも生地、染め、染め色、柄。寸法は上辺と下辺、あとは下がりです。こういうものを書いていただくと、ある程度お作りできます。

5. 保存方法(手入れの仕方)

最後に手入れ方法です(図35)。これも基本的な部分ですが、使用後は必ず、ほこりを払ってから乾拭きしてください。これは獅子、太鼓だけではなく、お神輿や山車もそうです。ほこりを払う前に乾拭きしてしまうと、ほこりが研磨してしまい、細かい傷がつきます。これが何年もたつとだんだん色がくすんでくる原因にもなりますので、必ず先にほこりを払ってください。

金箔の部分は、ほこりを払うだけで拭かないでください。金箔は塗ってあるのではなく押し当ててありますので、濡れたものや手でさっとこすると金箔が全部はがれてしまいます。ですから、金箔の部分はほこりを払うだけにしてください。

次に太鼓の皮の部分ですが、皮には何も塗らないでください。よく卵の黄身やつばき油を塗って音を下げようとするのですが、これは逆効果になります。また、祭礼時にお酒を吹き掛けしないでください。太鼓の皮の部分に関しては何もしないというのが原則です。

獅子の反物や衣装は極力洗わないでください。夏場のお祭りだと臭いが気になりますが、できる限り陰干しだけしてください。繊維の破損や、着崩れが起こりやすいので、なるべく洗濯しないで陰干しをお勧めします。ドライクリーニングでも大丈夫なのですが、できれば陰干しして臭いを飛ばしてもらるのが一番よいです。あとは全体的に濡れた場合は速やかに乾拭きしてください。

「6. 塗装がはげた場合はむやみに塗らない」と書いてあります。補修の際ペンキなどで塗ってしまう場合があるのですが、修理する時に非常に大変です。この塗装をはがさないといけないのですが、べったり塗ってしまった場合は塗装の剥離ができない場合があります。そういう場合はもう修理不可能になってしまいます。ですから塗装がはげた場合、破損した場合は相談ください。写真でも結構ですので、すぐに相談いただければそれに対してのご返答、アドバイスをいたします。

次に、保管方法です(図36)。これはもう「風通しの良い場所への保管」、これが一番よいです。太陽光などには当てないでください。7番目にありますが、「日光や空調が直接当たらない場所での保管」というのが一番よいです。古くてピューピュー風が吹く蔵が、一番よいです。虫やネズミは別として、そういう空気がたまらないところというのが、道具の保管環境としては最高です。ビニールをかぶせているところが多いのですが、ビニールは風通しが悪いので、湿気がこもりカビが生える恐れがあります。ですからビニールで覆わないでください。

また、太鼓は打面同士をくっつけて重ねると、やはり通気性が悪くなります。太鼓の皮は水分を保持しやすいので、そこにカビが生えてしまう場合があります。

4番「ケースの寸法は余裕を持って」というのは、無理にギュッと押し込める場合があります。そうすると突起物が破損してしまいます。実寸法から約5センチ、指が入るくらいの余裕を持った大きさのケースを作って、収納するのがよいと思います。

これはぜひともお願いしたいのですが、最低半年に一度は蔵を開けて全部確認するという作業、これは大変だと思いますがやっていただければよいと思います。状況も確認できますので、そういう点検を行ってください。

6番目、「衣装等への過剰な防虫剤は無意味」。衣装などを入れる箱に防虫剤を20～30個ぐらいバサッと入れてしまう。それは無意味です。なぜかというと、防虫剤の成分は空気より重いです。ですから、箱の蓋に2～3個貼りつけるだけで空気の流れて循環していきます。防虫剤を着物や衣裳などの間に直接入れると、成分により生地が変色してしまう可能性があります。ですから、できれば蓋に貼って、それを小まめに取り換えることをお勧めします。また、湿気取り剤はすごく強い薬を使っています。それが地震などで転がって、中の液体が太鼓に掛かってしまう事例がありました。液体が掛かってしまうと革が溶けてしまいます。それだけ強い薬を使っていますので、湿気剤、防虫剤はそんなに数は要らないです。

最後に7番目「日光や空調が当たらない場所への保管」、これが一番大事になります。


長胴太鼓	部 位	仕 様
	打面寸法	尺 寸(cm)
	胴材質	樺・栓(他)
	胴形状	割貫 / ふくら あり・なし
	皮	牛・馬(他)
	皮処理	切エン仕上げ・エン付仕上げ
	紙	千鳥・一重・ベタ(他)
	鉄	平鉄・鋳物製・真鍮製
	音の高低	低い・高い・すごく高い
	台の形状	

図 28 長胴太鼓の採寸


締太鼓	部 位	仕 様
	皮種類	並・二・三・四・五
	皮材質	牛・馬(他)
	胴材質	樺・栓(他)
	胴直径	尺 寸(cm)
	胴高さ	尺 寸(cm)
	組上げ	紐締・ボルト締
	紐仕様	材質() 色()
	台の形状	

図 29 締太鼓の採寸

	部 位	仕 様
	皮直径	尺 寸(cm)
	皮材質	牛・馬(他)
	桶胴材質	樺・栓(他)
	中縫寸法	尺 寸(cm)
	桶胴直径	尺 寸(cm)
	桶胴高さ	尺 寸(cm)
	組上げ	紐締・ボルト締
	紐仕様	材質() 色()
	台の形状	

図 30 桶締太鼓等の採寸

部 位	仕 様
頭寸法	後頭部幅 尺 寸(cm) 側面寸法 A: 尺 寸(cm) B: 尺 寸(cm) C: 尺 寸(cm)
重 量	g
材 質	桐・栓 補強箇所:
頭形状	宇津(オス)・権九郎(メス) その他:
歯	正面:平 側面:山 / 正面側面:山
牙	あり・なし
眉	渦彫・筋彫 塗色: 金箔:
もみあげ	渦彫・筋彫・なし 塗色: 金箔:

図 31 獅子頭の採寸

部 位	仕 様
耳形状	笹型・平型 塗色 表: 裏:
耳取付	棒・紐 可動式・固定
目形状	金箔・真鍮金具
開 眼	一重・二重・ボタン(他)
鼻形状	塗: 本体同様・別色() 鼻穴: 丸・横円・滴 鼻穴色:
持ち手	縦・横・上字・なし 角棒・丸棒・横円 取付方法: 取付位置:
くわえ	丸棒・角棒 固定 棒端: 丸角・角角
顎開口	全開・開口なし・歯先より cm

図 32 獅子頭の採寸

部 位	仕 様
舌形状	図 塗: 本体同様・別色() 取付: 可動・固定(紐・接着)
塗 装	本漆塗・カシュー塗・金箔 他() 本 体: 黒・朱・うるみ・他() 眉 毛: 黒・朱・うるみ・他() 眉毛筋: 黒・朱・金箔・他() もみあげ: 黒・朱・金箔・他() 耳表: 黒・朱・金箔 耳裏: 黒・朱・金箔
毛取付	種類: 馬・シヤグマ・麻 他() 色: 白・黒・茶 他() 枚数: 枚 取付: 植付・反物縫付 前方: あり・なし
尾 毛	形状: 馬尻尾・反物・麻 色: 黒・朱・金箔 長さ: cm 幅: cm 尾毛紐: あり・なし
顎下紐	あり・なし 材質: 色:

図 33 獅子頭の採寸

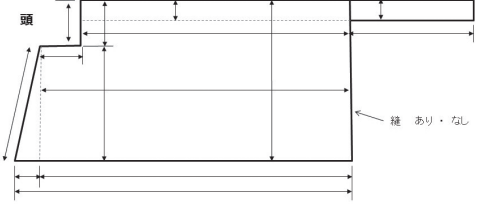
	
生地	綿・麻(他)
染	本染・反染・プリント・刺繍
染色	
柄	
寸法	上辺 cm 下辺 cm
下り	cm
尻尾	共布・馬毛・麻(他)
長さ	cm 幅 cm

図 34 反物の採寸

- 1、使用後には必ず埃を払ってから乾拭き
- 2、金箔の部分は埃を払うだけで拭かない
- 3、太鼓の皮部分には何も塗らない、かけない
- 4、反物や衣装は洗濯しないで陰干し
- 5、濡れた場合には速やかに乾拭きをする
- 6、塗装が剥げた場合は むやみに塗らない⇒要相談
- 7、破損した場合もむやみに修理しない⇒要相談

図 35 手入れの方法

- 1、風通しの良い場所への保管
- 2、ビニールで覆わない・・・通気性がなく湿気てしまう
- 3、太鼓の打面どうしを積み重ねない・・・音に影響
- 4、ケースの寸法は余裕をもって・・・破損、くせ毛防止
- 5、最低半年に一度は空気の入替えを・・・点検
- 6、衣装等への過剰な防虫剤は無意味・・・ケース蓋へ
- 7、日光や空調が直接当たらない場所での保管

図 36 保管方法

復元製作にあたって
所有している祭礼具の把握
記憶でなく記録としての写真

写真と共に採寸を行いデータの分散
を行うことにより後世まで受継がれる

図 37 獅子頭の採寸

おわりに

最後にまとめです（図 37）。私が今回お伝えしたかったのが、「所有している祭礼具の把握」、これはできれば明日からでもできる限り早めに行っていただければと思います。「記憶ではなく記録としての写真」の撮影、これもできれば行ってください。最後に、「写真とともに採寸を行い、データベースの分散を行うことにより後世まで受け継がれる」という点。データベースの分散というのは、撮った写真をひとりで大事に保管するのではなく、いろいろな人、場所に分散してください。例えばひとつが破損しても分散した別のものを使用することができる。また、その地区だけではなく、もっと遠いところに預け置いておくのもベストかもしれません。

以上がご説明です。ありがとうございます。

質疑応答

質問者 江戸の獅子頭は家康が江戸を開いてからのものが多いと思いますが、それ以前からの獅子頭はありますか？

岡部 獅子頭に関しては古いものというのはなかなか残っていません。ですから、私も記憶としてはそこが一番古いのかなと思います。ただ、三匹獅子に関してはもっと古いものも残されていますが、その辺りは私も把握はできておりません。

報告5

問題提起

久保田 裕道（東京文化財研究所無形文化遺産部）

例年ですとこれでいつもは休憩時間に入るのですが、今回かなり大きなテーマで、いろいろな方向からの話がありましたので、ここでもう一度整理をする意味で、私のほうからまとめと言いましょいか、もう一度根本に帰った話をさせていただいて、それから休憩時間にしたいと思います。まだ自己紹介をしていませんでしたが、無形文化遺産部の久保田です。どうぞよろしくお願いいたします。

これは私どものやってきた経緯のお話なのですが、東日本大震災の後、何か復興のサポート、活動等ができないかということで、複数の団体——（公社）全日本郷土芸能協会さん、（一社）儀礼文化学会さん、そして技術的な部分に関しましては（国研）防災科学技術研究所さんとともにつくった「無形文化遺産情報ネットワーク」という組織があります。組織というほどではないのですが、そこで被災した無形文化遺産の情報を集め、発信していこうということをしていました（図1）。

例えば、このようなホームページ（図2）を作って——これはトップページなのですが、ここから中に入っていきますと、どこにどのような民俗芸能・祭礼行事があって、どういった被災をしたのか、マッピングとリストでもって状況を表していくということをしてきました（図3）。

だんだんと年を追うごとに状況が複雑化していった、また復興したのだけれども続けられないとか、いろいろな状況が出てきましたので、2014年度末をもってこちらは止めまして、今後に向けて、これをもっと応用して、それこそ防災の観点も含めた全国的なものを作れないかということで、また新たな事業を始めたわけです。

その基本となったのがこちら、ちょっと長ったらしい名前なのですが「地方指定等文化財情報に関する収集・整理・共有化事業」という事業名になっています（図4）。地方指定というのは基本的には都道府県指定、市町村指定といった文化財ですが、「地方指定等」と、「等」をつけたのは、その文化財に含まれない未指定のものも無形文化遺産分野には膨大にあるからです。そういった情報を集めて整理する、そして共有化というのは誰もがわかるようなかたちで発信していくことも含めて始めた事業です。

つまりまず、どこに何があるかという基礎的な文化財情報リストというものを確立したいというのが、第一の趣旨です。もうひとつは、情報を共有する作業を通じて、関係者間のネットワークの形成をしたい。東日本大震災の時になかなか情報が集まらなかったというのは、そのようなネットワークがなかったということですので、そういうネットワーク形成を目指したいということです。とりあえず今年度、各都道府県の文化財担当の方に東文研に来ていただいて、そういった目的をお伝えして、

もちろん都道府県によってご都合はいろいろおありだと思いますので、できるところから順に情報を集めていくということをはじめたところです。未指定の調査までとなるとかなり大変な作業になりますので、これはすぐにはできないと思いますが、そういう対象にまで広げた情報収集を順次行いたいと思っています。

それをどういうふうに発信していくかというところですが、これはいま、試験的に作って情報を入れ、そのうち部分的な公開ができるかと思うのですが、先ほどの「無形文化遺産情報ネットワーク」を発展させたかたちで、その「全国版」のようなものを目指してつくっているところです（図5）。いまスクリーンにお見せしているのは、とりあえず東北の被災3県の部分です。こういったかたちで、例えば各民俗芸能について個々の説明のページもこのようにあります。ゆくゆくは、ここに伝承者の方もアクセスして、例えば「来月はこういうイベントをやります」といった告知もできるような、ホームページを持っていない団体でもホームページの代わりに使っていただけるような情報発信の場できないか、ということを考えています。それから下のほうに「アーカイブス」とありますが、やはり先ほどもありましたように、写真などの情報を分散して持っていることが重要になってきます。写真、動画、そういったものをここに収納して見られるようなかたちも考えています。もちろん、個人情報やセキュリティの問題もありますので、これからクリアしなくてはいけない部分もあるのですが、そういうアーカイブスの役割も果たせるようなシステムを考えています。

集める情報に関しては、これもとりあえずのものですが、図6にあるような細かなデータを集め、その中には防災に役立つ情報というのもぜひ入れていきたいと考えています。例えば道具の保管場所がどこにあるか、そこは津波がくる場所なのか、山が崩れた時に影響を受けない場所なのか、ゆくゆくは、そういったこともチェックできるようなものになればよいと思うので、そうした防災に関した項目についてもこれから考えなくてはいけないと思います。

そんな取り組みを知っていただいた上でこれから協議に入っていきますが、いままで様々なお話がありました。それを簡単にまとめてご提示したいと思います。最初に「無形文化遺産の防災」（図7）。これは非常にわかりづらい概念です。有形のものであれば科学技術で保存や修理に対処できる、あるいは高台に移す、そういったことができますが、基本的に無形文化遺産というのは人が担うものですので、その人が助かればよいということで、それが故にこれまでも無形文化遺産の防災というのは考えてこれなかったという経緯があります。でもそれは確かに正論で、無形文化遺産とはいえ有形の道具も使っているので、そういったものを助ける以外には、まず無形の防災はできない。まずは人を助ける、つまりはコミュニティの防災ということにつなげざるを得ないということ、これはもう大前提かと思います。

さらに無形文化遺産の場合、難しいのは範囲がかなり広大でありまして、今までのお話も祭礼・民俗芸能といったものが中心となっていました。例えば工芸技術的なもの、あるいは民俗技術といった分野ももちろん無形文化遺産としてあるわけです。あるいは共同体ではなく、個々の家でやっているような行事——年中行事や人生儀礼、そういったものもあるわけで、それをどこまで入れていくのか。あるいは先ほどお話がありましたように、最近になって、うちの村でもやりたいからといって他所から習ってきてやっているような新しい民俗芸能もあります。さらにわかりやすい事例で言えば、よさこいソーランのようなイベント的なもの、そういったものをどこまで追えばいいのかという、これも大きな問題です。この問題を言い出すと、いつもいろいろな意見が出てきてなかなか立ち行かな

いのですが、そこも考えなくてはならず、かなりいろいろな問題点が出てきてしまう部分ではあります。

そういったものを全部棚上げして、一番簡潔に何をやるべきかということに集約していくと、まずは先ほどから申し上げてきました「所在情報の確認」、どこに何があるのかということをしかり把握できるようなデータを収集するということになります。特に、日本には未指定のものがたくさんあります。そういったものをどういうふうにして集めていくのか、これは早急にやらなくてはいけない課題だと思います。

そしてもう一つが記録作成。まさに先ほど岡部さんのお話にもありましたように単に学術研究だけの記録ではなくて、復元に活用できるような記録というものを作らなくてはいけない。映像に関してもそうです。映像にしてもしっかりと映像記録が必要ですが、どういうふうになればそれを作ることができるのかということは、まだまだ課題です。私どもでも、映像をどういうふうについたらいいのか、それから今の岡部さんのような計測の方法などについても、いずれまとめてテキストのようなものを作れたらいいと考えています。来年度にでもぜひやりたいなと考えているのですが、そういう記録作成をしかりやるということが、最低限まずやらなくてはいけないことだと思います。

では、無形文化遺産の復興とは何かと考えた時に——これは答えというより、むしろ問題提起になる話ですが——対象ごとに適した支援というものがあるわけで、それを見定めないと、一律にこうすればいいですよということは決して言えません。こういう場で話をしますと、大抵こういうふう成功したんだという成功事例の話はたくさん出てくるのですが、これはできなかったんだ、という話もたくさん踏まえていかななくてははいけないはずです。中には、「闇」の部分の話と言いましょうか、人間関係の問題、支援格差の問題、支援によるねたみの問題、宗教による問題もありますし、東日本大震災の例で言えば原発の問題もあります。様々な問題がありますので、やはりそれぞれに適した支援というものを考えていかななくてははいけない。そのためには被災と復興の知見を集めてケーススタディーと言いましょうか、そういうものをできるだけたくさん集めていかななくてははいけないということがあるかと思っています。

有形のレスキューや復興は、基本的にそのモノが直ればとりあえず「よかった、よかった」でいいのですが、無形の場合は違います。例えばモノが——流された獅子頭が復元された、太鼓が戻ってきた、その時はそれで喜ぶわけなのですが、ではそれが3～4年後、東日本大震災はもう5～6年目に入っていますが、そういった時に続いているのかどうか、そういう長期の視点です。

熊本地震においても、無形に関してはすぐには情報が出てきませんでした。けれどもその後、田んぼが作れなくて祭りができないとか、いろいろな問題が起きています。これは災害後すぐにわかる被害ではなくて、それが故に行政も見逃してしまいがちです。そういった部分を長期にわたって寄り添っていけるような関係をつくる、その中でそういった問題点を汲みあげていくということをしなければいけないと思います。

長期にわたる寄り添いをするためにはやはりネットワークが必要だということで、その対象は行政や博物館もそうですし、研究者、そして愛好者のような方もたくさんいらっしゃると思います。あるいはマスコミというのも、そういう部分で機能していただいてもいいのかと思いますし、宗教施設、宗教者の方々との連携も必要になると思います。そういった様々な広範囲なネットワークというものを考えていかななくてははいけない。

そしてそういったネットワークを広げるためには、情報をより発信していかなくてはいけない。発信したことによって何よりも伝承者の方にやる気を出していただきたいわけです。モノは復興した、地域は復興したけれども、肝心の伝承者の方がやる気をなくしてしまったら、もうその無形文化遺産は伝えられません。

先ほど東さんのお話にもありましたが、決して無形文化遺産のために地域があるわけではありません。やめようという決断を下したのであれば、それはそれで仕方がないことだとは思いますが、けれども、続けていくことによって逆にその地域のコミュニティがより健全な方向に動いていくということも、私たちは信じたいと思います。そのために、伝承者の方のモチベーションアップにつながることを行う、これが無形文化遺産の保護のひとつの大きな柱になるのではないのでしょうか。モノを保存・修理していくのと同じように、「伝承者のモチベーションアップ」を私たちは考えていかなくてはいけないのではないかと、このことをひとつの提案として、あまり具体的なことはそれこそケース・バイ・ケースになってしまいますのでまともには言えないのですが、こういった視点を挙げさせていただきま

す。これはもう言わずもがなというか、ちょっと余計なことかもしれませんが、そういった日本の知見というのは、いま海外でも非常に求められているところかと思えます。先だって参りました韓国でも、あちらで大きな地震があったためか、「日本では無形文化遺産の防災ということも考えていて、われわれも見習わなくてはいけない」ということをおっしゃっていただいたのですが、そういうところは非常に関心が高いところだと思います。この分野に関しては、日本が一番先端だと言ってもいいのではないのでしょうか。図8はネパールで、一昨年の地震で大きな被害を出しながらも、祭りを復興して山車を曳いているところです。そういった発信もできたらよいと思います。以上、まとめにもなりませんが、お話をさせていただきました。

無形文化遺産情報ネットワーク

東日本大震災で被災した地域には、文化財指定を受けていない無形民俗文化財が数多く存在した。震災後、多くの関連団体がこれらの文化やその担い手を支援しようと動き出したが、まず文化財の所在情報を把握することが困難であった。

- (1) どこにどのような文化財があるのか全容を把握すること
- (2) 各文化財がどのように被災しどのような支援を必要としているのか

を知ることを目的として、東京文化財研究所・防災科学技術研究所・全日本郷土芸能協会・儀礼文化学会の協働で「無形文化遺産情報ネットワーク」を立ち上げた。

図1 無形文化遺産情報ネットワーク



図2 無形文化遺産情報ネットワーク (311 復興支援)

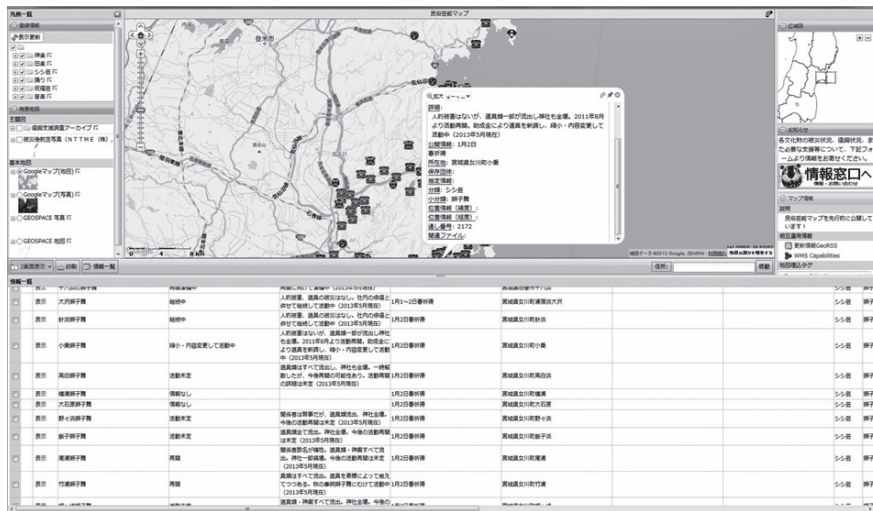


図3 民俗芸能・祭礼のマップ

地方指定等文化財情報に関する収集・整理・共有化事業

地域の文化財情報は、文化財防災や文化財レスキューの基礎的
情報でありながら、これまで十分に集約・共有されてこなかった。
そのため災害発生時にその所在、あるいは存在そのものが不明
でレスキュー活動等にも困難をきたした。そこで以下を目的とする
事業を実施。

- (1) 地方指定等文化財に関する基礎情報の集約・整理を行い、文化財防災の基礎を確立する
- (2) 情報共有により関係者間のネットワーク形成を目指す

図4 地方指定等文化財情報に関する
収集・整理・共有化事業

図5 無形文化遺産情報ネットワーク全国版

図 6 アーカイブス入力データ項目

無形文化遺産の防災

- ★無形文化遺産の防災とはあくまでコミュニティの防災と一部の有形文化財の防災ではない。有形は科学技術で保存が可能だが、無形は不可能。
- ★無形文化遺産の範囲は広大であり、祭礼・芸能と工芸・技術とでは方法論も異なる。
- ・無形文化遺産の防災とは：
 - 所在情報の確認
 - 記録作成
- ・無形文化遺産の復興とは：
 - 対象ごとに適した支援 ～被災と復興の知見の集積
 - 長年に渡るよりそい ～ネットワークづくり
 - 情報発信と伝承者のモチベーションアップ

図 7 無形文化遺産の防災

無形文化遺産の防災

日本の知見 → 海外への発信



図 8 日本の知見の海外への発信
(被災したネパールの様子)



図 9 阿蘇神社の御田植祭（2016年7月）の様子

総合討議

【コメンテーター】

村上 裕道（兵庫県教育委員会）

林 勲男（国立民族学博物館）

【パネリスト】

東 資子 ・ 大本 敬久

大河内 智之・岡部 達也

【コーディネーター】

久保田 裕道

今石 みぎわ

コメント 1

村上 裕道（兵庫県教育委員会）

久保田 それでは、第2部の総合討議に移ります。最初にコメンテーターのおふたりの先生からこれまでの発表に対するコメント、またご自身のご意見等を伺いたいと思います。

おひとり目は、兵庫県教育委員会の村上^{やすみち}裕道さんです。村上さんは文化財防災の第一人者で、阪神・淡路大震災の後から、こういった取り組みを非常に熱心にされてこられた重鎮です。今回は無形のことをやるのでぜひということをお願いをさせていただきました。それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

村上 兵庫県教育委員会の村上です。今日のお話の前段、前提条件を整理するような気持ちで、今日は参っています。私の専門は文化財建造物の保護で、不動産文化財の一番面倒くさいところを扱っています。特に建造物は命に関係するようところが主になりますので、法律関係をきっちりしておかないと何もできなくなります。今日は、その辺を整理したスライドを持って参りましたので、制度を中心にお伝えします。その上で文化財の各分野の特性に合わせてどう考えていけばいいかという組み立てをしていただきたいと思います。

図1は地震防災に関する法律体系です。今日の発表にありましたように東南海・南海地震、東海地震、それらについては特別措置法等で扱われています。特に東海地震につきましては予防的な観測も含めて対応するかたちになっています。濃い青色のところ（一番下）が予測可能な体制になれば、上の水色のほうに上がっていくというイメージで作られていると思っていただければと思います。

次に、災害に対する制度設計について説明します（図2）。一番根幹になるのは防災対策の基本法に基づく計画というものです。それが防災基本計画で、阪神・淡路大震災まではこの基本計画の中に「文化財」という表現がありませんでした。従って、防災という軸で文化財を考えることは難しかったということです。その後、特に建造物系の不動産を扱っているところが動いて、防災基本計画の中に「文化財」という言葉を入れてもらいたいという運動をして、「文化財」という言葉が入りました。防災基本計画の中に表記されているところを見ますと「災害に強い国づくり、まちづくり」「2、災害に強いまちづくり」「(2) 建造物の安全化」というかたちで、命に関係する表現が入っているということです。

それに続いて、2014年3月の中央防災会議で、大規模地震防災・減災対策大綱の中に「文化財」の記載が入りました（図3・4）。東海地震・東南海地震・南海地震等など想定される大規模地震について、それぞれの特別措置法に基づく措置を大綱というかたちでひとつに取りまとめて、どのように予防的な措置等を考えていけばいいかがまとめられています。「文化財」の記載がこのような詳しく入っております。それまでの基本計画の中に入っていた文化財、特に不動産系文化財の安全性ということにとどまらず、文化財そのものの価値を認めるような表現が出てきたというのが大きな変化であると認識しています。それはとりもなおさず、東日本大震災において文化財が持っている意味が皆さんに理解されてきたということであろうと私自身は感じています。歴史的環境というものを日本人が最近敏感に考え始めてきたということの表れであろうと見ています。

また防災計画の流れを詳細に見ていきますと、そうは言ってもまだちぐはぐなところがあります

（図5）。基になる防災基本計画の次に、各省庁が作っている防災業務計画があります。文化財の関係については文化庁が作っていますが、その下には都道府県や市町村が作っている地域防災計画があります。ところが、地域防災計画の各都道府県の記載内容を確認していきまると、防災基本計画・防災業務計画・地域防災計画が1本の軸に流れていないことがわかってきました。その一番大切なところが何かというと、防災業務計画では文化庁が文化財レスキューや文化財等救援委員会のことをきっちり書いているのですが、地域防災計画にはその表記がないのです。つまり、実際の行動に移ろうとした時に地域防災計画にレスキューが表記されていませんで、地震が起きる度に混乱が発生するという意味です。それは阪神・淡路大震災後の大規模災害が起きた時の状況を見ればおわかりであろうと思います。

つまり、防災基本計画では、大綱に示してあるようにかなりまとめてきていますので、われわれは社会の動きを察知して、地方公共団体の計画まできっちりと書き直すようにしないといけないのではないかと感じているところです。

文化遺産の防災対策として分野別に取り組みを見てみると結構している分野もあります（図6）。特に、先ほどから言っている建造物の場合は命に関わるものですから、かなり早い段階から色々と記載のとおり対応してまいりました。そして防災対策の事業の一貫として人材育成まで行ってきました。

一方、動産文化財はどうかというと、阪神・淡路大震災の時に文化財レスキューというかたちで立ちあげました（図7）。その中核になったのがこの東文研でした。しかし現行の防災業務計画を読むと、国の附属機関である東文研が独立行政法人である文化財機構になったのに、当時と表記が変わっていないのです。昔のままであるから、いざ動こうとすると独立行政法人の扱いというものが法的に整備されている状態になっているかという点と必ずしもそうではないところがあります。それらについて最終的にきっちり収めないと、動産文化財関係の文化財レスキューがいろいろなかたちで現場の知見を得て、それを表現しようとしても、例えば、委託業務契約の選定から始めないと予算の確保ができないとか、予算上の制約等々でなかなか難しいことが発生することがあるということです。

次に、建造物の関係では、人材育成を15年ほどしてまいりました（図8・9）。おかげで全国に現在約4,000名の、いざという時に動いてくださる方々を養成してきている状況です。40都道府県くらいまで広がって、それらが稼働する状況になってきたということです。

先般、鳥取県中部地震が起きました（10月21日）。そうすると1週間くらいの間に調査の準備を終え、11月12～13日にボランティアなかたちで集まって調査をして予算書を作る基礎資料を作りあげた、というような状況になってきているということです。

一方、熊本震災の時にかなりみなさんが理解してきたわけですが、広域的な相互支援協定が非常に重要であるということで、関西においては2府7県と鳥取県が入って10府県で広域相互応援に関する基本協定を作っています（図10）。これは関西の場合は「関西広域連合」といって、議会の代表、知事の代表等々が入って、連合長までであるという状態になっています。その中で文化財の全分野について、要綱・指針・マニュアルを策定しろという指示を受けました。現在建造物だけで作っていたのを文化財全分野に広げていこうとしているところです。また、この協定では事前準備として、今日いろいろな話題が挙がっていました目録・地図・被害調査票等々の電子データでの相互保持、そういうところまで明確に記載しています。ただし、今後のことを考えるとお互いにデータを渡し合うよりも、データをクラウドデータの中に入れておけばすぐわかりやすい。それから、われわれはこれまでは結構ピラミッダルな関係でマザーコンピューターを置いてそこにアクセスするという感覚でいたので

すが、いまはみなさんスマホを持っておられますよね。外に出ていてもスマホを持っています。このデバイスはすごく使い勝手が良くて、スマホを介して調査が可能となれば、外に出ていようが何をしようがすぐに飛んで行けるわけです。実際に実験してみましたら、半日ほどで、被災程度の調査報告をスマホでちゃっちゃとやって、それをクラウドデータのボックスの中に入れると全部チェックできるということがわかってきました。考え方はピラミッドからネットワーク的なかたちに変えていったほうがよさそうだという思いも持っています。

ともあれ、第3回国連防災会議の国際専門家会合において、ビルド・バック・ベター（Build Back Better）という方針を作る中で、特に「文化遺産はコミュニティが全ての局面で災害に取り組むことを助ける有用なツールである」ということが謳われていることは再確認しておく必要があろうと思います（図11）。自然災害は、私の経験から、即座に効いてくるものと、じわっと後になって効いてくるもののふたつの種類がありそうだと考えています（図12）。文化財は後者の遅効的な分野であろうと思っています。その被災感の長さということから考えると、後からじわっとボディーブローで効いてくる文化財の被災が、結構長引くということも感じています。有形の文化財は地域の方々、皆が知っているものであり、新築物件が文化財になるには地域の方々皆が知るところとなる長い時間を要する。被災感の長さを短くするには、できるだけ文化財を失うことなく、修理を基本として、歴史の断点を作らないことが重要と見ています。一方、今日の報告でも強調されておりましたが、無形の文化財の特有の性格ですが、リビングヘリテージが持っているソーシャルキャピタル（社会関係資本）の面が再認識され、被災後のコミュニティの結束力を高め、被災感を短くさせる効用があると思っています。この考えを皆に伝えるため図12に表現しました。図中の三角形の面積を小さくして、災害の規模を小さくするイメージとして考えていただければと思っています。

今日の冒頭に有形文化財と無形文化遺産の話が出ましたが、実を言うと国は文化芸術振興基本法で、既に平成13年度に「有形および無形の文化財ならびにその保存技術の保存および活用を図るため」云々、防災対策等「必要な施策を講ずるものとする」とまとめられています（図13）。これは基本法ですから、この精神に則ってわれわれはどうまとめていけばいいかという話を組み立てていけばいいのだらうと思っています。実際、文化遺産の活用ということでいろいろな施策が平成13～14年頃から出てまいりました。今日のお話の中でも文化遺産を生かした観光振興・地域活性化・地域再成事業等々でいろいろなかたちで活用されています。それは全て、こういうことが時代とともにまとめられてきつつある中で予算措置もされたのだと考えればよいのではないかと思います。

最後に、「経験から得た文化財保護の対策」ということで、図14の右上の図のように、復旧対策・復興対策・応急対策というふうに、これがぐるぐる回りながら、つまり災害と災害の間にどういうふうに僕は動いていけばいいのかということを考えながら動いていくというのが基本的なスタンスであろうと思っています。今日は無形の文化財に対して門外漢の私から、その前提条件として文化財全体としてこういうふうにまとまっていけばいいのではないかという思いを込めてコメントをさせていただきました。どうもありがとうございます。

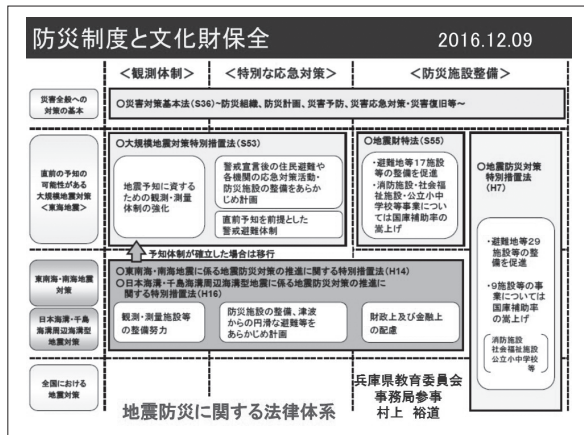


図 1

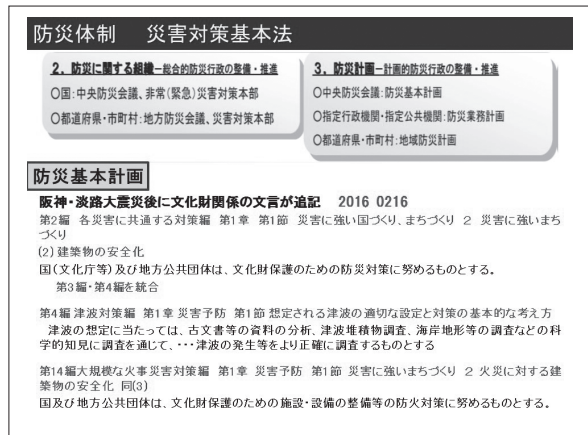


図 2



図 3



図 4

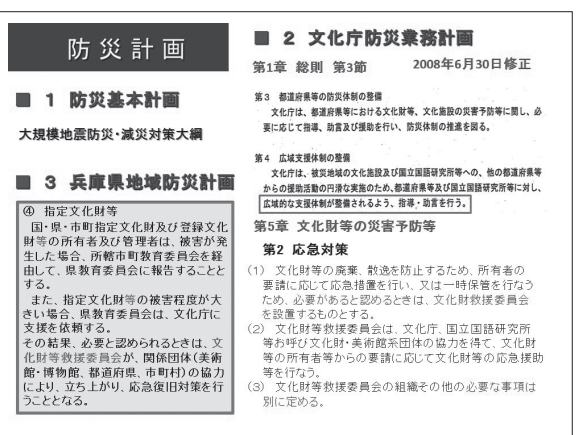
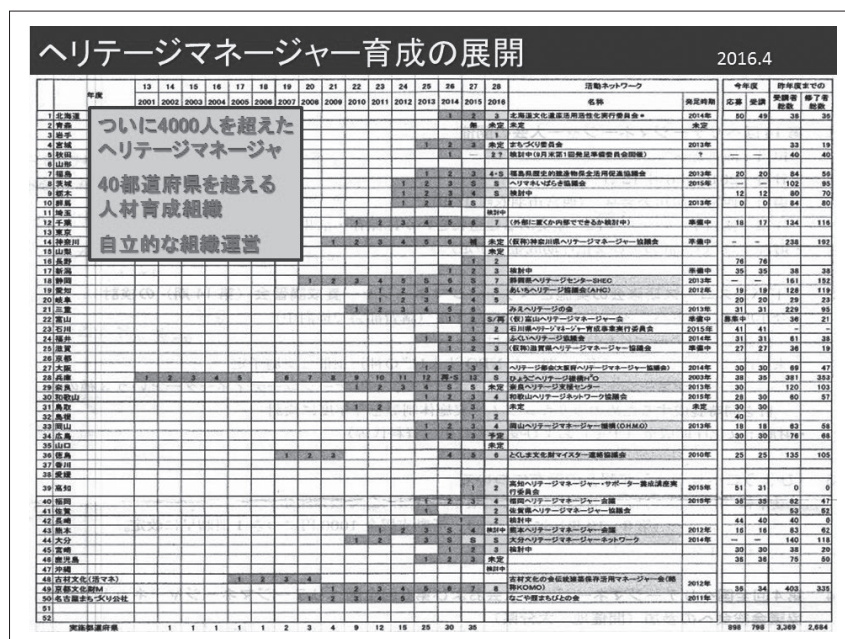
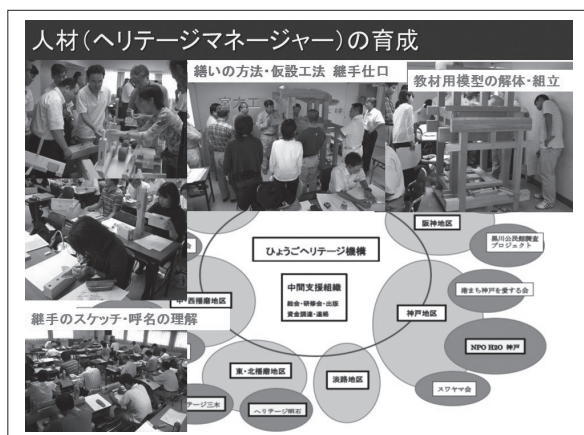
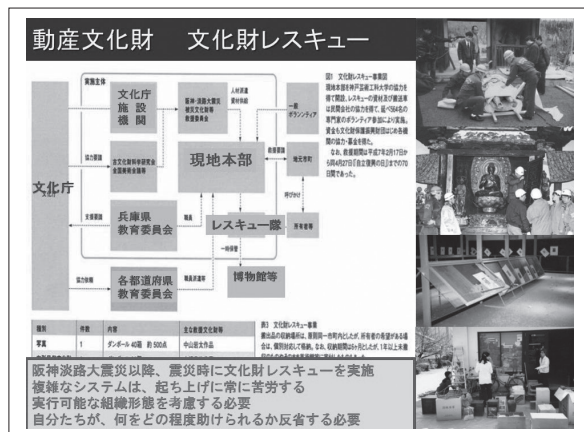
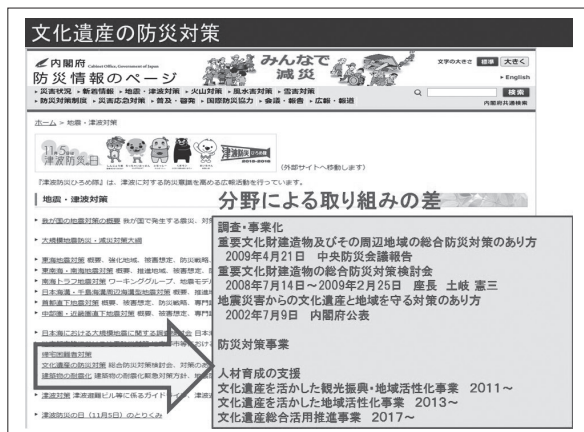


図 5



<p>近畿圏危機発生時の相互応援に関する基本協定 関西広域応援・受援実施要綱</p>	<p>2012年10月25日 2013年3月6日改正</p>
<p>22 文化財の緊急保全</p> <p>近畿圏危機発生時の相互応援に関する基本協定に基づく文化財建造物の被災調査に関する要綱(2013.3.6)</p> <p>→ 現在、全分野についての要綱・指針・マニュアルを策定中</p>	

图 10

第3回国連防災会議の枠組みにおける国際専門家会合

仙台宣言抜粋（2015年3月18日）

兵庫行動枠組2005-2015:災害に強い国・コミュニティの構築が過去10年間に果たした重要な役割を評価、その実施を通じて得た経験の評価とレビュー及び検討を踏まえ、仙台防災枠組2015-2030を採択。

国際専門家会合「文化遺産と災害に強い地域社会」勧告抜粋（2015年3月11日～17日）於：東京及び仙台

文化遺産は、コミュニティの強さやレジリエンスの源となしめるものであるがゆえ、コミュニティの持続可能な発展の局面（例えば、計画、減災、災害時対応、復旧）で災害に取組むことを助ける有用なツールとなっている。

文化遺産は、単なる災害時の救済対象なのではなく、災害復旧や、さらに重要はとして、地域の持続的な発展のための、効果的なツールになる。

上記のことを考慮し、文化遺産及び災害リスク管理にかかわる関係機関は、ガバナンスのあらゆるレベルで結びつきを強めると共に、伝統的な知識、土地固有の知識、地域的な知識への理解を取り入れなければならない。

優先事項4: 効果的な応急対応のための災害予防の強化と、復旧・再建・復興におけるビルドバックベター（Build Back Better）

文化遺産が災害後の経済復旧に対して触媒効果をもつ重要なツールとなることをいいたい誰が、認識しなければならないのか？

图 11

自然災害に対する文化財の減災対策

被災度

自然災害

文化財を失った地域の歴史環境の回復には長時間を要する。
有形文化財だけ？

被災の大きさの減少には、耐震性能の向上
被災感の長さの減少には、修理を基本とした回復

減災

被災感の長さ

時間

盗難も類似現象

減災

災害の大きさ

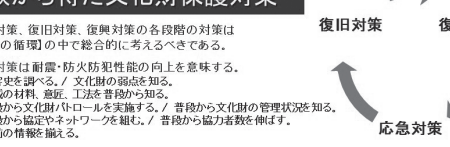
文化財は、三世代が知る、地域のシンボルとなっているもの
→ Sense of Place の素
矢失による回復には、三世代の記憶の経過を経る必要
修理と矢失の間に、大きな隔たりのあることに注意

图 12

伝統文化の保存と活用	
文化芸術振興基本法（平成13年12月7日） 〔文化財等の保存及び活用〕 第十三条 国は、有形無形の文化財並びにその保存技術（以下「文化財等」という。）の保存及び活用を図るため、文化財等に関し、修復、防災対策、公開等への支援その他の必要な施策を講ずるものとする。	
文化遺産の活用	こども教室事業
H13～22 ふるさと文化再興事業	H15～22 伝統文化こども教室
H23～24 文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業	
H25～28 文化遺産を活かした地域活性化事業	H25～ 伝統文化親子教室
H29～ 文化遺産総合活用推進事業	

图 13

経験から得た文化財保護対策



復興対策

復興対策

緊急応急

調査対応

復興対策、復旧対策、緊急応急の各段階の対策は【中程度の備前】の中で総合的に考えるべきである。

復興対策は耐震・防火・防犯性能の向上を意味する。

- ・ 災害史を調べる、/ 文化財の弱点を知る。
- ・ 地域の材料、歴史、工法を昔ながら知る。
- ・ 昔ながら文化財・パトリオを実施する、/ 昔ながら文化財の管理状況を知る。
- ・ 昔ながら協定やネットワークを組む、/ 昔ながら協力者数を探す。
- ・ 事前の情報収集を施す。

緊急対応は発災時の文化財保護策を意味する。

- ・ 調査日程の目標を決める、/ 何を、誰と、どのように調べるかを決める。
- ・ 支援者の宿泊設備を準備しなければならぬ、/ 状況は日々刻々と変わる。
- ・ 調査の優先順位は調査者の立場で変わるのを、前もって決める。
- ・ 調査から予算要求、復旧計画の作成のための情報を決める。
- ・ 復旧費には住民の高齢を予測する、/ 緊急提案をきくことが重要である

復旧対策は単なる修理だけでなく、機能の向上を含む対策を意味する。

- ・ 住民（所有者）の精神状況は不安定である、/ 緊急復旧事業は準備期間が短い。
- ・ 不測の事態が頻りに発生する、/ 文化財の機軸について、現行手法を基本とすべきである。
- ・ 復旧工事を通して、修復技術の向上に資する情報入手に努める。
- ・ 地元の若者の人と復旧計画について協議すべきである、/ 通常以上の資金支援が重要である。
- ・ 視点を収縮させるためにコンパ・評価委員会等を聞くべきである。
- ・ 復旧計画は次の災害のために重要である。

图 14

コメント 2

林 勲男（国立民族学博物館）

久保田 続きましておふたり目のコメンテーター、国立民族学博物館の林勲男さんにお話をいただきます。林さんは文化人類学がご専門で海外の事例もたくさんご存知なのですが、東日本大震災の後には東北地方もたくさん回られていろいろな活動をされてこられました。それではどうぞよろしくお願いいたします。

林 ご紹介いただきました、国立民族学博物館の林です。元々の専門は太平洋地域で伝統的な文化の変化について、文化人類学の視点から研究していたのですが、1998年に、調査地であるパプアニューギニアで大きな地震・津波災害が起きました。その時に防災をやっている研究者の方たちからお声掛けいただきました。いわゆる近代化された、先進国あるいは都市化の進んだ地域の復興については大体モデル化はされているけれども、インフラがほとんど整っていないようなところで大きな災害が起きた時に人々は生活をどう再建していくのかということに対して、なかなかデータもないし、さらにそれをまとめていくような一般化はほとんどされていないので、調査してほしいという依頼がきたわけなのです。

そのプロジェクトが5年ほど続く大きな国際プロジェクトだったということがありまして、それから災害研究、特に復興ということに焦点を当てた災害研究に関わるようになりました。

そうこうしていくつか国内外の被災地の調査をしていく中で、2011年に東日本大震災が起きたわけですね。やはりそれ以前の大規模災害の被災地と大きく違うのは、いわゆる復興の過程における無形文化遺産、具体的には郷土芸能、民俗芸能の果たす役割の大きさです。それは復興の中で果たす役割の大きさというだけではなくて、人々の生活、とりわけ災害の前の状況を振り返る時に、やはり無形文化としての民俗芸能というものを介して災害以前の人のつながりや郷土愛というものが盛んに語られるということを知りまして、それが今まで経験した被災地の復興プロセスと大きく違うなという強い印象を持ちました。

今日のお話は時間も限られておりますのでちょっと早足になるかもしれませんが、芸能や文化とは全く違うところから話をしたいと思います。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、日本でも20年程前から、BCP（Business Continuity Planing／事業継続計画）という、特に大企業を中心にして、災害が起きた際、あるいは災害だけではなくて事故が起きた際に事業をいかに続けていくか、再スタートしていくかという考え方が浸透してきました。これもやはり阪神・淡路大震災が大きかったわけですが、その後アメリカで同時多発テロが起きた後、特にニューヨークの企業が事業の再建という中にこのBCPという考え方を取り入れていったわけです。では、BCPの全てがコミュニティの再建や無形文化遺産の再建に役立てられるかというと、決してそんなことはないわけですが、それでもやはり参考になる部分というのは結構あるのではないかと考えています。とりわけ平常時と緊急時というものを連続的に捉えるということです。

今回の協議会のサブタイトルとして、「リスクマネジメント」という言葉があります。まず「リスクマネジメント」と「危機マネジメント」というものの違いですが、「リスクマネジメント」という場合、リスクはあくまでも潜在的な危険性であるわけですね（図1）。まだ表面化していないもの、それ

が表面化したのが危機的な状況ということになるわけですが、潜在的なリスクの存在とその頻度、影響度を認識して必要な対策を施すことで顕在化を防ぐ、これがいわゆる「防災」と言われていることなのです。そうすることによってリスクの顕在化の可能性を減少させる、あるいはリスク顕在化時の影響を減少させるという対策が取られるわけです。

もうひとつの「危機マネジメント」、これはいわゆる緊急時の対応ということですが、危機（緊急事態・食品衛生・犯罪・テロ・戦争、その他不祥事なども含む）に対して平時に調査研究し、発生時の対応策を準備し、発生時に速やかに効率よく対応し、速やかな復旧を果たす、そのための対策を取るということです（図2）。活動としては、危機マネジメントの方は危機発生時の対応で、リスクマネジメントというのは普段・平時を含めた対応であるということです。目的は、両方とも事業の継続のための障害を乗り越えるということにあるわけです（図3）。ただ、やはりBCPという考え方からすると、危機マネジメントというのはもう少し長い、あるいは先ほどお話に出てきましたけれども、いわゆる循環する災害対応の中に位置づけられます。基本は、平時におけるリスク管理の中で、危機的な状況に際してどう対応するかということを考えておく、そして有事の時にいかに事業を再建していくかを、平時から考えておくということだろうと思います。

それで「リスクの洗い出し」ということが必要なのですが（図4）、このあたりになると今日の4名の方のお話ともだいたい重なりが見えてくるかもしれません。「リスク（すなわち起こり得る危険）を周囲の環境から予測して洗い出す」ということです。過去の経験から、歴史上の事実から、過去の傾向から、他者・他所の事例から、条件を特定してシナリオを組み立ててそれを洗い出すということもできます。現在潜んでいる何か予兆らしきものを察知することも重要です。それから専門家に聞く。時には勘に頼るということもあるのかもしれません。その他にもいくつかあると思います。

洗い出したリスクの影響の大きさと頻度別に分類していくことで、具体的な対策を考えることができると思います（図5）。ここでは1～5までの段階的にその影響の大きさと頻度を並べていますが、このあたりになると文化あるいは無形文化遺産を対象にした時と若干違ってくるかと思います。具体的に言うと、例えば頻度が半年に1度起きる、あるいは1年に1度起きるというのは、自然災害で考えると洪水や台風が、まさにこのぐらいのペースで起きるところは起きているわけです。ただ、そういうふうに頻繁に起きるところ、しかもその規模がさして大きくない場合には、俗に言われている災害文化あるいは防災文化というものがあるわけです。例えば長良川の輪中などもそうです。他の地域でも、長い年月の中で頻繁に起きる災害に対応する知恵や技術が発達した例があると思います。そうすると、この頻度が頻繁になればなるほどリスクが高まることになるとは、必ずしも言えないところもあると思っています。この辺はやはり企業や組織体の危機管理とは多少違ってくるかと思います。

ところで、「避難」ということがよく言われていて、避難勧告や避難準備情報などを流すことには課題もありますが、避難とは要するに「難を避ける」ことです（図6）。そのためにはいくつか方法があって、ひとつは「ガードを固める」、これは警備会社に依頼して、博物館だったらその所蔵品あるいは展示物をしっかり守る。あるいは、警報装置を取りつけるということもできるかもしれません。もうひとつは、「移動する」です。移動する場合の基本はもちろん安全な場所に移動するということです。ですから、洪水や津波ということになれば、水平移動もあるかもしれませんが、垂直移動もあり得ると思います。あるいは、「留まる」というのもひとつの判断です。これはモノだけではなくて人命の場合も全く同じです。今日の大河内さんのお話からはそれだけではなくて「置き換える」というのも

ひとつの避難、難を避けることになることがわかりました。この難の可能性こそまさにリスクの問題だと思います。その難を避け切れずに難を被るとというのが被災するという状況ですが、やはりこの時に何が被災したのか。人命なのか、モノなのか、金なのか、情報なのか。これは結局、その後の復旧・復興のプロセスをどういうふうにマネジメントしていくかにおいても、この4つの組み合わせ、確保が基本ではないかと考えています。回復に何が必要か、どのような対応策があるのか、そこでもやはり人・モノ・金・情報ということだと思っています。

そして、無形民俗文化財をめぐる人・モノ・金・情報を見た場合に（図7）、「人」というのは基本的にまず浮かぶのは担い手である。担い手というのは、最初の今石さんのお話の中でも出てきました伝承者であり、観衆であり、あるいは追っかけみたいなの人たちも含めてサポーターといわれる人たちでしょう。その中でも伝承者は知識や、ここでは「技術」と書きましたが、いわゆる技を持っていられる。そうしたものをいかに情報化していくかというのも災害対応にとっては重要だと思います。

2番目として、「モノ」としての道具・衣装・演じる場です。これは今日の岡部さんのお話にありましたように、いわゆる製作のための知識や技術、これもやはり広い意味での情報と言っていいかもしれません。その保持者、岡部さんや他の製作・修復に携わっている方たちも、ある意味では知識・技術の伝承者であるわけです。それから、演じる場所のいわゆる権利関係というのも、やはり重要な問題になってくると思います。

3つ目としての「金」、それは活動資金、例えば保存会でしたら運営資金になるわけですが、ではそれだけで民俗芸能や無形文化遺産を再建できるかということではなくて、やはり担い手の人たちの生活を支えるお金、財産やいわゆる生業というものが問題になってくると思います。

最後は「情報」です。情報というのは非常に広い、ある意味曖昧な言い方ですが、活動に関わる情報。ここでは人に関する情報、モノに関する情報、お金に関する情報。資金をどう確保するかとか、ボランティアをどこから頼んだらいいか、そういったことまで含めての情報です。さらに伝承資料も、ある意味では情報になると思います。そのための練習・トレーニング・指導方法も、全てそれが可能かは難しいところがありますが、まさに情報化できるものではないかと思っています。

リスクマネジメントについては先ほどもちょっとお話をしましたが、リスクの評価、リスクアセスメントが一番の出発点になるわけですが、自然災害だけではなくて人為的な災害（盗難、戦争・紛争あるいは意図的な破損）も起き得るということです（図8）。そうしたリスクがどういった条件で変化してくるのか、高まるのか低下するのかということも評価の中に組み込むことが重要だろうと思います。これはいわゆる平時の活動としてです。そして、こうした平時の活動というのが、危機的状況が生まれた時の対応策につながっていくのだらうと思います。

さらに被害想定や被害が出た時の対処という時にも、ここに4つ並べましたが、当面はそれぞれのモノに対しての情報です。「情報の情報」というのはわかりにくいかもしれませんが、どこに行ったら正確な情報、役立つ情報が得られるのかという情報のことです。

具体的にいくつかの質問を交えながら、今日の4名の方々についてコメントします。東さんのお話の中で、三陸沿岸というのは明治・昭和の三陸大津波を含めてこれまでも頻繁に津波災害あるいは地震災害を被っているわけですが、今回は様々な外からの支援も働いて、そうした民俗芸能の復活が、もちろん全てではありませんが、達成された、あるいは達成されつつあります。では、過去のそうした津波の時の芸能の被害状況、その時に、今回のように民俗芸能が社会的に果たした役割あるいはそれに対しての期待のようなことは、人々の記録や記憶に残っているのかどうかというのが気になる

りました。図9は釜石市の南部藩壽松院年行司支配太神楽ですが、ここは過去の津波災害の経験を基にして獅子頭を津波の来ないところにあらかじめ保管しておきました。これは、神楽に関わっている方から伺ったのですが、それだからこそ直後にこうした門付けを行うことができたと思っていました。過去の災害のことについてお話・情報をいただければと思います。

大本さんのお話では、吉田秋祭りのハザードマップと祭礼道具保管場所をマッシュアップした地図を見せていただきましたが、それは保管場所の位置までの情報なのか、それともやはり津波や浸水を危惧して、保管場所の中での高さ、あるいは過去の浸水表示みたいなものが町の中やその周辺にあるのかどうなのかということが気になったところです。もうひとつは、やはり愛媛県の場合には、過去にも慶長地震が起きたわけですが、中央構造線の断層帯にあるということで、伊方原発という特異なリスクを抱えています。それに対する何か特別な対応策が行われているのかどうかを伺えればと思います。

それから3番目の大河内さんには、3Dプリンタを使ったレプリカの製作がいくつか行われている事例は知っているのですが、多くの場合には視覚障害を持っている方への対応ということ、あるいは健常者の人にもやはり目で見ただけではなくて触覚というものを使った展示物や収蔵品の鑑賞という面で使われている部分があると思うのです。そのところでの何か新しい展開、可能性、その辺りをどのようにお考えなのかをお聞きしたいです。お話の中で一番興味を持ったのは、地元の工業高校の生徒さんたちの教育の場と、地元の方たちとをつなぐことによって新たな物語を仏像に付与していく。物語が加わったことによって、それが仏像の新たな価値になる。それまでになかったような地元の人々と仏像との距離感をぐっと縮めていったというところがすごく面白いと思いました。

最後の岡部さんは、いろいろご苦労があると思います。われわれにとってみれば非常に「目からうろこ」の部分があるのですが、写真や採寸によるデータ化と仰いました。まさに、それは必要なものだと思います。無形文化といえども道具・衣装がないと成り立たない部分は当然あるわけですが、そこでやはり気になったのは、村上さんのコメントとも若干関係してくるのですが、写真というのはいまほとんどデジタル化して残すことが可能ですが、媒体というものは今後ますます変化していくと思います。そうした媒体の変化というものについていく時に、そこには当然タイムラグが生じるわけですが、ラグが生じた時にもし何かが起きてしまうとやはりデータが損失してしまう危険性があるということで、ひとつはその媒体の問題です。それから、ネットワークしておけば大丈夫と言うかもしれませんが、サイバーテロなどでネットの中に入り込まれてしまうと急速にそれが拡大してしまうということもあり得ます。そうすると先進的な技術だけに頼れない面があるわけですので、そのあたりをどう対応していくのか。残す手段・記録・情報の保存の仕方の多様化について、道具の製作あるいは修理というお仕事に携わっている中で考えていらっしゃるがあれば伺えればと思います。以上です。

Institute of Humanities
National Museum of Ethnology

リスクマネジメントと危機マネジメント(1)

● リスクマネジメントとは:

リスク(=潜在的な危険)の存在とその頻度・影響度を認識し、必要な対策を施すことで、顕在化を防ぐ

リスク顕在化の可能性を減少させる
リスク顕在化時の影響を減少させる

対策のこと

(参考: <https://www.isc2.org/japan>)

図 1

Institute of Humanities
National Museum of Ethnology

リスクマネジメントと危機マネジメント(2)

● 危機マネジメントとは:

危機(緊急事態・食品衛生・犯罪・テロ・戦争・不祥事など)に対して、

平時より調査・研究し、
発生時の対応策を準備し、
発生時に速やかに効率よく対応し、
速やかな復旧を期す

対策のこと

図 2

Institute of Humanities
National Museum of Ethnology

リスクマネジメントと危機マネジメント(3)

● リスクマネジメントと危機マネジメントの共通点・相違点

	危機マネジメント	リスクマネジメント
活動	危機発生時の対応	平時を含めた対応
目的	事業の継続のための障害を乗り越える	事業の継続のための障害を乗り越える

リスクマネジメント → 危機マネジメント

図 3

Institute of Humanities
National Museum of Ethnology

リスクの洗い出し

● リスク(起こり得る危険)を周囲の環境から予測して洗い出す

1. 過去の経験より...
2. 歴史上の事実より...
3. 過去の傾向より...
4. 他者・他所の事例より...
5. 条件を特定してシナリオを組み立てて...
6. 今に潜む予兆より...
7. 専門家に聞いて...
8. 時には勘にも頼り...

etc.

図 4

Institute of Humanities
National Museum of Ethnology

リスク・インパクト分析

● 洗い出したリスクを影響の大きさと頻度別に分類する

影響の大きさ: 5: 事業継続が不可能になる
4: 事業継続が困難になる
3: 事業に著しい影響を受ける
2: 事業に大きな影響を受ける
1: 事業に一定の影響を受ける

頻度: 5: 半年に一度は起こる
4: 一年に一度は起こる
3: 三年に一度は起こる
2: 五年に一度は起こる
1: 十年に一度は起こる

影響 × 頻度 = リスク強度

図 5

Institute of Humanities
National Museum of Ethnology

避難

= 難を避ける
ガードを固める
移動する(水平・垂直)/留まる
置き換える
難の可能性=リスク

難を避けきれずに、難を被る
(被害にあう=被災する)
何が被災したのか(人、モノ、金、情報)
回復には何が必要か?
どのような対応策があるか?
(人、モノ、金、情報)

図 6

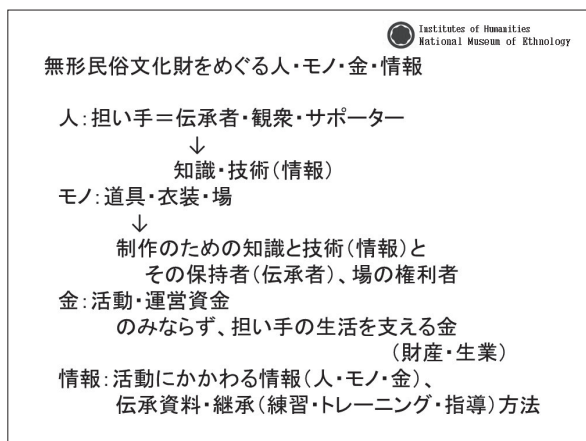


図 7

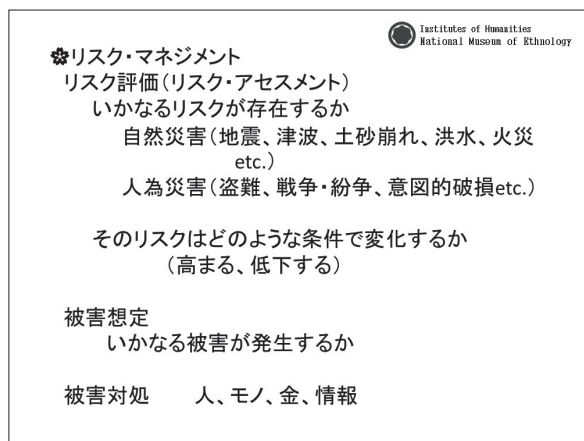


図 8



図 9 南部藩壽松院年行司支配太神楽
（飯坂真紀氏提供）

ディスカッション

今石みぎわ それでは総合討議を始めたいと思います。コーディネーターは無形文化遺産部の久保田と今石で務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

いま、林先生から4人の方それぞれにご質問がありました。そのご質問の合間に、皆さまからいただいている質問の中で少し具体的なものを挟みながら進めていきたいと思います。

まず、東さんに林先生から質問がありました、過去の津波の時の被災・復興状況、特に芸能に限定しなくてもよいですが、そういったものが記録、記憶に残っているのかという点、もしおわかりになりましたらお願いします。

東資子 すみません。実はわからないです。大船渡市の芸能については、関西の方々に言うところ「へえ」と思われるかもしれませんが、芸能の起源が戦後、昭和20年代とか、そういうものが結構多いです。いま釜石で話題になっている虎舞など、平成になってから始まったものがしっかり民俗芸能になっています。ただ、芸能の起源としていくつかのピークがあって、大正期に起こった、戦後起こった、昭和50年頃に起こったというようなことを聞きますし、それとは別に昭和8年の津波で道具が流されて芸能がなくなってしまった、戦争の時になくなってしまったという話も聞きます。ただ、それがいつ復活したということをちゃんと聞き取れていなかったです。一関市でも同じようなピークを迎えるので、戦後、昭和50年頃に芸能が起こったというのがあります。もしかして災害から復興する期間とも関係があるのかと思いますが、それは聞き取れていなかったです。

今石 私たちも、これだけ災害が多い国でありながら芸能やお祭りがどういうふうに復興していったのかという記憶が実はあまり残されていないということを、東日本大震災以降にすごく痛感したところです。ですから、そういう記録も今後残していかなければいけないのだろうと思っています。

東さんに会場からも質問をいただいています。特に五年祭についてなのですが、「周期が定まっていなくて誰が主体となってやろうと言い出すのか」という点。あるいは「お祭りを行っていない時にどういう活動をしながらモチベーションを維持しているのか」ということをお聞きしたいということです。

東 お祭りに関しては関西の方でもそうですが、氏子というか代表がみんなで寄り合ってお祭りをするかしないかを決めます。そういう感じで五年祭を今年はしようかとなっても、実際に五年祭ができなかったケースもあります。それはいろいろな事情があって、予算的な問題だけでなく、神社側との兼ね合いもあります。それぞれが協議を重ねて、ではやろうかというふうに、みんなで協議をしていくかたちになります。1回お祭りを休むと8年間空くのですが、その間は「しなきゃいけないけれどもな」ということで危機感を募らせながらも何もされていなかったです。例えば根白虎舞は震災前にやっていて、震災後に1回お祭りができなかったのですが、それでは駄目だということで、8年ぶりに今回復活させました。その間は、誰かまだわかっている方がいらっしゃるので何とか復活はできるだろうと思いつつも、何もしない。けれども、お祭りに併せてやるぞと決めたら復活させられるぐらいのスパンが、4年、8年くらいで、それくらいだったら何とかいけるのかなという感じでお祭りを開催されています。

今石 ありがとうございます。もう一点、大船渡は非常に早い時点で芸能協会というものが設立された。60周年ということですが、その背景がもしわかりましたら教えてくださいということです。

東 私もよくわからないのですが、例えば、権現様などは、大体戦後にこれだけたくさん復活しま

した。地ノ森権現様という大元があって、戦後にみなさんが爆発的にそれを習ったという話があります。そういう戦後の芸能が盛りあがっている時期があって、協会が設立されたのかなと。ちょっとこれだということは言えないのですが、全体的に芸能が盛りあがる周期がある中で、そういう話が出てきたのかなと思います。昭和49年頃の三陸町の郷土芸能協会の設立に関しては、当時リーダーになる方がいらっちゃって、教育長か何かも勧めていらして、それで長として何とか進めようという話があったということでした。そういう行政側の支援もあったのかもしれない。

今石 ありがとうございます。続きまして大本さんへの質問です。これは会場からも質問をいただいているのですが、吉田秋祭りのハザードマップあるいは明浜町での活動について、もう少し詳しく共有していただければと思います。

大本敬久 吉田秋祭りというのは愛媛県の宇和海沿岸部、豊後水道に面した宇和島市吉田町の祭りです。元々吉田藩の陣屋町で藩主は伊達家だったところですが、その海岸部に陣屋町と町人町として裏町・本町・魚棚という3つの町が、1〜3丁目にそれぞれありまして、全部で9つの町がある。そして、それぞれが思い思いに屋台や牛鬼、鹿踊などを出している近世から続く祭礼です。ハザードマップは、宇和島市が発行している防災の津波ハザードマップがありこれは市民にも各戸配布されており、市のホームページでも公開されている情報です。その地図の上に、先ほどスライドでは大まかなドットで落としたものを紹介しましたが、具体的にはどこの家で、1階なのか2階なのか、どこの部屋なのかということ把握したマップを作成しています。ただ道具の中には刺繍幕などの懸装品・彫刻類・人形など、江戸期のものもあつたりします。防犯上、安易に公開するわけにはいかないので、大まかなマップで紹介させていただきました。林先生からご質問があったように、やはり津波の浸水想定の高さはきちんと把握をしていて、間取りと高さ（1階なのか2階なのか）は把握しています。西予市明浜町狩浜については、いまそのマップ作成のワークショップをやろうということで地元と協議をしているところです。

今石 ひとつ私から質問ですが、マップの更新については考えていらっしゃるのでしょうか。例えば、場所をちょっと移しちゃったとか、そういう情報を今後更新するような仕組みはあるのでしょうか。

大本 案外、場所って移らないといいますが、集会所や個人所有の倉庫の2階という形で、案外移っていないのです。なぜこれを調査しているかというと、宇和島市が中心になって吉田秋祭り調査委員会を立ち上げておりまして、来年度末には報告書として刊行する予定になっています。一応それでできる限りの公表はする予定です。更新に関してはその後ということになるかと思います。

今石 ありがとうございます。大本さんにもう1件質問がきています。「ご発表の内容を後進事例とするのはなぜでしょうか」という、恐らく謙遜されて「後進」と言われているだけで、先進的な取り組みをされていると思うのですが、「大本さんが行っていることに周りの理解はどれくらいあるのか」というところと、特に行政等のサポートの問題について、そのあたりを少しお話しいただければと思います。

大本 後進事例と言ったのは、実際、後進なのです、本当に。県民の多くが未だ「愛媛は災害が少ない」と信じている状況です。ただ、この1年で愛媛は、状況が変わったかもしれません。何が変わったかというところ、この1年はいろいろなことが起こったのです。要するに、住民が「これは危険だな」とリスクを感じる場面がものすごく多かったのです。まずは3月24日に芸予地震発生から15年という節目がありました。それに併せて県内のマスコミや行政も含め、いろいろな取り組みが報道され

ました。その直後の熊本地震では4月16日の1時25分に八幡浜市で震度5を観測するなどしました。これは結構私自身も恐怖を感じました。というのは、熊本が動いて、そして大分も震源として揺れたということは、中央構造線でいえば次は愛媛だなというのが実際に報道でも出ましたので。例えば対策のされていない博物館でしたら、展示室や収蔵庫の落下対策をしなくてはいけないというのが、その1～2週間後にわかに話として出たりもしました。あとは夏、8月12日に四国電力の伊方発電所が再稼働しまして、原子力防災に関してもリアルに感じるがありました。ちなみに私の勤務する博物館は、再稼働している原子力発電所から直線距離で23kmの位置にあります。国内で再稼働中の原発から半径30km圏内にある唯一の県立の博物館です。そして今年12月21日、再来週が昭和南海地震70年ということで、今月に入って、この1週間でもかなり報道されています。昭和南海地震70年企画というのが四国全体、あとは和歌山県も含めて繰り広げられて、防災意識を高めるきっかけになる1年だったのかなと思います。それに乗じてと言うのはよくないのですが、それに併せて愛媛資料ネットなどで文化財防災に関する全国集会をやったりする。博物館としては、では県の博物館協会において、災害に関する研修会を行う。行政で言えば、県教委の文化財保護課が市町村の文化財の担当者を対象として行う文化財担当者会議が年に1回あるのですが、それも来年度は文化財防災をテーマでやろうという計画になっています。1年前まではなかった動きが、民間の資料ネットにも、博物館にも、県の文化財行政側にもあります。1年前だったら私は1人で吠えていて、狼少年になるのかなと思っていましたが、周囲の体制やサポートも徐々に構築されてきているのではないかな、そんな気がしています。

林先生からご質問の伊方原発の原子力防災に関しては、これは対策をとるといってもなかなかとれないですね。我々で何ができるかということですが、原子力災害が起こった時に地域そのものを維持できるかどうかという大きな問題がありますが、まず前提として、原子力防災に関する基本的な知識を有するかどうかということが大事だと思います。我々が実践していることとしては、公益財団法人の原子力安全技術センターが実施している原子力防災に関する基本的知識を持つための職員研修などもありますので、愛媛県内で開催される時には参加をしています。私も今年10月に研修を受講しました。例えば、空間線量計や表面線量計。博物館に勤めていましたらいわゆる外気エアが入らないようなコンクリ建物になりますので、万が一原子力災害があった時にはそこが指定避難所でなくても住民が避難してくる可能性がある。そうなった場合に空間線量計はバックグラウンドを測る意味で必要ですし、資料がもし放射線を浴びた場合、線量を測る必要があるということで、そういう最低限の知識と技術が必要になります。文化財レスキューでも表面線量を測らなくてはならないこともあります。そのあたりの知識と技術を職員の中で共有しようということで、まだ十分システム化はされていませんがそんな流れになっています。

今石 ありがとうございます。それでは大河内さんに林先生からのご質問で、3Dプリンタを使った、触覚に語りかけるような展示の新しい可能性は、というものがありました。

大河内智之 触覚による展示鑑賞ということについて言いますと、これはまさにみんなく（国立民族学博物館）の広瀬浩二郎さんの行われている「さわる展示」。これは、みんなくの場合は豊富な資料を生かして、世界のいろんな実物資料を実際に触るという、本当に先進的な取り組みです。広瀬さんご本人が視覚に障害をお持ちであるという、当事者の立場からそういうことを推進されているという状況があります。和歌山県博の場合も、そもそも、ユネスコが1960年代に出した「博物館をあらゆる人に開放する最も有効な方法に関する勧告」がありますが、これは現代でも十分内容は生きている

と思いますが、要するに、あらゆる人が博物館を使えること、それが大切なことであるという。それに対して、公共施設としての博物館があらゆる人に情報を提供する体制を作れているのかどうかという自問を、やはり常にしないといけないのですが、例えば視覚に障害のある方が博物館に来られた時にどういう展示鑑賞をしてもらうか、利用してもらうか、活用してもらうかということについて、対応ができていないという現状があります。それは別に日本だけでなく、世界中の博物館が抱えている大問題です。それに対して、実物を触るというみんなのスタンスもひとつの解答ですが、実物にそっくりの形を持つ複製を触っていただくことで、情報を共有化してもらうという環境を整えることが大事だと思っています。博物館にとって最も情報を届けるのが難しい方々というのは視覚に障害のある方です。ガラスケースの中にあるものをどうやって伝えるか。そこで「触れるレプリカ」を活用して、今でも博物館のエントランスホールや常設展示室に触れるレプリカを常時 20 点ほど用意しています。結果的に言えば、最も情報を届けるのが難しい方に向けて作ったものは、誰にとっても使いやすいし、誰にとってもいろいろな楽しみ方ができる、本当に許容力のある楽しみ方ができる資料になっています。例えば博物館のそばにある幼稚園の子たちが、園が終わった後にお母さんと一緒に来てくれる。いままでだったら敷居が高くてあまり入ってきてくれなかった人たちが入ってきて、触ってキャッキョ楽しんでくれている。お面をかぶって写真を撮ってもらってもいい。そんなことをしながら、さらにそこで興味を持って、さらに深い情報にまでアクセスしてくれるようなことを期待しつつ、距離感を近づけていく方法として、この触れるレプリカが有効なのではないかということで展示しています。先ほど画像で出したいろいろな仏像も、今は自由に触ってもらえるレプリカとしてロビーなどに置いていますので、ぜひまた触っていただければありがたいです。

今石 ありがとうございます。併せて具体的な質問もしてしましますが、「製作するのに必要経費はどうされているのか」。これは文化庁の補助金というお話もありましたね。あとは素材の問題です。ABS 樹脂を選ばれているということですが、その可能性と、例えばどのくらいのサイズまで作れるのか、そういったことをお願いします。

大河内 まず材料の問題、サイズの問題です。サイズは、いま作っているのは工業高校にあるプリンタに規定されることになる。材料も工業高校に入っているプリンタが ABS 樹脂を使うタイプのプリンタなので、それを使っているという、身も蓋もない答えになってしまいます。いま 3D プリンターの性能、材料も多様化しています。金属で作るケース、石こうで作るケースもあります。ABS 樹脂の、いわゆるプラスチックを使うケース、コピー用紙を積層して作るような機械もあったりして、本当にいろいろな機械があります。ただ結果的に言えば、和歌山県博では触れるレプリカという前提で作っていますので、その点で言うとプラスチック製は紙製や石こう製よりも強度や耐久度がある。ただ、百年先までもつかどうか、そこはわかりませんが、当面一定の強度があるということで使い勝手がいいなと思っています。大きさは大体縦 30 センチ、横 25 センチ、奥行き 25 センチくらいのブロックが、1 回の出力で作れます。それで大体 40 時間くらいは出力にかかりますが、それを組み合わせていけば大きいものでも作れます。先ほどの愛染明王立像は大体 60 センチくらいあります。大きくなったら材料も増えて、それで制作費が高んでいくという要素はありますが、大きいものも十分作れます。3D プリンタというのは、プリンタ本体よりも、消耗品で利益をあげるという、普通のプリンタと同じ仕組みですので、材料費は結構高めに設定されています。それで工業高校でも機械は入っていますが、消耗品は、例えばひとつのカートリッジが 7 万 5,000 円します。ひとつのカートリッジでお面だったらふたつくらい作れますが、なかなか学校の授業の中で消耗品をどんどん使うわけにもいかない

いうジレンマがありました。いまは文化庁からの補助金を博物館が得て、それを使って作るというかたちで対応しています。

今石 大河内さんに最後の質問です。「レプリカの作成については寺社側からの依頼があったものだけを行うのでしょうか。例えば、依頼がなくても行政側が行いたいものについては今後どのようにされていくのでしょうか」。これは地域をどう巻き込んでいくかという大本さんの話ともちょっと重なるかもしれませんが、そういった点をお願いします。

大河内 わかりました。林先生からいただいていた、もうひとつのご質問で、レプリカを作ることで物語を付与すること、仏像との距離感を縮めたということについても併せてご回答します。まず現状、いまは学校との連携で製作をしています。結果としてそれが物語の付与にも当たるということです。学校と連携をとることによって 3D プリンタを稼働させたり、実際にデータを修正したりという、そうやって博物館本体だけではできないことを一緒にやっていく中でこの事業自体進めています。ちょっと身も蓋もない話をすれば、そもそもこうしたことをやっているのは工業高校が 3D プリンタを導入したということも前提としてあり、活用できることは何でも使おうということでもあります。作ってほしいという要望は本当にいろいろきます。例えば、こんなの作りましたというのを新聞報道・ニュースで出してもらったりするとすぐに電話がかかってきて「実はうちのものも心配なので作ってほしい」と電話をいただいたりします。でも、「よそに知られたら恥ずかしいので内密に作ってほしい」と言われたりすると、「ちょっとそれは無理なんです」とか言ったり。それから、他府県のお寺さんから連絡をいただいたりして「作りたいんだけど」と言われても、「ちょっとそれは難しいので」ということでレプリカ製作の会社なんかをご紹介したりということで対応しています。基本的には学校の授業の中でできる範囲で、年間作れるものを作っていくということになりますから 1 ～ 2 体、せいぜい 3 体とか、それを何とかカリキュラムの中に入れて作っています。要望があったらそれをどんどん作るという体制にはなっていませんし、今後もそういう量産体制にはしようがないです。博物館で機械を入れて人を入れたらできるかもしれませんが、あまり現実的ではないと思います。ですから基本的にはモノ（文化財）を取り扱える博物館のほうでコントロールをしているのが現状です。全ての要望を受け入れられるほど完璧にはできていません。いろいろな地域の実情があって、ここはすぐにでも何か対策、対応をしないとよくないなという、これは文化財を担当する人が必ず抱えるジレンマですが、重要性に順位をつけざるを得ない。ものすごく重要だけれど、いまこの体制では防犯的に本当に危ないなというところで「もしなんでしたら博物館でお預かりすることもできますよ」みたいな対応の中で、3D をやっていこうというのをコントロールをさせてもらっているのが実情です。

博物館のこういう事業を延々やり続けられたらいいのですが、そうならないかもしれない。でも、いまやっているのは、こうしてお話をさせていただいたり、ニュースなんかで出してもらったりして、こんなやり方があるということをとにかく知ってもらえれば、例えば民間の業者で 3D プリンタでもいいですし、レプリカを安価に作れるような体制が他の方法でも取れたりするかもしれない。あるいは別の地域でも、工業高校や高専、地域の大学の工学部で 3D プリンタを持っているところがあって、核になる、ハブになるような博物館や文化財を取り扱うところがあれば、十分できることになります。そうやってこの方法が広がることこそが、博物館としていまできる情報発信なのかなという思いです。続けられないからできないというスタンスは取らない、というジレンマを持ちながら事業継続をしています。その点で林さんから仏像との距離感を縮めている事例としてお褒めいただいたわけですが、先ほどの私の報告で言い忘れたことなのですが、レプリカを置いて実物を博物館で預かっているのは、

あくまで緊急措置なのだというスタンスです。理想論だということは重々承知していますが、地元の中に実物が戻っていける体制を作るまでの、そこまでの中継ぎでこの方法を取っているのだと、そこを最後のゴールに設定して、レプリカを置き換えるという措置を取っているということを、最後に一言申し上げたいと思います。

今石 ありがとうございます。続きまして、岡部さんに林先生から「データ損失の恐れがある媒体の問題をどう考えればいいのか」という非常に大きな質問です。それに併せてアーカイブ化などの課題もあるのですが、何か技術者として、アナログな方法でもよいのですが、そういったものがあればぜひ共有していただきたいと思います。

岡部達也 まずデータ化に伴う媒体の変化への対応については、正直言いまして今後の課題かと思っています。まず大事なことは写真記録と採寸をする必要性です。あとは所有物の把握をしていたきたいというのがあります。先ほどは票に記入する方法を紹介しましたが、保存の方法はいくらでもあると思います。ですから3Dプリンタは、すごくうらやましいなと思います。それがあれば、そこからレプリカは簡単に作れます。ちょっと余談になりますが、お獅子も太鼓も最近は木でないものがたくさんあります。FRP（繊維強化プラスチック）でできているお獅子もあります。例えば香川県ではお獅子がすごく有名なのですが、木製ではなかったのです。「パンパン音がしないんだけど」と問い合わせを受けて実際に現場に行って調べたところ、80%くらいがFRP製でした。プラスチックや樹脂は良い音はしません。ですから今後、徐々に木製に戻していきたいという相談を受けています。デジタルとアナログが融合しているような感じなのですが、宮本卯之助商店はまだアナログです。何がアナログかというと、図面とかがないのです。全く図面がなく、お神輿を作るのも親方の頭の中いう、昔ながらのやり方です。ですから、これをデータ化できないかということを社内でも検討しているところなんです。データ化しておけば、お神輿でも何か部品が壊れたというと簡単にその部品を作ってはめ込むことができる。修理できるように製作をしていますので、これからはやはり10～20年ではなくて、百年～二百年と継承できるものを作っていきたいと思います。林先生からのご質問に関しては久保田先生を含め、できる限りみなさんと協力しながらアーカイブしていければと思っています。

今石 ありがとうございます。それから、これは大河内さんと岡部さん両方にお答えいただければと思います。「無形民俗文化財を支える有形民俗文化財、例えば道具や衣装を新調する際に、旧来の物を保存用として祭礼に使用しない事例が増えている。このような場合、新調やレプリカ作成に関して行政側からどういうアドバイスをすべきか判断が難しいことがある」というご質問ですが、お考えがありましたらお聞かせください。

大河内 無形民俗文化財の保全に関わっていらっしゃるみなさまの、現場のいろいろな葛藤やジレンマについて、私自身が同じ水準でお話しできるかどうかかわからないのですが、私は美術史、彫刻史の研究者でもありますので、仮面についてもいろいろと調査・研究しています。和歌山の事例ですが、和歌山の東照宮祭礼の中で今も続けられている和歌祭というお祭りの中に、^{めんかけ}面掛行列という、仮面をかぶって70～80人が列を組む行事があります。その面掛行列のお面がたくさんあるのですが、それを96面初めて調査したら、鎌倉時代のお面から近代・現代のお面まで交ざっていて、大量に古い重要なお面があることがわかりました。そのうちの30面くらいは現役で使っていたのですが、博物館でお預かりすることになったのです。その後県指定文化財にもしています。先ほどからの話で言うと、まだ当時は3Dプリンタを活用してという段階ではなかったのですが、実物は使わずに地元のいろいろな方にお金を出してもらって、これは万葉薪能の会というところが行った事例ですが、新しい

お面を祭礼用のお面として新調して奉納してもらって、祭礼のほうはそれを使うというケースがありました。ひとつの歴史の継承という点、重みということで言うと、実物を使うことの意義は大きいのは承知ではありますが、例えば五百年前のお面でしたら、また五百年先までそのもの自体を維持するという考え方の中で、古いお面は現役を引退してもらって新しいお面を使う。かつ大事なのは、そこで古いお面が使われてきたという事実です。それこそ修理されてペンキが塗られたお面ではありますが、そうやって残ってきたからこそ形態が維持されてきたんだということ。お面があるからこそ面掛行列たり得るのだということ、そんなことを共有化すること、お面を被っているみなさんが常に古いお面のことを忘れないということ、そういうことが大事なことのかなと感じています。これも、これだけが正解とは思いません。現場の最前線でジレンマを抱えながら活動した、ひとつのケースということになります。

岡部 私も、震災とは関係なく、江戸時代の末期に作られた茨城県の三匹獅子の頭のレプリカを作ったことがあります。頭が虫に食われてしまって使う度にぼろぼろ壊れてしまう。そこで役所と保存会の会長様から相談を受けまして、レプリカを作りました。古い物はどうしているかという、これはモノではないのです。やはり神様ごと、神事で使うわけですから御霊が入るわけです。邪陰には扱えないのです。ですから、練習は新しい獅子を使って、古い獅子はお正月と祭礼時に必ず隠居獅子として祀ってくださいと伝えています。隠居獅子によって古いものが伝承されているという証しにもなりますので、必ず人の目に、日の目の当たるところに祭壇を作ってあがめてくださいと勧めています。使うのはもちろん新しいものなのですが、その地域の子もたちが古い獅子を間近で見られる体制をとってもらっているところが2〜3カ所あります。

今石 ありがとうございます。総合討議の時間が17時半までということで、もうあまり時間が無いのですが、みなさまからいただいた質問を通して本題に入っていきたいと思います。ネットワークや体制づくりに関する質問をいくつかいただいています。おひとりずつ、どこの部分でも結構ですのでコメントをいただければと思います。

まずひとつが、行政、博物館、製作者、祭礼関係者との連絡調整や情報共有のためにはどういうネットワークが必要と考えているのか、提案も含めて教えてほしいということ。あるいはそうした様々な組織、保存会や連絡協議会の規模はどの程度が動きやすいのか。地域ごとではなく、例えばジャンルごとのネットワーク化も有効なのではないかということ。また長期スパンで寄り添う体制、姿勢、そうしたものがどういうふうに作り得るのか。これからの課題であれば、どう取り組まれるべきなのか展望をお知らせくださいということです。特に行政の場合、指定件数を増やすことが仕事の成果のバロメーターにされがちですが、そうではなくて、定期的な現地調査のシステムや、指定後にどうなっているのかを調査するためのシステム、そういったものを導入したいところですが、というようなご意見です。ネットワークということで何かお考えがありましたら東さんからお願いいたします。

東 大船渡に引きつけると、あまり行政とはうまく連携できていません。これからは、連携していこうとしていますが、伝承者の方々がしっかりされているのに対して、行政側はどんどん人が入れ替わっていくという現状の中で、いまはうまくネットワークができておらず、特に文化庁の補助金の運用に当たってもこれから調整をしていくというかたちになっています。その部分は本当であれば岩手県のほうから考えてほしいところだと、私はいま、芸能協会側の立場からそう思っています。

久保田裕道 では続けて大本さん、お願いします。

大本 ネットワークといいますか、先ほどちょっと冗談っぽく狼少年の話を出しましたが、集落の

防災に関する広報役を少年がひとりで担っているというのが現状で、システムとしては非常に危ういです。ひとりではまずいということも当然ありますので、少年ひとりに任すようなものではない組織づくりが必要です。今日の参加者名簿を拝見すると、四国からの参加者は私ひとりのようです。四国の防災意識を高めなくてはと思いながら頑張って資料を作ったつもりだったのですが、四国の人は誰も聞いていないのかもしれないなと思ったりもしてこの協議会は西日本からの参加者がもう少し増えれば有難いとも思いました。文化財に関わる行政でも担当者といかに情報や問題意識を共有していくかということがこれから課題になっていく。ただしこれはこの場にいないというだけで地元では理解してくれる方は非常に多くなっていますので、この協議会のような機会を引き続き設ける努力をしないとはいけません。無形文化遺産の伝承者に関しては、愛媛ではずっと前から課題なのです。これは防災や災害という問題ではなく、やはり過疎高齢化、少子化が表面化している問題なのです。あとは、いかに補助金を申請するかというノウハウの問題も含めて悩んでいるところが多い。各団体の中では解決しない問題について市町村や教育委員会が全てアドバイスできるかという、それもなかなか難しい。県になると、もっと遠くなってしまうということで、やはり無形文化遺産の伝承者が孤立して悩んでいるという現状もあるのだらうと思います。ですから例えば、山形県で東北文教大学の菊地和博先生らが中心になって、山形県の民俗芸能等の連絡協議会を作られましたが、ああいったかたちのものを何とか愛媛でできないかと、妄想的ではあるのですが、考えているところです。要するにいろいろな業種、業界には同業者組合はあるのですが、民俗芸能など無形文化遺産に関する同業者組合は愛媛の場合はないということです。防災だけではなくて過疎も含めてのいろいろな問題を共有する場を仕掛けていかないとまずいのかなと、最近強く思っているところです。

久保田 ありがとうございます。続きまして大河内さん、ありましたらお願いいたします。

大河内 ちょっと私にも難しいなという問題です。組織のネットワークの問題もですが、まさに久保田さんのお話にもあったような情報のネットワークを共有化できることも、防災・防犯においては大事なことだろうと思います。もちろん、研究者のネットワークがあれば情報のネットワークにもなりますが、先ほど私の報告でもちらっと申しあげましたが、ネットワークも本当にいろいろあります。例えば、私は博物館にいますから所蔵者や学校、研究者も含めていろいろな人を、博物館をハブとしてつないでいく、まさにネットワークを作っていく中でいろいろな事業を進めていきます。一方で防犯の話ですと、先ほどお話した県教委と県警の関係とか、本当は同じ県職員なので協議をすればいくらでも情報の共有化ができるのですが、そういうことひとつ取っても、なかなか連携していないケースがあると思います。盗難被害が出た時に県教委ですぐに情報を得られれば、市町村の教育委員会に情報を流して、「こんな事例があったから気をつけてもらってくださいね」と言える。どうしても指定文化財に偏重してしまう、未指定の文化財に対するフォローは難しいところもありますが、そうやって情報を集約するためのネットワークづくりを博物館でも教育委員会でもしていく。今まで何となく組織の中の壁を思っただけでやっていなかったようなことでも共有化していくこと、組織の中でできていない部分を自覚して、共有化していくことでいろいろな対策につなげていける、知ることにつながっていくのかなと思ったりします。

久保田 ありがとうございます。岡部さんはいかがでしょうか。

岡部 そうですね、質問に答えるのは難しいのですが、ちょっと別の視点で、長期スパンというお話が出てきました。弊社としては、ただモノを作る、獅子を作る、太鼓を作るだけではなく、その後のことを重視して、期間を設けずにアフターフォローをえています。いまだに私も東北以外にも

全国各地へ行っています。ほとんど東京にいないのですが、1ヶ月間四国に行ったり、瀬戸内のほうをぐるっと回ったり、やはり現場のお祭りをこの目で確認して見て、聞いて、話してということを大事にしています。東北へはいまだに行きます。当初は2カ月に1回、約2週間ずつ行っていました。今年は1年で2回ほど行きました。納めた所にはなるべく寄るようにして、調子はどうか、状態を確認して戻ります。そういう細かいアフターフォローの部分も必要かと思います。その他に、うちも職人が全部で25人くらいいます。一番若いのが18歳、一番年配は78歳。60年の差があるのですが、やはり人材育成ということで職人を育てることもしています。職人は厳しい世界ですので、職人を育てるということを念頭に入れて、会社でもそういう研修を必要以上にやっているところです。

久保田 ありがとうございます。それでは、コメンテーターの村上さん、ネットワークのこと、またそれ以外のことも含めていかがでしょうか。

村上裕道 リスクマネジメントの件でちょっと考えてもらいたいなと思った内容を伝えさせていただきます。ひとつは東北の事例で東さんから話ががあった時に、未指定の無形民俗文化財がすごく多いんだと話されました。これは実はどの分野もそうなのです。ただし、未指定文化財の「未指定」という言葉が持っている意味合いをもうちょっと考える必要があると思っています。この言葉に私はマイナス的なイメージを持つのです。要するに、積極的にどういうものであるということを特定しない「その他」という言い方をしていると感じています。阪神・淡路大震災の時には、全分野がそうだった。それで、指定と未指定の間をつなぐものとして登録文化財という制度を入れてもらおうということで動いた。おかげで今は1万件以上が登録文化財建造物という名前になりました。「登録」という名前が付いた段階でマイナスからプラスイメージの言葉になっています。ということは、行政がそのデータを相互に保持できる状態になった。つまり1万件が相互保持できる話になってきたということなのです。無形の文化財の分野において「その他」と言い続けているいまの状況を、みんなはどう考えておられるのでしょうか。つまりは、文化財にしたくないと公言し続けていると誤解されかねない。これをどう見るかは本当に大事なことだろうなと思います。先ほども述べましたように、制度的対応では、文化財は重要であると認識され肯定的にだんだん変わってきています。言葉ひとつにしても変えていけないといけません。また、行政側に依頼するにしても、依頼しづらい状態のまま持っていくのと、行政側が動きやすい状態にして依頼するのでは随分違うので、その辺を考えていただきたいなということを感じていたところです。

久保田 ありがとうございます。ちょっとひとつ伺います。本来なら別枠でお聞きしたほうがいいのかもしれませんが、以前お話を伺った時に、兵庫県では民俗芸能の現状などを調べたデータを、教育委員会だけではなくて、例えば福祉関係の部署にもお伝えしているということでした。この点についてもぜひ教えてください。

村上 わかりました。阪神・淡路大震災以後、まちづくりを考えている人たちのご意見をずっとお伺いしたんです。地域計画をしている人たちの考え方は、住宅の話から景観というものに移って、文化財という考え方から歴史的環境という考え方に移って、住民の高齢化により福祉も入ってきた、景観・歴史的環境・福祉、この3つが融合し始めたというような言い方をされています。それらをトータルとして見ていかないとコミュニティというものが保持できない、それをどう活性化させるかという考え方をしないといけないんだという話なのです。また、リビングヘリテージである無形文化遺産は、そこに住んでおられる方々の関係性を高める上で非常に大きな財産であることも充分認識されております。これらを考えると、地域計画をしている人たちに「ここにはこういうものがありますよ」

というデータをどんどんとお配りしたい。そこで県として県内の地域ごとにアンケート調査を自治会単位で行い、どんなお祭りが残っていると、そういうことを調査していつているところ。お祭りの続いているところは元気なところが多い。逆に調査に対して無反応のところは、人がいても鳥合の衆になっている可能性が大きいので、そういう情報をお伝えしていけば地域計画担当部所でもいろいろな作戦を考えてくださるということです。無形の文化財を活用すれば、コミュニティの力をぐっと持ち上げられるということを意識していただくことも大切だろうとお伝えしています。民俗芸能の調査票が相当の数になってきています。県内の民俗芸能等のデータが相当蓄積してきたと思っているところです。

久保田 ありがとうございます。多分今日は教育委員会関係の方々もたくさんいらっしゃると思うのですが、こういった無形文化遺産のデータというものが決して学術的なところだけではなく、コミュニティの維持や福祉、そういったことと関係して必要なのだということをアピールできる部分ではないかと思います。ぜひそれぞれの市町村、都道府県でお考えいただければと思います。では最後に林さんから、今のネットワークのこと、あるいはそれ以外のことも含めてお願いいたします。

林勲男 ネットワークということで、とりわけ必要な時に必要な情報が集まるネットワークについて、いま考えていることをお話ししたいと思います。ひと月ほど前に岩手県大船渡市三陸町の三陸公民館で、いま私が勤めているみんぱく主催で「郷土芸能復興支援メッセ」を開催いたしました。準備は何ヶ月間かにわたってやってきたのですが、直前になって私が参加できない状況になってしまって、当日の会場を撮影したビデオを一通り観たばかりです。ここで何をやろうとしたのかといいますと、まず参加を呼びかけたのは地元、岩手県山田町、大槌町から南のほう、最初は、一番南では陸前高田市をターゲットにしていたのですが、実際には、福島県から参加していただいた方もいました。そうした地域の民俗芸能に携わっていらっしゃる方、祭り行事に携わっている方、それから沿岸の市町村の文化行政に携わっている、いわゆる教育委員会の方。さらに東日本大震災が起きた後に民俗芸能を支援してくださった団体の担当の方、研究者、岡部さんにも来ていただいたのですが道具や衣装を製作している業者さん、そういった人たちに一堂に会してもらって、この5年間というものがどういうものであったのか、何がうまくいかなかったのか、やり残していることは何なのか、そういったことを洗いざらいみんなで出し合ってみようということをやったわけです。そもそもは被災した時に支援を受けるための申請書をどう書いていいのかわからないというので、支援を受けるためのノウハウの支援というところから始まったのですが、参加を呼びかけた方たちというのは、なかなか集ったり情報を交換する機会がないのです。地元でも教育委員会の文化行政担当の人と芸能に携わっている人、あるいは芸能協会の人が当面の課題を解決する時に集まるのですが、もう少し長期的な展望についてじっくり話し合う機会がなかなかない。やはり、そういったところでネットワーク化は必要なかな。いま申しあげた全ての人たちに集まってもらう、ネットワークを構築していくことは難しいかもしれませんが、最低限、教育委員会や博物館、郷土資料館、あとは芸能協会それぞれが支援者や研究者、業者さんなどと広がりを作っていけると思いますので、教育委員会、博物館・郷土資料館、芸能協会くらいは最低限しっかりしたネットワークが必要ではないかと思っています。以上です。

久保田 ありがとうございます。無形文化遺産部に対して、あるいは私に対して質問がふたつありますので、かいつまんでお話をさせていただきます。ひとつは、「無形文化遺産の対象とする範囲について何かお考えがあれば」ということです。無形文化遺産は大変広いので、学術的なものであれば分類、定義ができるのですが、防災と絡めて考えていくには、ひとつにはコミュニティとの関連ですね。

コミュニティの再生あるいは復興、振興に役立つものとは何か。無形文化遺産であっても、例えば職人さんがやっているような技術などは、また別に考えていかななくてはいけないと思いますので、そのあたりで学術的なものとは別な仕切りを考えなければいけないのではないかと考えています。

もうひとつ、「調べるのが大切というのは理解できるけれども、現在の行政、状況ではなかなか難しい」ということで「記録を保存できる体制づくりや仕組みづくりを東文研がリードしてもらえるか」という質問、ご意見をいただきました。泣き言なのですが、こちらも予算・人員が少なく、もうてんでこ舞いな状況ではありますが、やっていきたいという意思は持っています。ですので、ここにご参加のみなさま、行政の方、博物館の方、民間団体の方あるいは伝承者の方々とつながることができれば、それこそネットワークができれば可能になると思います。予算、人員は急には増えないのですが、そうしたネットワークをつくることで少しでも進められることができたと思いますので、引き続きみなさま方もよろしくお願いいたします。

ということで時間になってしまっているのですが、会場からこれだけは聞いておきたい、言っておきたいということがありましたら、お願いします。

質問者 京都府教育庁の岸岡貴英です。久保田さんに質問を書かせていただいた者です。お答えいただきましてありがとうございます。京都でも防災の話がいっぱい出ていまして、いろいろなところから聞いています。その中で先ほど村上さんのお話にありましたように、行政として守っていくのであれば、やはり未指定のものについての範囲なり何なり、どこまでが守るべき範囲なのかという枠決めなりをしていくということが第一歩になってくるのではないかと思います。ただ、考え方はいっぱいありますし、学術的なものもいろいろあると思いますので、その点についてまたみなさんのお考えなりを仰っていただける機会をいただいて、こういうような場で、多分議論はまとまらないと思うのですが、かなり細かい議論を積みあげていったほうがいいかなということを思いました。類例で言いますと、例えば私は昨年度まで記念物の仕事をしていたのですが、記念物でも発掘調査で出た出土遺物というのはものすごい大量にあります。その扱いについて10年ほど前からものすごく問題になりました。最終的に文化財としての指定はされていますが、自治体のほうが大変困ってしまいましたのでABCの優劣を付けて保管の区分をして、保管に応じて扱うというような思い切った決断をされたこともあります。無形の中でも、未指定の民俗文化財をどうやって保護していくのかという時の考え方というのは、議論をしていく上で多分決まってくるのかと思いますので、その辺をぜひお願いしたいというのが一点です。

もう一点は技術の問題です。先ほどレプリカの話が出ましたが、一方で岡部さんのやっておられるように技術屋さんが太鼓を作ってきた技術というのはものすごいものがあると思います。それはそれで、作っていく仕事を用意していく必要が出てくると思いますし、やはり線引きは必要になってくるのではないかと思います。今まで守ってきた太鼓の技術を考えると、手軽に作れるということが果たしていいのかどうかということになってきます。それは産業振興とかそういう視点の話にもなり得ますので、そういった点についてもこれから議論をして煮詰めていただくと、先へ進むのではないかと考えて聞かせていただきました。ありがとうございます。

久保田 ありがとうございます。仰っていただいたとおりで、今後どういった分野を対象にするかといったことを、ぜひともみなさま方の考えを聞けるような場をつくっていききたいと思いますので、これもよろしくお願いいたします。

それから3Dプリンタと職人の対決みたいな問題も、まさに3Dプリンタでできること、できない

ことという議論にも関わってくる問題だと思います。そういう意味では、今日のおふたりのお話は非常に有意義だったと思います。その辺を、これを機に今後の課題とさせていただきたいと思います。
長時間にわたりありがとうございました。これで総合討議を終わります。

参考資料

資料 1

「アンケート集計結果」

資料 2

「協議会参加者一覧」

アンケート集計結果

1. 参加者数 124 名（一般 103 名／スタッフ 21 名）

2. アンケート回収率 アンケート回収数：49 名／回収率 47.6%

3. アンケート集計結果

(1) 回答者内訳

所 属	(名)
行政関係者	38
関係機関・団体	1
研究者	4
学 生	0
そ の 他	6

(2) 満足度

	(名)
非常に有意義	31
有意義	18
出席の必要なし	0

(3) 自由回答（まとめ）

【満足度の理由】（当項回答者：43 名）

- ・データの整備と情報発信、ネットワーク作りが重要であることが改めて分かった
- ・災害時の対応について、平時からの備えが大切であると改めて感じた
- ・東日本大震災以外の事例についても聞いたのがよかった

【「無形文化遺産の防災」に関する課題・提言】（当項回答者：30 名）

- ・予算が限られている中で優先すべき事項についての共通認識の形成
- ・保存団体等にどのように防災意識を持ってもらえばよいか
- ・宗教が関係する際の公的支援の根拠、ガイドラインについての議論

【無形民俗文化財の保存・活用に関する問題や課題】（当項回答者：22 名）

- ・民俗文化財の本質的価値を地域とともにどのように守っていくべきか悩んでいる
- ・過去に作成した記録類の散逸や劣化、媒体変換の問題等があるためアーカイブ化が必要
- ・保存会にまかせている部分が大きく、行政としてコミュニケーションが足りていない

【今後取り上げて欲しいテーマ、要望等】（当項回答者：22 名）

- ・無形民俗文化財の範囲・対象について
- ・各団体と国、都道府県、市町村とが円滑に連絡をとることのできる枠組みづくり
- ・無形民俗文化財保護のための記録の方法論について

4. アンケート抜粋

(1) ご感想

- ・無形の文化財の防災は新しい概念で、様々な事例を聞くことで、フィードバックできる部分を探している状態であり、参考になった。
- ・多角的な視点からの事例報告が聞け、多くの方と情報交換ができた。久保田さんのまとめは踏み込んだコメントで、真剣さが伝わった。
- ・無形民俗文化財のあり方は様々であり、個々に考えるべきものだと考え直す機会となった。
- ・広い対象分野を整理するヒントがあった。
- ・各報告者の発表が参考になった。
- ・無形文化遺産を残す、守っていくための視野が広がった。
- ・地域からの人口流出が続くなかで民俗文化をどう保存・継承していくことができるのか、知見や方針・考え方を議論したい。
- ・無形の文化財をめぐる環境は、災害が来なくても危うい状況であり、日頃の備えが重要であることは勿論だが、そもそも、平時においての継続という問題もやはり同時に考えていかねばならないと思った。しかし今回の話の中で、災害に備えることがそれにつながるということがわかり、有意義だった。
- ・防災の実務に従事されている方々にお話を伺うことができたのがとても有意義だった。とても丁寧企画された研究会だと感じた。
- ・無形の文化財の被災というと東日本大震災に注目が集まりがちだが、それ以外の事例についても聞けたのがよかった。林先生の報告がわかりやすかった。工芸技術の防災の例があれば知りたかった。
- ・恒久的なデータの整備と情報発信、ネットワーク作りが重要であり、中心となる機関や人が重要であることが改めて分かった。
- ・歴史学が専門なので、自分には難しいかと最初は不安だったが、興味深い報告で、分かりやすく、大変勉強になった。災害はいつ来るかわからないために、どこか他人事…。準備できるものならした方がよいもの。しかし時間にも予算にも余裕がなく、難しい問題だと思った。
- ・無形民俗文化財の防災という意識がなかったので、災害後の復興を見据えて状況把握することの必要性を知り得た。
- ・「無形の文化財の防災」という今まであまり意識してこなかったことに目を向けることができた。また、理念とともに具体的な手法まで提示されていたので、肝に銘じて実践していきたい。
- ・無形の文化財の防災については、うすぼんやりと考えてはいたものの、やはりそういう議論の高まりがなかったのでモヤモヤしていた。議論すると、やはり色々気づくことがあってよかった。
- ・無形文化遺産の防災についての基本的な考え方が共有できた。
- ・多方向から防災について考えることができた。
- ・現在の文化財防災に関する現状と各地の事例、制度的な部分までを知ることができて有意義だった。

- ・県として具体的に本課題について動きだしていないため、今後、方針・体制づくりを考える上での参考となった。他県等の実践報告から、本県と異なる点、同様の点が見え、参考となった。
 - ・無形の文化財の防災という、これまで自分の中になかった視点からの考察において、未指定の重要性、平常時の伝承とつながる防災対策など、今後の無形民俗文化財の保護、活用、行政に有意義な視点を得ることができた。
 - ・今回、先進事例を学ぶことで、市町村レベルで何からとりくむべきか考えることができた。
 - ・災害時の対応について、平常時からの備えが大切であると改めて感じた。そのために、いまずぐ仕事に活かせる具体例を聞くことができて良かった。
 - ・所在の確認・記録作成、出来るところから行っていきたいと思った。
-
- ・各地域の具体的な事例発表は、無形文化遺産の防災について取り組む上で、参考になった。特に盗難被害から文化財を守るための複製や、祭礼具の復元製作の報告は興味深かった。改めて、文化財の所在等についての情報収集とデータの共有、記録作成をすることの必要性を感じた。
 - ・防災プラス防犯の発表があったことがよかった。
 - ・文化財の防災について、勤務先でたずさわった経験があり、その上でさらにどのようにしていったらいいか考えさせられた。また、文化財の盗難についても、緊急の問題であり、その対処方が参考となった。
 - ・有形との違いが明らかにされて、民俗ならではの個性を再認識できた。
 - ・「無形文化遺産の防災」というテーマに対し、手法、方向性など漠然としたイメージしかなかったが、具体的な例をうかがいながらどのような視点が求められているのか考えるきっかけになった。無形文化遺産を支える有形物の重要性も興味深かった。
 - ・全国事例を知ることができた。特に震災復興だけでなく防犯（盗難）対策の取り組みは大変参考になった。警察からの情報提供・情報共有の事例は参考にしたい。
 - ・無形民俗文化財の存続のためには何が必要かを考える中で、この会に参加した。人や用具までは考えついてはいたが、環境（地域）という視点を教えていただき、これからの仕事に活かしていきたいと思った。地域が祭りをつくり、祭りが地域を守ると思った。レプリカ活用は良い参考になり、県内でもやれるところに導入できたらと思った。
-
- ・祭礼とハザードマップについて、地域の信仰の場にレプリカを置くこと、祭具の寸法をとるポイントを学べたことの3点が有意義だった。
 - ・祭礼具等の手入れの仕方等について全く知識がなかったが、今回何となく知ることが出来て良かった。帰庁後に本館の管理状態について調べてみようと思う。
 - ・3Dプリンタ利用の報告は、面等、代替のきかない芸能用具の復元新調にも役立つものであり、大変参考になった。宮本卯之助商店さんの報告も、実践的ですぐに役立つものと思った。
 - ・祭礼具の防災のための記録づくりなど、具体的な取り組みがうかがえた。
 - ・3Dプリンタを使って工業高校などと連携してレプリカ作成に取り組まれた事例はとても興味深かった。教育委員会としては、魅力ある手法であり、今後検討してみたいところである。
 - ・獅子舞については、本市でも指定文化財になっているので、今後必要な情報を調べるのが大切だと思った。細かい採寸などの記録はないと思うので検討することが必要だと思う。

- ・ 午後の報告が具体的事例、製作の仕方の報告で参考になった。
- ・ 太鼓や獅子頭の採寸箇所について、これまでは異なる箇所を採寸していた。
- ・ 防災の手段、特に宮本卯之助商店さんの「写真撮影や測定」の手段が参考になった。
- ・ 祭礼具の復元には写真だけでなく、詳細な寸法が必要だと痛感し、日常の業務の取り組みを考えなおそうと思った。

(2)「無形文化遺産の防災」に関する課題やご提言

【防災のための記録とその共有】

- ・ 阪神・淡路大震災の時には東日本大震災の時ほど無形の文化財が話題にならなかったように、都市部では小さなコミュニティで行われていた行事に対する関心が低い状態にある。市でも把握しきれていない行事や芸能などがある。情報収集や記録作成は続けていくにしても、防災には地域コミュニティの結束が重要であり、地域の結束には行事や祭りが重要だという側面からも、無形文化遺産の振興を進める必要があると思った。
- ・ 非常に難しいテーマだが、日ごろからどこにどのような無形文化遺産があり、その存続状況がどうなっているかなど、きちんと把握しておくこと、関係者の所在、連絡先、関連施設等の災害対策の現状などについて問題意識を共有し、定期的に話し合っておくことが大切だと思う。
- ・ 発表にもあったように無形の文化財は日々消失の危機にある。知らない内に失われることもある。特に未指定文化財の把握と連絡体制作りが必須と感じた。
- ・ 保存団体等へどのように防災意識をもってもらえばよいか、大変むずかしいと感じた。鳥取もつい先々日被災したにもかかわらず、被災地域が中部域に限られているため、直接的な被害がほとんどなかった東・西部ではすでに忘却されてきている。
- ・ 無形文化遺産の防災は日常の意識、地域の継承していこうとする意識や意欲にかかっているのだろう。行政はそれをどう支援していけるか考える必要がある。東文研が中心になってネットワーク化を主導していく役割は大きい。文化庁、都道府県をうまく組織していかないとうまくいかないであろう。知見を集め、知らせていくことが必要ではないか。
- ・ 文化財全般の防災や防犯、保存のためには文化財の保存修復技術に関する調査研究とともに人的ネットワークや人々とのつながりによって構築される意識の共有が必要であると感じた。都道府県での一覧表の作成が必要だと思う。

【無形文化遺産の防災における行政の役割】

- ・ 宗教が関わるときの公的支援の根拠やガイドラインについて議論の機会があるとよい。
- ・ 予算が限られる中で、必ずこれだけはしておくべきことについて、共通認識があれば良いと思う。聞きとりの調書作成、写真、動画等、記録の手法は色々あるが、どれが1番良いのかわからない。
- ・ 規模が小さい市町村や保存会が自主的に防災に取り組めるよう周知する方法として、チラシ1枚に必要事項を盛り込み配布するとよいと思う。
- ・ 行政として指定外の無形文化遺産をどこまでとするのか、保護の対象をどこまで広げるのかといった公平性の問題がある。
- ・ 太鼓等が盛んに行われているが、多様に広がっているため全体を把握するのが難しい。

- ・日常の活動が大切だということは良く分かった。では、その日常の活動をどのように展開していけばいいのか、その具体的な提案（ビジョン）が必要になってくるのではないか。予算や人員配置も難しい市町村の行政に身を置いている立場としては、どう行動するのか、どういう実践を日常進めていけば良いのか、その具体的な施策が必要となってくる。例えば、できそうな事業として既存の民俗調査（市史編纂時に実施されたもの）の追跡調査を行うことなどが考えられるが、昨今の状況を考えれば難しい。
- ・自治会単位のアンケートを実施してデータ化していく、リスト化するのがよいと思う。しかし、本市は140万規模の都市に民俗文化財担当者が1人という状況なので、とても時間と予算がない。140万規模の県なら、市町村にお願いすることができるが、市だと市役所と区役所は対等なので、区役所にやってもらうことができない。「やれ！」という上からの圧力がほしいところ。外圧でもないと思う。小さな自治体より大規模な市の方が手が足りないのかもしれない。
- ・文化庁の民俗文化財部門との協力、連携を積極的に進めてほしい。特に組織として協力体制が重要だと思う。
- ・有形の用具等は復元でどうにかなるが、人の損失については何ともしがたいものがある。その中で東北の事例では、無形文化遺産が地域コミュニティ維持のために重要な役割を果たした。そこを行政はもっとよく見るべきであろう。
- ・もし防災なり、地域コミュニティ再生に資するということで、新規の調査を立ち上げることができれば、それは新しい視点での事業、予算獲得の手段にできる。そのためには事業の有効性を説明でき、新しい調査の視点（防災を視点にした調査記録のとり方等）がきちんと整っている必要がある。東文研が旗振り役になればと思う。

【「無形文化遺産の防災」の難しさ】

- ・東日本大震災をキッカケとして各地で史料ネットが立ち上げられたが、すべて「有形」のものに対してで、「無形」に対するものではなかったということに気づいてハッとした。「無形」の保護、復興は「有形」よりも困難が多く大変なことだと改めて感じた。
- ・保持者が今、「防災活動をしている」という手ごたえを持つことのできる仕掛けを作ることができれば、理解も深まっていくと思う。有形文化財の場合、文化財防災デーにあわせた消防訓練があり、とても分かりやすい。無形民俗文化財の場合どのようなやり方があるのか思いつかない。
- ・今回の報告の中では、無形の文化財を支える有形文化財の話が目立ったが、本筋である無形の防災については、まだ議論がなされていないのかと危機感を覚えた。
- ・無形の文化財に特有な防災よりも、有形文化財の防災のイメージが大きいと思う。無形の文化財の防災の種類を整理していく必要があるかと思う。また、災害が芸能などで表現されるなど無形の文化財そのものが防災に活用される例も集めてみたい。

【その他】

- ・ぜひ、無形民俗文化財版の防災ガイドラインの作成をお願いしたい。
- ・防災に限らず日本社会全体の課題であり、こうした課題を通じて様々な点について発信していくことが重要であると思われる。
- ・平常時からの記録作成については普遍的な課題として共有されていると感じた。無形文化遺産の

防災に関する今回の議論は、久保田さんがおっしゃったように非常に世界的にも進んだ内容であると思う。英語での成果公開が行われるととても役立つと思う。

(3) 無形の伝承保存・活用全般に関して問題や具体的なお困りごとなどありましたらご自由にお書きください。

【担い手・後継者不足】

- ・やはり担い手不足、減少に伴う無形文化遺産（民俗芸能）の継続が困難になってきていること。仕組みを変えて維持しようと試行錯誤するところがあれば、従来の形を崩さないため、実施できなくなっているところも出てきている。行政側がいかに関心を持てるかが本県の課題で、県としては市町村に対しいろいろ仕掛けてハッパをかけているのだが…。
- ・獅子舞の伝承者が減少して、後継者が確保できない。
- ・担い手の減少、活力の低下、イベント化（イベントはいいが、後に何も残らない）。行政にいいように使われている。
- ・伝承者不足で失われそうな指定文化財があるので、地域での関心を高めていきたい。
- ・無形民俗文化財の保存継承のため、私の町では、そのための補助金交付要綱をつくり、力を入れてきたが、なかなか後継者の育成ができない（人がいなくなる。学校からの協力が得られない等）状況である。
- ・若い世代を取り込めない。後継者がいない。会計についてどのように管理しているか不明のため、補助金等の申請に積極的ではない。「祭礼」なので、決まった時にしか披露しない。そのため、普及しにくい。

【保護行政の課題】

- ・保持団体にまかせている所が大きく、行政としてコミュニケーションが足りていないと感じる。何かあった時にすぐ対応できないのではないかと不安。
- ・地方の小さな自治体には、無形の文化財がわかる人間が少なく、指定してもその後のフォローができない。
- ・保存会とのコミュニケーション不足、またどのように市と住み分けていくのか。
- ・文化財指定された無形民俗文化財、特に民俗芸能団体への補助のあり方について、有形であれば、修理費用の補助があるが、無形の場合、どのような点（部分）に補助すべきか。地域の差や平等性等、課題がありすぎて、どうすればよいか分からない。
- ・指定になっている無形民俗文化財について、氏子と保存会の対立が表面化している。かつてはひとつであった財布が2つになったことで、保存会に補助が入ることに対する氏子側の不満のようなものを感じている。
- ・無形の伝承の保存・活用全般に関してのマニュアルが無く、市町村によって対応に差があるので、県の担当者としては困っている。
- ・「無形」や「未指定」のものを、どこまで対象にすべきか、行政としての公平性や“全体の責任者”とのからみで判断が難しい。
- ・指定、未指定に関わらず、団体毎の民俗芸能への取り組み、熱意に差があるため、発表の場を作っても、出演団体が固定化してしまう傾向が見られる。指定の検討すら難しい無形の文化財による

地域活性化を推進すべきか否かの判断が難しい。

- ・調査、記録保存のための予算不足。

【現状把握・記録作成について】

- ・指定文化財であっても現状把握が不十分であること。
- ・モチベーションの低下と高齢化により、記録保存もままならない。
- ・過去に作成した記録類の散逸、劣化、旧メディアの再生方法がなくなる等の問題が進んでいる。それらの所在情報等を集約し、バックアップ、データベース化、情報発信のための体制づくりが急務になってきている。
- ・無形民俗文化財や無形文化遺産の映像記録を進め、アーカイブスを構築する中で、伝承されている技術そのものを記録することは人工知能（AI）などの分野からの接触も必要であると感じている。現代の最新技術が無形の伝承に関して果たす役割について模索できたらと考えている。

【その他】

- ・谷保天満宮の獅子舞保存会では、獅子頭に使用している羽根の代替を探しているが、現在使用しているものと同様のものが見つかっておらず、長年の課題となっている。現存しているものを、注意をはらって使っている状態。有形のものを再生させるための無形の技術（技・栽培・育成）などもあり、有形・無形の文化財は複雑にからみあっているものだと思う。
- ・地域に伝えられてきた祭礼や芸能は、近年、イベント性が強くなり、本来の意義が失われつつある状況である。しかしながら、地域で歴史的価値を肉付けし、文化財としての指定を求めてくる事も多い。このような中で、地域とともに無形や民俗文化財の本質的価値をどのように守っていくべきか悩んでいる。

（4）今後この研究協議会で取り上げて欲しいテーマやその他のご要望などがありましたら、お書きください。

- ・神奈川県から九州・宮崎にかかる南海トラフ地震についての対策
- ・地域の文化、歴史、信仰に関わる無形民俗文化財
- ・動物の民俗、飼育者への支援
- ・青少年へのアプローチ
- ・地域の伝承の好循環がどうやったら生み出せるか、障壁はどこにあるか
- ・民俗行事等、地域や生業とかかわりがあり、失われつつあるものの継承をどうするか
- ・無形文化の変化をどう考えるか。伝承者の減少や継続の難しさなど
- ・文化財と観光やまちづくりについて
- ・観光振興施策の推進と無形民俗文化財の関わり方
- ・2020年東京オリンピック・パラリンピック文化プログラムにおける無形民俗文化財の活用
- ・無形文化遺産と地域振興、価値の再発見
- ・未指定の文化財の保存活用の現状などが判ればありがたい
- ・映像資料のリスト化とデジタル化及びアーカイブと活用（公開）

- ・文化財の「活用」の話題がいつのまにか“文化遺産”の活用に流れていることが多いように思う。文化遺産ではなく文化財を活用している（保護の目的に沿った使用）例があれば取りあげ、改めて「文化財の活用とは何か」を考える機会があると良いと思う
- ・民俗技術の記録作成、技術の復元と継承について
- ・以前にもあったが、記録作成とその共有について、認識がより高まっている現在やってみたらどうか
- ・これからの無形民俗文化財保護のための記録のとり方（報告書、写真、映像…）。理論的なものよりも具体的、実践的な内容を考えていくこともプロセスとして大事なことがあると思う
- ・効果的な映像記録の撮り方と手法について
- ・各団体、市、行政などと円滑に連絡をとることのできる枠組みづくりについて
- ・無形の文化財の範囲をどこまでにするのかの課題は、もう少し、協議があると良い
- ・ネットワーク形成に当たっての具体的な取り組み
- ・有形に比べて、無形や民俗の専門職員を配置している自治体は少ない。市町村ではなおさらである。保護に取り組んでいくためにも、捉え方や基礎的な理論について学ぶ場がほしい
- ・もう1～2度、同じテーマでも良いと思う。具体的な取り組みのモデルを提示して、どの自治体でもやってみましょうという話まで提示し、具体的な悩みや問題を解決するようなディスカッションにしてはどうか
- ・岡部さんの話を聞いて、無形の文化財を支える有形文化財について知見を深められたらと思った
- ・午前中と午後の内容（有形の発表部分）のつながりにやや無理があったのでは。これは批判というより、それぞれ別に扱える重要な点と思われる。もっとも「無形民俗文化財研究協議会」としては午後に単独で扱うのは難しいのかもしれないことは理解している
- ・基本的な解決策がないので、様々な事例を伺い、現状にフィードバック出来る機会を作っていただければと思う
- ・今回のテーマでもおそらく明確な解答は出ないと思うので、こうした事例を聞き、検討する場が継続されるのがよい
- ・今回の発表内容が、次回協議会開催時までにはひとつでも具体的に解決できたらうれしく思う

参加者一覧 (50音順・敬称略)

明本 遥	エリザベト音楽大学大学院	久保田 裕道	東京文化財研究所
浅野 璃奈	東京文化財研究所	熊谷 博人	神社新報社編集部
東 資子	一関市教育委員会	栗林 由美子	墨田区教育委員会
渥美 和彦	(株) デジタルプレイス	黒河内 貴光	東京文化財研究所
安齋 順子	くにたち郷土文化館	黒崎 浩行	國學院大學
飯島 満	東京文化財研究所	桑原 雅子	松戸市教育委員会
石田 千恵子	川越市教育委員会	小岩 秀太郎	(社) 全日本郷土芸能協会
石村 智	東京文化財研究所	瀧瀬 茂	名古屋市教育委員会
伊藤 純	東京文化財研究所	小島 誠一郎	(株) ナブラ・ゼロ
伊藤 大志	朝霞市教育委員会	後藤 知美	埼玉県生涯学習文化財課
井上 素子	東京国立博物館	小林 裕美	千葉県教育庁
井野 千春	群馬県教育委員会	齊川 昭二	板橋区立郷土資料館
今井 雅之	東北歴史博物館	佐下橋 容代	(公財) ポーラ伝統文化振興財団
今石 みぎわ	東京文化財研究所	佐田尾 信作	中国新聞社
入澤 紀	東京八重山郷友連合会	佐藤 周平	上尾市教育委員会
内田 幸彦	埼玉県立歴史と民俗の博物館	佐野 真規	東京文化財研究所
内山 大介	福島県立博物館	篠崎 茂雄	栃木県立博物館
江藤 奈月	目黒区めぐろ歴史資料館	清水 博之	茨城キリスト教大学
大河内 智之	和歌山県立博物館	志村 映美	東京文化財研究所
大島 建彦	東洋大学名誉教授	鈴木 伸子	長野県教育委員会
大貫 美佐子	アジア太平洋無形文化遺産研究センター	鈴木 正崇	慶應義塾大学
大本 敬久	愛媛県歴史文化博物館	角 美弥子	北海道教育大学
大森 韶光	西福寺	関 孝夫	上尾市教育委員会
大山 孝正	福島県文化財センター白河館	仙田 力	世田谷区教育委員会
岡部 達也	宮本卯之助商店	田井 誠	共同通信社
岡本 雅子	花巻市教育委員会	高木 翼郎	小金井市教育委員会
小田原 直也	東京文化財研究所	高桑 いづみ	東京文化財研究所
尾曲 香織	北海道博物館	高橋 淳子	さいたま市生涯学習部
柿本 雅美	佛教大学宗教文化ミュージアム	武井 成美	東京文化財研究所
河西 裕	NPO 文化遺産保存のための映像記録協会	館野 太朗	東京文化財研究所
加藤 隆志	相模原市立博物館	田仲 桂	いわき市文化財保護審議会委員
門口 実代	三重県総合博物館	谷川 隼也	川口市教育委員会
金子 征史	八王子市教育委員会	田村 聡	神奈川県教育委員会
亀井 伸雄	東京文化財研究所	寺澤 健造	(一社) 全国農協観光協会
狩野 萌	東京文化財研究所	戸田 剛	浜松市市民部
川井 結花子	東京文化財研究所	戸張 真	草加市教育委員会
菅野 泰久	船橋市郷土資料館	富永 優	儀礼文化学会
菊池 理予	東京文化財研究所	中島 誠二	(株) シマワークス
菊池 健策	東京文化財研究所	中村 規	都市民俗研究所
岸岡 貴英	京都府教育庁	中村 晴菜	(一社) 全国農協観光協会
岸本 誠司	鳥海山・飛鳥ジオパーク構想推進協議会	中森 祥	鳥取県教育委員会
木原 善和		中藪 規正	(一社) 文化財共働
木村 真理子	栃木県立博物館	名越 章浩	NHK

西岡 陽子	大阪芸術大学	山下 祐樹	熊谷市立江南文化財センター
錦織 稔之	島根県教育庁	山田 あさぎ	戸田市立郷土博物館
根本 瑞穂	稲城市教育委員会	山田 あづさ	軽井沢町教育委員会
野嶋 洋子	アジア太平洋無形文化遺産研究センター	山田 尚彦	松戸市立博物館
萩谷 良太	土浦市教育委員会	山村 恭子	館山市教育委員会
橋本 かおる	東京文化財研究所	井汲 真佐子	川崎市教育委員会
波田 尚大	武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館	吉田 政博	板橋区教育委員会
服部 武	さいたま文学館	吉原 睦	倉敷市教育委員会
浜島 司	まつり同好会	渡瀬 綾乃	東京文化財研究所
林 勲男	国立民族学博物館	Helga Janse	筑波大学
林 圭史	茨城県立歴史館		
東玉盛 靖修	東京八重山郷友連合会		
俵木 悟	成城大学		
平林 洋子	静岡県教育委員会		
福持 昌之	京都市文化市民局		
藤井 祐子	世田谷区教育委員会		
伏見 英俊	智山伝法院		
二神 葉子	東京文化財研究所		
保坂 匠	小田原市郷土文化館		
細見 吉夫			
前原 恵美	東京文化財研究所		
真木 優輔	青梅市郷土博物館		
真島 俊一	TEM 研究所		
増山 一成	中央区立郷土天文館		
松井 今日子	芸北民俗芸能保存伝承館		
松崎 睦彦	東村山ふるさと歴史館		
丸尾 依子	山梨県立博物館		
丸山 修	霞が関ナレッジスクエア		
道澤 明	横芝光町教育委員会		
三宅 豊	日の出町教育委員会		
三宅 貴江	滋賀県民俗文化財保護ネットワーク		
宮前 功	東京都教育庁		
宮本 瑞夫	(一財) 宮本記念財団		
村上 裕道	兵庫県教育委員会		
森井 順之	東京文化財研究所		
森 悦子	調布市郷土博物館		
森下 春夫	(社) 全日本郷土芸能協会		
森本 仙介	奈良県教育委員会		
八木 三香	NPO 法人文化財保存支援機構		
八木 良憲	共同通信社		
矢田 直樹	滋賀県教育委員会		
山川 志典	東京文化財研究所		
山崎 和巳	多摩市教育委員会		

第 11 回 無形民俗文化財研究協議会報告書

無形文化遺産と防災

ーリスクマネジメントと復興サポートー

平成 29 年（2017）3 月

編集・発行

独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所 無形文化遺産部

〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43

TEL 03-3823-4925